
龍の逆鱗

銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の逆鱗

【Zコード】

Z0606Y

【作者名】

銀狼

【あらすじ】

小さな島国『大和』で忍となるために修行を積んできた少年、東龍斗。使いを頼まれて船旅に出たが、海上で嵐に遭ってしまう。気付いたとき、龍斗の前に現れたのは死んだと思われていた人物。辿り着いたのは、祖国の常識では計り知れない「異世界」だった。その先に、一体どんな運命が待っているのか……

第1話・四十九日明けて

季節は夏、山の木々は新緑に染まり、空には雲一つない青空が広がっている。東龍斗あずまりゅうとは一人山道を歩きながら、日光を透き通す木の葉などを何の気なしに眺めていた。島中を歩き始めたのは約一ヶ月前だが、その時とはすっかり景色が変わっている。時折聞こえる野鳥の声に、あの鳴き声はなんという鳥だったかと思いを馳せる。だが今回はその思考を遮られた。

「よう龍斗」

「……何だ、遠矢か」

立ち止まつた龍斗の前には一人の少年がいた。齡十五齡十五、龍斗と同じ年に生まれ、同じ道を志してきた友人の一人、富原遠矢みやはらとおや。突然声を掛けられたことで素早く身構えた龍斗だが、黒髪に茶色い目の相手を認識すると警戒を解いた。それを見た遠矢は苦笑した。

「ははは、相変わらずだなお前は。家もそうだけど、生糸、ていうのかな」

「当たり前だ。いつ何が敵になるか分からんからな。とはいっても月近くまともに動いてなかつたら流石に駄目だ。気付くのが遅れだし、気が散つてた」

ため息交じりに首を横に振る龍斗。それを見た遠矢も一つ息を吐いた。嘆息ではない。寧ろ安堵した様子である。

「安心した。龍誠殿りょうせいじんが亡くなつた後大分落ち込んでたからなあ。心配して損したぜ」

「そりやどうも。まあ四十九日も終わつたし、今日からまた修行を再開するつもりだ」

「……大丈夫か、本当に？」

心なしか暗い声色の返答に、遠矢が念を押す。

「大丈夫だよ、なんのための四十九日だ。じゃな、俺行くわ」
龍斗は笑いながらそう言つと山道を降りていった。後に残された

遠矢はその後ろ姿を見ながら咳く。

「……こっちだって忍を目指してゐる身だ。目が笑つてねえことくら
い分かるつてんだ馬鹿野郎」

龍斗の目を思い出しながら、それでも彼を追いかけることなく山
道を進んでいった。

龍斗の家は忍としてそれなりに優秀な家であつた。祖父の龍誠、
父の遼一もまた忍として働いていた。物心ついた時から忍に憧れ、
忍の道を志すのは自然なことだった。

山を下りた後、自分の家の前を通り過ぎて大通りに出た龍斗。町
の人々はいつものように商売をしていた。お客様は神様だ、という
精神で誰に対しても丁寧に、円滑に会話を交わしている。

（けどこれも、一度豹変したことがあつたな）

龍斗は思い出した。街行く人々の目は黒か茶色。だが龍斗はそ
のどちらでもない。一見すると黒に見えるのだが、近くでよく見ると
それは青みがかつた深い色、藍色であることが分かる。それは別に
問題ではなかつた。だが彼の母親の存在が問題だつたのだ。この街
にとつては、母が異質だつたのだ。

異国から流れ着いたという母はこの国にはない金髪、青い目を持
つていた。その後家族全員で村八分を受けた。人は異質を排除しよ
うとする。それが分からなかつた龍斗はただ悔しさに涙を滲ませた。
父と祖父の口論が記憶に残つてゐる。真剣を持つての死闘が繰り広
げられたことも覚えている。時間が経つて母という人間が理解され
ていくと村八分もなくなつた。

龍斗はいつの間にか左手で片目を押さえていることに気付いた。

軽く首を振つて歩き続け、目的地に到達する。

そこは修行場と呼ばれる場所で、何もない広場で何人もの人が手

合せを行つてゐるのが見える。それを横田に、龍斗は一つの小屋に辿り着いた。玄関先に立つてゐた人に名を名乗る。

「東龍斗です」

「おお、待つとつたぞ。この度はその

「もういいですよ、その挨拶。聞き飽きましたから」

「……そうか。なら早速じやが一つ頼まれてくれんか」

龍斗と話していた人物、藤堂源一は一つの手紙を取り出した。見た目はただの杖をついた老人だが、かつては忍の最高位にいたこともあるという人物である。師範として若き忍を育てる今もその力は衰えていない。杖もただの杖ではない。中には鋭利な刃が隠されているのだ。性格もそれに似たようなもので、穏やかで気さくな所もあるが、忍という道に関しては一切妥協を許さない。自然災害など致し方ない障害に阻まれた時も情を捨てて忍を辞めようと切り捨てる、厳格な性格である。そのふるいにかけられて忍になることを諦めた人間が多くいることを龍斗は認識していた。

「この手紙を御蔵島の時田さんに届けてほしい」

「分かりました。出来るだけ早く届けるようにします」

「ほつほつほ、まあそんな急ぎでもない。他所の島の様子でもゆつくり見てくるがいいさ。それが復帰第一号の修業じや

源一はそう言つて小屋へと消えていった。龍斗は首をかしげた。手紙の裏を見てみたり、日にすかしたりしてみるが、特に変わったところはない。

結論が出たのは龍斗が自分の家に帰つてからだつた。家にはもう誰もいない。その事実がきつかけだつた。

（そうか、この島を出て、他所を見て氣を晴らせと。藤堂さんらしい不器用なやり方だ）

口角の一端を上げながら龍斗は家に入った。

翌朝、龍斗は一人旅支度を整えて家を出た。いつもの格好に、父の形見である太刀、祖父の形見である脇差を身につけて誰もいない大通りを闊歩する。今はまだ日の出前、よほどのことがない限り人は起きていないことはない。左肩に担ぐ麻袋には最低限生活に必要なものを入れた。母が作ったこの袋は一重構造になつており、袋の中にさらに小さな袋が付けられていた。大きさがちょうどよかつたので手紙はそこに入れてある。路銀 旅に必要なお金のことだが、有り金全てを持つていくことにした。何時何でどれだけ必要になるか分からぬし、家に置いておいても得はない。寧ろ泥棒に盗られる心配がある。知らない間に盗られてしまふ、より自分で持つて賊に狙われる方がまだ救いがある。

（それに金は無くて困ることはあつても有つて困ることは……あるな、やっぱ）

歩く度に首を立てる腰辺りに田をやる龍斗。そこにつけられた巾着袋には金、銀、銅で作られた貨幣が入つている。ここ玲角島れいかくとう、これから向かう御藏島みくらじま、その間にある徳間島とくまじま以下数個の島からなる国『大和』で流通しているお金である。金が最高価値に定められて、るために物価が安定しやすいのだと誰かから聞いたことがある。それはいいのだが、問題が一つあつた。貨幣とはいえ金属は金属。持つ金額が増えれば増えるほど荷物が重くなってしまうのだ。

（まあいいか、ほんとに盗られるよりはましなんだから）

道は大通りから横道にそれ、森の中へと続いていく。草木が生えていないその道を進んでいくうちに、磯の香りが強くなってきた。やがて森を抜けると、そこには白い砂浜と、赤く染まり始めた朝焼けの空、そしてその光を反射し白い波を立てる大海原が画面いっぱ

いに広がった。龍斗はそこから左に移動していった。やがて大きな小屋と桟橋が見えてきた。龍斗は小屋の前に立ち、扉を数回叩いた。海に出るにはこここの貸船屋で舟を借りる必要があるのだ。

「はいよ……ああ、龍斗君かい」

眠い目をこすりながら戸を開けたのは、主人。巾着から銀貨一枚を取り出し男に言つ。

「御蔵島まで行くから、出してもらえますか」

「へえ、そりやまた遠出だねえ。なら帆かけの方が良い……でも悪いな、金一、銀一になつちまうぜ」

「ん……まあいいですよ」

龍斗は巾着の中身を探り、金貨を探し出して主人に渡す。

「やつぱり舟は高いですね」

「まあな、他所の島に行くには、これが自力で泳ぐかしないと。それと原因はやつぱり野分と鮫だな。あれに出くわした舟がぶつ壊れたり、かなりの損傷受けたりで、もう修理代が馬鹿にならん」

神妙に頷く龍斗。実際彼が覚えているだけでもかなりの数の舟がその被害にやられている。一部が割れて沈没しかけていた時もある。見送つた船が木片と化して帰つてきた時もある。被害にあつのは舟だけではない。それに乗つっていた人間も、なんとか無事に帰つくる者、波に襲われ溺死した者、舟ごと行方不明になつたままの者もいる。その中には龍斗の親族や友人も含まれている。そして彼は今後そうなる可能性のある人物である。決して他人事ではないのだ。

桟橋に出て待つていると主人が舟を出してきた。中央には一本の柱が立つてあり、折りたたんだ白い布がその下にあつた。龍斗は主人と共に舟を後ろから押していき、海に浮かべて乗り込んだ。

「風があつたら帆を張つとけ。艤^るや櫂^{かい}で行くより楽だからな。何かあつたら近くの船屋に寄れ。舟つてのは組合で共有してゐるもんだからどこのどの舟でも一緒だ」

わかりました、と返事をして舟の後ろにある艤を漕ぎ始める龍斗。手を振つて見送ろうとした主人だが、手を挙げようとした瞬間

あることに気が付いて龍斗に叫ぶ。

「おい！！」

その声に反応した龍斗が振り返ると、何か光るもののが飛んでくるところだった。思わず掴みとったそれを開くと、龍斗の目は皿のように丸くなつた。思わず掴みとつたそれを開くと、龍斗の目は皿のように丸くなつた。思わず掴みとつたそれを開くと、龍斗の目は皿のように丸くなつた。

「その疑問を口にする前に、投げた本人が声を張り上げた。

「進水式代わりだ！！ 生きて帰つてこいよー！ 良い旅を！－！」

思わず笑みを浮かべた龍斗。大きく手を振つている主人に手を振り返し、龍斗はまた櫓を漕いだ。

いつの間にか空には白い雲が浮かんでいた。龍斗は人差し指を立てて睡をつけ、目線の高さに持つていった。風が当たるとそこだけ冷氣を感じる。こうして風向きを把握した龍斗は、次いで進行方向を確認した。出発した玲角島は後ろ、太陽は少し高度を上げたものまだ東にある。そして前方に小さく見えるは中継地点の徳間島。その島の船屋にこの舟を任せ陸地を移動、反対側の船屋でまた舟を借りる。そしてようやく御蔵島へとたどり着く。払ったお金は御蔵島までの往復にかかる料金である。いちいち支払いをしていつものだが、まとめて支払うと幾らかおまけしてくれる。組合員による証明証を見せればこの方法でも問題はない。その証明証は麻袋の中、手紙と同じ場所に大事にしまつてある。

龍斗は帆を張ることにした。航路に對して追い風という絶好の機会を逃すわけにはいかない。白い布が上がる、それまでよりも速い速度で進んでいった。龍斗はふと振り返り玲角島を見た。既にかなりの距離を進んでいたが、まだ島は視認出来た。一つ息を吐くと、心の中で島に語りかけた。

(暫く離れる。ま、すぐに戻るさ)

進行方向に間違いがないことを確認して、龍斗は舟に寝転がつた。

これが、龍斗が見る最後の故郷の姿であるとは知らずに……

第3話・極楽浄土か奈落の底か

何処だ、ここは……

龍斗は薄く目を開けた。視界がぼやけてはつきりせず、色しか認識できないでいた。だがその色も白一色しかない、と思つた瞬間に黄色い色が現れた。青い点が現れたと思うと、すぐに振り返つて何を叫ぶ。

(……ん?)

龍斗はそこで違和感に気付き、数回の瞬きをした。視界がはつきりした瞬間、龍斗は文字通り飛び起きた。その勢いのまま足裏をついて体を起こし大きく跳躍、着地と同時に片膝をついて振り返つた。突然のことに啞然とした様子の男女がそこにいた。藍色の鋭い目が一人を捉え即座に判断する。

(立つてゐる男は茶色の髪、特に武器は持つてない。座つてゐる女は口元に手を当ててゐる。髪は金で目は青い……ん? 青眼金髪?)

龍斗が眉を顰めたのと、新たな人間が入つてくるのとはほぼ同時だつた。

「目覚ましたつて!?

「ホントに!?

声の主に目を向けた龍斗は顔を認識した瞬間に驚愕した。普段は滅多に素の表情を見せない龍斗だったが、この時ばかりは違つた。「連、それに、霞……ああ、そういうことか。で、ここはどっちだ。極楽浄土か、奈落の底か」

一人納得する龍斗の言葉を聞いた二人は顔を見合わせる。その後しばらく二人の笑い声が部屋を占めることとなつた。

「いや悪かつたよ。あんな真剣な顔で言われたらさ」「目が覚めたら死んだと思つてた人間がいる。死んであの世行き

を考えて何が悪い」

「あーひどーい、あたしを勝手に殺さないでよー」

「大和じやもう死亡扱いになつてゐつづーの。行方不明になつてから何年経つたと思つてるんだ」「

氣分が落ち着いた龍斗は今自分が寝かされていた寝台に座り、後から入つてきた二人　鳥丸連と斎藤霞からすまれん　さいとうかすみを相手に話をしていた。二人とも龍斗と同じ国で生まれ育つてきたが、何年も前に行方不明となり、国内では既に死亡したものと看做みなされていた。だが今こうして目の前で生きている。夢でないのは、傷む左足が証明していた。そのことを問うと連が丁寧に教えてくれた。

「龍斗はさ、舟に乗つて海を渡ろうとしたんだよね」

「ああ、そうだ」

「で、突然の嵐　野分に遭つた」

「ああ、そうだ」

「で、荒れ狂う波に襲われてゐつづに氣絶してしまい、気が付いたらここに流れ着いていた」

「ああ、そうなるな」

「俺たちも一緒なんだよ。普段なら全く問題なく渡れる航路を進んでいつてたのに、突然の野分、訳の分からぬ海流、進路の間違い、様々な原因を経てここに流れ着いた。そして助けられた」

「あたしもそうだよ、と。はい終了」

左足の包帯を取り換えていた霞が作業を終えて立ち上がった。

「悪い、ありがとな」

「どういたしまして、お兄ちゃん」

礼を言つた龍斗だったが、霞の返答を聞いて背筋に寒いものを感じた。

(「こいつ……あ、そうか、こいつもあの一派の一員だつたか）

霞は悪戯心に満ちた笑顔でこちらを見ている。一方の連からは疑問の念がひしひしと伝わってくる。ちつと鋭く舌打ちしたところで横から白い手が伸びてきた。

「仲がいいのね3人とも。はい、どうぞ」

「あ、有難うござります」

それは最初から部屋にいた金髪青眼の女性だつた。白い小さな器を受け取ると、両手から温もりが伝わつてくる。湯気を立てている中身を見ると、同じく白い水のようなものが入つている。

「ホットミルクよ。体が温まるわ」

「ほつと……みるく?」

言葉に違和感を感じたが、他の一人は全く氣にしていない様子で中身を飲んでいる。龍斗もそれに倣つて器を口元に運んだ。

(……美味しい)

ほのかな甘みが口に広がり、熱が体の芯を通つていく感覚を味わう龍斗。そして、器の中身の正体にも気づいた。

「これ、牛乳か」

「そう、牛乳に砂糖を入れて温めてあるんだよ。大和にはないよねこつこつの」

霞が笑つて返してきた。ホットミルクを半分ほど飲んだ後、龍斗はあることに気付いた。左手の人差し指を親指に引っ掛け、手に持つた器の端を軽く弾くと、キンという澄んだ音が響いてきた。

「陶磁器の小さな器……これ、『コップ』てやつか?」

「正解よ、よく分かつたわね」

渡してくれた女性がそう言つた。龍斗は数秒目を閉じた。再び目を開けた時、彼の頭の中では氣が付いてから今までに得た情報が整理され始めていた。

(舟による難破、漂流。過去に同じように流された奴らの一部が生きてる。馴染みのない調理、陶磁器製の器コップ。何より……金髪青眼、母の言葉)

「そうか、此処が……母が元いた世界、異国か」

まったく無意識のうちに龍斗の口から結論がこぼれ出た。

だが龍斗には一つ疑問に残つたことがある。連や霞は答えを知つていそうなので率直に聞くことにした。

「ijoが異国なら言葉は通じないとあるんじやないのか、確か「つる覚えの情報の真偽を確認する龍斗。今までの流れから考えて金髪青眼の女性は龍斗から見て異国の人間。そして大和の者と大和の言葉を用いて会話をしている。自分も聞いて受け答えしたのだからこれは紛れもない事実である。だが彼女以外はどうだろうか。もし方言のように言語の違いがあつたならどうすればいいのか。そう言つたところを聞いたのだ。

「ああ、それね。龍斗は聞いたことないか？ 今の大和に繋がる系

譜の国が遙か昔に全ての陸地を支配したっていう話」

「端的に言えば、それは事実でしたって言うことになるわね」

連の話を霞が締めた。連が言つたのは大和に伝わる有名な言い伝えのことだ。全ての陸を支配し、言葉も通貨も文字も、全てを統一したまさに天下一の英雄伝。最初聞いたときは眉唾物だつたが、ここにきて何年も過ごしている彼らがそう言つのなら事実だつたのだろう。彼らが嘘をつく利点もない。

「まあ文字は大和でも使う漢字ひらがな以外に、カタカナやアルファベットつてのがこちら独自の文字としてあるんだけど。あと数字かな、漢数字じゃなくてアラビア数字使つよ」

龍斗は頷いた。幼い頃から異国出身の母によく言われていたことである。

「分かつた。意思疎通については問題ないんだな。じゃあ次に……」

第4話・家族の形見、忍の名乗り

「じゃあ次に、俺の荷物は？」

「ああ、そここのテーブルの上にある。ちよい待つてな」連が椅子から立ち上がり、寝台の横にあつた棚のような物の所へ移動する。腰くらいの高さがあるそれの上に麻袋が置いてあつた。その台の横には太刀が立てかけてあるのも見える。そう、父の形見として持つてきたあの太刀である。

連が戻ってきた。椅子に座りながら龍斗に袋を渡す。

「はい、これ。一応中身確認して」

龍斗は言葉が終わる前に袋を開け、中身を確認していた。着替えの服、金の入つた巾着袋、非常食の兵糧丸、中にあるのは龍斗が入れたものと同じ。極めつけは中にあるもう一つの小さな袋。

「お、この麻袋、ポケット付いてたのか」

どうやらポケットと言つらしい。龍斗はそのポケットから手紙と証明証を取り出した。手紙に書いてある差出人の名前は藤堂源一、証明証にもあの貸船屋の主人の名前が書いてあつた。何より、龍斗にとつて最も大切な物を見つけることができた。

「ああ、良かつた……爺さん、母さん、美夜」

手に取つたのは形見の品。祖父が持ち歩いていた脇差。妹の美夜が愛用していた簪。かんざし母が首に卷いていた細い鎖。金貨のような色で輪になつており、真ん中辺りには貝を象つた飾りがついている。

「あら、ネックレスなんて持つてるの？」

「ん、どれどれ。おお、本当だ。異国にもあつたのかい？」

金髪の女性と茶髪の男性が母の形見を見てそう言つた。

「これ、ネックレスつていうんですか？　いや、大和にはこんなものはありませんよ」

「じゃあなんで？」

男性が首を傾げた。存在しないはずのものを何故持つているのか。

当然の疑問である。

「母が持つてたんです。ここからは俺の想像ですが……恐らく母は元々こちら側の人間だった。だから、こっちにしかないものを持っていた。こっちの知識も知つていた。多分俺らとは逆に、こっちから大和へ流されたんだ。で、父さんと結婚して俺が誕生、そんなとこだな。それと連、霞が流された後ずっとこっちで暮らしていた事を踏まえると……」

注目する四人の顔を一瞥し、龍斗はため息をついた。

「やっぱ、大和には戻れないんだろうなあ」

最後の推量に連が言葉を返した。

「多分、それであつてると思うよ。実際こっちじゃ金髪青眼の人は多いし。ただ一つだけ訂正。確かにこっちから向こうに帰るのはほぼ無理だけど、向こうからこっちに来るのは案外難しい話じゃない」

「……どういうことだ？」

龍斗の目は連を捉えた。続きの言葉に耳を傾ける。

「あの辺には独特的な海流があつてね。トリトン海流っていうんだけど、その流れの方向が大和からこっちに向かつて大きな渦を巻くようになつて流れているのさ。それに乗つて上手く離れられればこっちに辿り着くことができる。但し、あまりに深いところに乗つてしまふと渦から逃れられなくなつて結末は沈没しかない。そして流れは一方通行だからこっちから大和方向へは行けない。極稀に別の海流とぶつかつて流れが止まるっていう話もあるけど、それが起こるのは何百年に一回とか言われているし、都市伝説みたいなもんだと思つた。けど」

「その何百年かに一回の海流に乗つて、母さんが大和に來たと考えれば辻褄は合う、か。都合も運もあつたもんじやねえな」

いつ発生するか分からぬ海流に偶然遭遇し、異国の者を受け入れる父に出会う。奇跡としか言いようがない、と龍斗は思った。

「でも東君、海流に乗つてきちゃつたんだよね。きっとご家族も今

頃心配して

「

「ばっ、おい！！」

霞の言葉を聞いて慌てて止めに入った連。だが話の肝心な部分は既に言つてしまつてゐる。龍斗は苦笑した。その表情はどんく陰りが見える。

「いいよ、連。隠したつて仕方ない。去年のことだから、お前はまだいたけど、その前にもう霞はいなかつたからな。家族は死んだよ。父、母、妹は土砂崩れに巻き込まれて、爺さんも一ヶ月ほど前、老衰で亡くなつた」

「あ……ごめん……」

「マジかよ、龍誠殿まで……」

部屋を沈黙が支配した。見知らぬ男女も家族の死という話題で言葉を失つてゐる様子。

「あ、でも、そう、だから俺は大和にはもう未練はない。帰つたところで何にもないしな。むしろこっちに来て良かつたかもしれん。心機一転だな」

その笑顔は大和にいた時、富原遠矢に見せた顔と同じだつた。顔から相手の心情を読むという忍の修行を積んでいた霞だけではなく、その修行をしていない連や男女にも龍斗の本心は伝わつてしまつてゐる。空元氣は部屋の空気をさらに空しくさせるという結果に終わった。

その後暫くして、連、霞は部屋を出でていつた。ふと見ると、頭上に見える壁の一部に穴が開いており、そこから茜色の光が部屋の中に差し込んでいた。この家の主であるといつて一人組もいつの間にか部屋を出でていた。

龍斗は一人寝台の上で仰向けになつてゐた。だがその目はすぐそこにある天井を見てはいない。

（何やかんや言つても、俺はこっちの世界のことを知らない。明日からその辺を学んでいくしかないな）

扉を叩く音がした。はい、と返事をすると金髪の女性と茶髪の男性が入ってきた。女性が両手で運んできたものをテーブルに置いた。どうやら食事のようだ。体を起こし、寝台から足を下ろして座る龍斗。

「はいどうぞ。あなたの分の夕食。ちゃんと食べないと回復は遅くなるわよ」

「すみません、色々世話になってしまって」

「はは、構わないよ。困ったときはお互い様、だつけ。そう言つんだろ、ヤマトでは」

男性の方が笑いながら言つた。一瞬龍斗は目を見張つたが、すぐ元に戻した。考えてみれば自分が来る前から何人もの大和人が流れ着いていることだろう。言い回しが伝わっていても何ら不思議ではない。

「有難うござります。えつと……」

お礼を言おうとしてはたと気づいた。この二人の存在を認識してからかなり時間が経つたが、一度も名前を聞いていない。そのことに気付いた男性は申し訳ないといった様子で頭を搔いた。

「あ、すまない。あまりに楽しく会話してたもんだから、口をはさめなくてね。僕はトマス・デイビス。トマスが名前で、デイビスが名字ね。年は42歳だよ」

「私はベラス・デイビス。この人の妻よ。年は……あまり言いたくないけど34歳。よろしくね」

龍斗は素直に驚いた。見た目だけの判断では龍斗はもっと若いと思っていたからだ。しかし年齢判断は特に重要なことではないし、元より外すことの方が多い。なので今回も龍斗は判断の間違いを気にしなかった。

龍斗は立ち上がり、初めて男女を見た時と同じように片膝をついた。元々左足を立てる癖がついているので、体重を右足にかけると痛みはさほど感じない。正座や立礼も知っているが、足への負担を考えればこっちの方がいい。それにこちらでの礼儀はほとんど知ら

ない。故に自分が一番よく理解している忍の礼儀を選択したのだ。
「東龍斗……いや、リュウト・アズマ、齡十五。以後宜しくお願い
申し上げます」

木製の扉を開け放つと、そこは異世界であった。勿論比喩的表現もちろんではある。龍斗は海を渡つただけで世界を渡つたわけではない。だが目の前に広がる景色は、元いた大和と比較するとあまりにも違っていたのだ。

快晴の空の下、雲を全て大地に引きずり下ろしたかのように街が白い。龍斗は2～3段の階段を下りた。足元を見てみると床も地面が露出せず、何かが敷かれてやはり白くなっている。降りきつたところで後ろを振り返る。今しがた龍斗が出てきた建物も例外なく白かった。

そうして建物の壁を見ているとき、龍斗の第六感が何かの到来を知らせた。すかさずその気配の居所を探る。忍として生きるためにはどんな些細な変化でも見落としてはならない、その教えが身に染みているのだ。

（2人、1人は軽く走ってきてるか。多分……）

「霞だろ」

すぐ後ろにまで来た気配に、振り返らないままそう言った。気配の主はそれを聞いて身震いした。

「お、おはよう東君、な、なんで分かったの？」

「お前も忍目指してたんなら分かるだろ、つと」

言いながら振り返った龍斗は、霞が着ている服に驚き言葉を詰まらせた。桜の花のような色の袖が短い上着、足を見ると白い袴のようものをはいているが、その長さはかなり短く、膝まであるかないかというところ。履物も草履ではない。栗のような色をして、足全体を覆うような作りとなつていて。

そうして観察しているうちに、さつき感じた内のもう一つの気配がすぐ傍まで近づいてきた。龍斗はまた姿を確認することなく正体を言い当てる。

「遅かつたな連」

「おつ、いや、霞が勝手に走つてつただけだよ。後ろ向いてたから
脅かそうってな」

「だと思つた。脅かすのなら成功してるぜ、つと……お彼らのその
格好で」

霞の向こうにいる連に目を向け、またその格好に言葉を詰まらせ
る。連の格好は霞の色違いとも見える青い半袖の上着、下は一本の
筒に足を通す感じの物をはいている。因みに色は黄土をかなり薄く
したような色だつた。昨日会つた時には全く気付かなかつた、とい
うより格好にまで気が回つていなかつた。

「ああ、そうか。この上着はシャツ。下にはしているのはズボン」
「あたしがはいてるのはスカートだよ」

聞けばこちらではこの格好が普通なのだといつ。異国の神秘だと
龍斗は思う。だが今はそれを学んでいかなければならない。目的
地に向かう間、取り敢えず龍斗は根本的なところから聞くことにし
た。

「そういうや昨日散々こつちこつちて言つてたけど、こいつて何処な
んだ？」

すると連は少し意外そうな顔をして口を開いた。

「小母さんから聞いてないのか。ここはランドレイク大陸つて名前
だよ。文字通り、大和とは比べ物にならないほど大きい陸なんだ」
「その中で最も東に位置する、つまり大和に一番近いのがここ、『
商業都市國家オリジア』だよ」

途中から霞が説明に加わつた。龍斗は記憶を辿つてみたが、母か
ら大陸の名前を聞いた覚えは無かつた。気を取り直して次の質問に
映ることにした。

「やけに白い街だけど、これ建築資材は何だ？ 同じものが足元に
も敷いてあるし」

「大陸の家は大抵が石造りだよ。木製の家もあるけど、大和にあつたような茅葺き、瓦屋根、漆喰とかは無い」

「敷いてあるのも石を加工したものだよ。その町の中で重要な道は大抵こうなってるね。例えば王様の住む城に続く街道とか。あ、ここには王様はいないよ。ここは商人達が統治してるから」

「へえ、商人がね」

「それもこれもここに経済の大事な拠点があるから……あ、着いたよ。ここ」

三人は石畳の街道の終着地点に来ていた。そこにあつたのは他の建物とは比べ物にならない程大きな建物。ただ大きいだけではなく、所々に曲線を描くように石が並べられていたり、壁石の表面が綺麗に磨かれていたりとかなり手の込んだ造りがあり、この街の象徴ともいえる存在感を放っていた。その荘厳さに思わず啞然とした龍斗だつたが、入口前の屋根を支える柱に気付いた。

「なあ、あの柱はなんで赤いんだ？」

「ああ、あれは煉瓦っていうの。土を焼き固めて作ったものだよ」霞の情報によると、石の代わりに煉瓦を使って建てられた家もあるとのこと。その説明の後、霞は入口の上を指さした。龍斗もその方向に目を向ける。

「あれが銀行の印。^{マーク}黄色い大きな円に模様、つまり金貨を表しているの。で、その下にアルファベットで BANK つて書いてある。分かつた？」

「なるほど、絵で何の店か分かるのか。中々便利だな」「ここで連が気になつたことを口にする。

「そう言えば龍斗、アルファベットの綴り読めるのか？」

「母さんが大陸の人間だったからな。小さい時から読み方と文字くらいは教わつてた。読みは自信がないけど……左からブ・ア・ン・ク、でバンクだな。なんとなく分かる」

なら大丈夫だ、と連は笑みを浮かべた。彼は扉の持ち手に手を掛けると、ゆっくりと押して中に入つていく。龍斗、霞もそれに続い

て銀行の中に入った。

中の様子を見ると改めてその広さを思い知らされた。壁際には5人が一度に座れるほどの長椅子が所々に置かれている。真ん中には木の台を横に長くしたようなものが3辺を囲い、その内側では異様に同じ格好をした男女が客の応対をしていた。

「空いてるカウンターは……あつた。行こう、東君」

霞に腕を引っ張られながらカウンターの一角に立つた龍斗。向かいにいた黒い上着の女性が事務的な声で応対した。

「いらっしゃいませ。本日はどのようにご用件でしょうか」

無表情で眼鏡の奥から睨むような視線を向けられた龍斗。だが龍斗にはその質問に対する答えを持つていない。お金を預けるという目的は伝えられているものの、具体的に何をすればいいのかまでは聞かされていないのだ。

助け舟を出したのは連だつた。

「こいつの口座を新しく作りたい。今までに利用経験はない

「かしこまりました。少々お待ちください」

どうやらこれが目的らしかった。去り際に、

「後は向こうの言つようにしてね。預金を忘れずに」

と耳打ちしていった。連に向けた視線を受付係に戻すと、ちょうど一枚の紙を出してきたところだった。

「ではまず、こちらの欄にお名前と年齢をお願いします」

龍斗は一本の鳥羽を受け取った。いつの間にか台の上には透明な容器と、金属のような光沢をもつ薄い板が置いてあった。中には黒い墨のよがなものが入っている。

（墨と筆、か？）

その前提をもつて龍斗は羽の先を液体につけた。垂れないよう容器の端で余分を落とし、板に『東龍斗 15』と書いた。年齢は漢数字で書こうとしたのを寸での所で思い留まつた。板を見せると

受付係は文字を確認し、再び龍斗に返した。

「申し訳ありませんが、漢字名の場合はフリガナをお願いします。読み方が特殊な場合などありますので」

納得した龍斗は漢字の上に『アズマ リュウト』と付け加えた。自分の名字、東と書いて『ヒガシ』ではなく『アズマ』と読ませるのは人名地名だけの特殊な使い方だからだ。

もう一度提出すると、

「アズマ リュウト様ですね」

と確認が入り、返却されることはなかつた。続いて彼女が出してきたのは針山と奇妙な水晶。水晶の中では黒い砂のような粒が、水に流れるように渦巻いている。針山から一本の針を抜き、受付係が言つ。

「では、リュウト様の血を提供して頂きますので、手を出して頂けますか」

「血、ですか？」

思わず聞き返してしまつた龍斗。彼女は至つて平静な声で説明する。

「はい。大陸全土のお金の動きを管理する場所なので、銀行と契約者の間には信用がなければなりません。その信用のために、血液を用いた契約を行います。銀行側は預かつたお金を責任を持って管理すること、及び必要の際には融資、即ち銀行のお金をリュウト様にお貸しすることをお約束します。リュウト様にはその代償として、通貨の価値を疑わないこと、銀行を疑わないこと、また融資を受けられた場合は、定められた期限までに借りた金額に加え、その1割に当たる額を利息として支払うことが求められます」

龍斗は左手を出した。失礼します、と断つた彼女が人差し指に針を刺す。一瞬の痛みの後に出でてきた赤い液体を謎の板と水晶に垂らす。すると、板が血を吸収していいるのか赤い円の範囲がみるみるうちに小さくなり、とうとう完全に無くなつてしまつた。同時に板が変色し、薄く緑がかつた色になつた。水晶の方は吸収される様子が

顯著だつた。黒い粒子が渦巻く中に赤い血の粒子が混ざり合ひ、一瞬だけ白く光つた。その光が消えると、元の黒い渦に戻り、赤は何処にも見当たらなくなつた。

「これで契約は完了となります。お疲れ様でした」

指先に包帯を巻いた後、受付係は事務的な声でそう言つた。続いて注意事項を述べていく彼女。

「融資を受けた後、一定期間以内にお金の返済と利子の支払いを済ませなかつた場合、銀行口座は閉鎖されます。現金取引以外では一切お金動かすことは出来なくなりますのでご了承ください」

「現金以外で支払できるんですか？」

「はい。基本的にはカード払いが主流となります。これはリュウト様が物を買った場合、銀行に預けられているリュウト様のお金が、相手の銀行口座に移動するというものです。リュウト様から見ると、数字が増減するだけとなります。きちんとお金は動いています。但し商人の中には現金取引しか受け付けないという方もいらっしゃいますので、幾らかは現金をお持ちになつた方がいいでしょう。どうやら大陸ではこの金属板 カードを使って支払をするのが主流らしい。感心しながらカード眺めていると、突然手中にあつたはずのカードが消えた。

「……あの、カード消えちゃいましたけど」

「カードはリュウト様の体内に保管されます。支払いなどでカードを出す場合は『マイカード・オープン』と唱えることで出すことが出来ます。逆にしまう場合は『クローズ』です。またこのカードは身分証明証の役割も持っています」

龍斗は試しに『マイカード・オープン』と唱えてみた。広げていた左手の上で光が弾け、先程のカードが出現した。そのことに感心していた龍斗は、次の用件を思い出し、慌てて受付係に告げる。

「預金ってどうするんですか」

「預金ですね。では、今お持ちの硬貨を預けたい分だけこちらにお渡しください」

龍斗は麻袋の中からお金の入った巾着袋4つを取り出し、自分の腰につけていたものも外してカウンターの上に置く。と、ここで龍斗は説明の一端を思い出す。

「確かに現金も幾らかは持つてた方がいいんですね」

「はい」

即答だった。それを踏まえた龍斗は巾着の中身を幾らか整理した。それを終えた上で改めてお金を受けた。巾着袋を次々とだす龍斗に驚いていた受付係だったが、声を掛けられるとすぐに元の表情に戻つた。流石のプロ根性というべきか。

「では預金金額をお知らせいたしますので、少々お待ちください」しばらくして、眼鏡の受付係が戻ってきた。その表情はさつき会つた時と違い、強張つていて見えた。少々震える声で彼女が言った。

「ええと、リュウト様の預金金額ですが、10ドルク銅貨7546枚、10000ドルク銀貨639枚、10万ドルク金貨87枚、合計で…941万4460ドルク、です」

第7話・銀行帰りの会話

「……にしても1000万近い財産つて凄いね
「いいなーお金持ちー。ねえねえ、100万くらい頂戴よ」

「誰がやるかよ、自力で稼げ」

銀行を出た龍斗達3人は街の中を散歩していた。百聞は一見に如かず。実際に目で見ながら説明を聞いた方が覚えやすいし、地理的なことも把握できる。更に龍斗は霞、連と会話をする中で大陸の言葉を覚えるようにしていた。元々他人よりも記憶力が良いので、一度さらりと説明されただけでも大分覚えることが出来た。会話が続くなつちに話すことが無くなり、今は銀行でのこと、お金のことについてが話題となっていた。

龍斗に金を無心して断られた霞は頬を膨らませていたが、ふとあることに気付いた。

「そういえばさ、東君はなんであんなにお金持つてきてたの？」

「ああ。うちは俺以外全員死んだからな。大半は葬式の時にもらつた香典だ。最初は泥棒に盗られるよりカマシだと思って持つてたんだが、舟を出した後に気付いてな。香典返しにお土産買つて帰るつもりだつた」

再び家族の死に抵触してしまった霞はしゅんとなり、「あんと呴いた。連はそれを聞いて湧いた疑問をぶつけることにした。確かに軽んじて良い話ではないが、当の本人が乗り越えようとしているのだ。その気持ちを尊重することである。

「でも香典にしてもちよつと多すぎじゃないか？」

「一つは罪悪感だらう。2人とも知ってるだろ、うちが一度村八分にされたの。解消されたけどやつぱ申し訳ないつて気持ちから多めにしたんじやないかね。もう一つはよく知らないけど爺さんがお偉いさんに重用されてたことだらう」「なるほどねえ」

「ところで俺も疑問に思うことがあるんだが」

お金の話題が続いたことで、すっかり忘れていた疑問を思い出した龍斗。

「ドルクが金の単位なのは分かる。でも銅貨が100、銀貨が1000、金貨が10万つていう値段設定は何だ？ 今ひとつわからないんだが」

「それはね、大和と違つて硬貨 자체にお金としての価値が無いからだよ」

霞が答えてくれたのだが、あまりにあつさりしすぎで今一つわからぬ。同じことを思った連が補足説明する。

「つまり大陸ではあればただの金属の塊と見て値段を決めているのさ。だから1グラム当たり何ドルクつていう決め方。ただ、元々お金として使うために作られているから一枚一枚価値が違うと意味がない。つまり硬貨はどれも同じ量の金属で作られていることになる。同じ量ということはどれも重さが同じだから、結局貨幣は値段が安定しちゃうんだよね。……で、安定しているからまだ取引にも使えるわけだ」

「ただの金属として、か。もう一つ……これは銀行への信頼に触れちまうけど……あれ大丈夫なのか？ 例えばここが他所の国に襲われたりしたらやばい、というか今だつて狙つてるとこありそうだな。何せ大陸中の金が集まつてるわけだし」

「ははっ、流石は忍、いいとこに気が付くね。それについては本当に大丈夫なんだ。端的に言えば大陸にある全ての国は銀行の融資を受けている、つまりは銀行にあるから何処も銀行に頭が上がらない。お金のほとんどが銀行にあるから何処も銀行に頭が上がらない。もしオリジアに危害を加えようとする国があつたら即座に経済制裁が加えられる。お金を一切動かせなくなるから国が機能しなくなる

ね」

「国が自力で大金を動かすのは大変そうだな……国にとつても利益が無いのか」

「あ、それと銀行の運営とオリジアの統治は商人ギルドがやつてゐる。ギルドは何処の国にも属さない独立した組織。それにオリジアは念のために全ての国と不可侵条約を結んでる、だから兵力が無くても国がやつていけるんだよね」

この日龍斗は度量衡の単位、店の看板、お金についてのあれこれを学んだ。それに加え、龍斗は新しく服を調達した。龍斗が着ているのは未だ大和から持つてきた着物に袴。大和では当たり前の格好なのだが、大陸には無い服装のため街を歩けば嫌でも目立つてしまう。人の注目を集めることを嫌う龍斗としては一番に避けたいことだつた。まだ少し抵抗があるが、連や霞曰く「そのうち慣れる」とのことだつた。

太陽が地平線に沈む頃、2人と別れた龍斗はデイビス夫妻の家に戻つた。扉を引くと昼間かと思うほどに明るい光と喧騒が龍斗を迎える。デイビス夫妻の家は旅亭を経営していた。昼間は開店休業みたいなものだが、夜になれば食堂は酒場となり、連日酒飲みがわいわいがやがや騒ぎ立てる。そして酔いつぶれた客に追加料金で寝床を提供したのが旅亭の始まりらしい。やがては最初から宿泊を目的とする客も現れ、今のスタイルが定着していったのだとトマスは語つた。龍斗はそうして客に提供する部屋の一つを貸してもらつていた。

食事は基本的に食堂で行う。龍斗は騒ぎの中心を外れるように、端の方のテーブルに座つた。

龍斗がランドレイク大陸に漂流してから1ヶ月が過ぎた。この間龍斗は特に何をするということもなく時間を過ごしていた。否、実際には何をすればいいのか分からなかつたと言つた方が正しい。霞も連もこのオリジアで仕事を見つけ働いていた。だが龍斗はそれらの職に就きたいとは思わなかつた。かといってこのままディビス夫妻の所で厄介になつてはいるわけにはいかない。なら旅亭で働くか。その選択も龍斗には出来なかつた。

何せ最近まで龍斗は忍になることを目標としていた。忍とは影なる者。諜報や暗殺、破壊工作、情報操作を生業とするが故に、その存在は表沙汰には出来ない。龍斗は15歳、既にそういう任務を任せられ、遂行していた。その中には当然の如く暗殺　人を殺めるものも含まれている。

連は龍斗と一緒に基礎体力の鍛錬をした時期がある。だが連は忍になるためにしてはいたわけでなく、実家の空手道場を継ぐためだつた。無論殺人の経験など皆無である。

一方霞は女忍者　俗に言うくノ一になることを目標としていた。龍斗、連と同い年で龍斗と同じ忍の道を進んでいたが、決定的に違うのは3年前に行方不明となつたこと。この時点で彼女は11歳。忍の任務が与えられるのは12歳からなので、彼女はまだ忍として動いたことが一度もない。即ち、人を殺めた経験がない。

（そう、俺の手は既に何度も血潮に濡れている。そんな俺が一般人としてのうのうと暮らしていけるはずがない。今更……道は引き返せない）

龍斗は2人が羨ましかつた。血の穢れを知らず、自分の道を進んで行けたのだから。

そんなある日、龍斗は街の商店で大陸の地図を見つけた。そのまゝ何の気なしに購入し、旅亭に戻った。衝動買いと言つても過言ではないかもしない。食事の後落ち着いた時に改めて見ると、何故これを買ったのだろうと自分で不思議に思つたほどである。値段は1枚3万ドルク。旅亭の宿泊料が一泊2食付で2000ドルク、林檎1個が100ドルクということなので、かなり高価な買い物である。にもかかわらず使いようがない。なんという無駄遣いだろうか。だがこの地図を手にした時から、龍斗の心境に変化が起きたのもまた確かだつた。部屋にいるときは地図を見て時間を潰すようになつていた。地図の何を見るのか、そして何を思うのかは大体いつも同じだつた。

龍斗の視線はまず地図の右端、つまりは東端に向かう。そこにあるのは様々な形の島が南北に長く連なつてゐる様子。その横にはタツノ列島という文字が書いてあるが、タツノ列島よりも『大和』の方が龍斗にとつては馴染みがあつた。

（大きめの島が上から順に玲角島、徳間島、御蔵島。更に数個の島を合わせて大和か。……けつこう広いと思つてたが、小さいな。で、これに乗つて西へと）

龍斗の視線はタツノ列島から左側へと進んでいった。海には大きな渦が描かれているが、あまりの大きさに紙から切れてしまつてゐる。渦の中心に書いてある『トリトン海流』から更に左、『ランドレイク大陸』で目を止めた龍斗は母から聞いた言葉を思い出す。

「私が生まれ育つたのはとても大きな陸地だつた。世界はここだけじゃない」

それはぽつりと呟く独り言のようなものだつたが、龍斗の耳に強く残つていた。そしてそれは、大陸に流れ着いた今、龍斗が思うことでもあつた。

（井の中の蛙大海を知らず、か）

龍斗は自分が今いる所、『オリジジア』と書かれた場所に目を向けた。街の様子は非常に賑やかで、かつて龍斗が住んでいた玲角島よ

りも広い面積を持つが、それでも大陸のごく一部でしかない。つまりまだ龍斗は大陸の中のごく一部しか知らないのだ。

（どうせなら、もつと大陸を知りたい。知識は多い方がいい。無くて困ることはあってもあって困ることはない）

最終的に龍斗はそう考えるようになった。

そして龍斗はついに決意した。自分の進む道を定めた。多少迷いはあるものの、自分が思う条件を満たしている職業は他になかった。（冒険者、か。正直気乗りはしないが……今まで培ってきた戦う力を失うのは俺には出来ない。どうせなら縛られずに生きていきたい。なら、この道しかないか）

この大陸には職業ギルドといつものがあり、何か職に就きたい場合はそれに所属するのが一般的である。だが、大抵のギルドは加入に際して厳しい条件が課される。

例えば銀行の経営も行つ商人ギルドでは、お金の計算はもちろん社会経済についての知識も必要となる。それらを問うための筆記試験に合格しなければギルドに入ることは認められない。

例えば鍛冶屋ギルドでは、親方と呼ばれる中堅の職人の下で何年も下働きを経験した後、実技試験を受け合格しなければならない。

それに比べ冒険者ギルドには加入条件が一切無かつた。その理由は至極簡単、冒険者の世界は完全な実力主義だからである。力が無ければ生き残れない。常に死と隣り合わせと言つていい世界。だが逆に言えば、力量さえあれば任務を次々こなして荒稼ぎすることが出来る。それ故に冒険者という職業は大陸で最も人気のある職業だった。

更にギルドは、全ての国から独立した組織である。商人ギルドはオリジアという拠点を持つ例外的なものだが、承認が得られれば何処の国で商売をしても構わない。鍛冶屋もまた然り。冒険者では、関所を通る時の通行料が半額になる。それも決め手の一つとなつた。

思い立つたが吉日と、龍斗はすぐに冒険者ギルドに行き登録を済ませた。ややこしい手続きが必要なのではと内心不安だったが、カードを水晶にかざすだけで登録は完了した。だが龍斗にはもう一つ決意したことがある。

第8話・地図と決意（後書き）

ちょっと焦ったかな……

ハウ オ ル ズ

素人の拙い作品ですが感想など頂けると有難いです。

第9話・雁は発つ

『忍びても 景色晴れぬと 雁は発つ 跡は濁れど 情けは無用』

そう書かれた紙を囲うように座る4人の人間がいた。皆がその紙に書かれた文句を見つめ、眉にしわを寄せていた。そのうちの1人、ベラスが金髪を振り乱した。

「全然分からないわ。何なの、これ」

その隣にいた茶髪の男性、トマスもベラスに倣つて首を振った。肩をすくめ、両手を上に向けるおまけ付きである。

「僕もお手上げだ。こんなのは見たことない。……君らはどうだい？」

彼の視線は黒髪の少年少女、連と霞に向けられた。同じ大和出身の彼らなら、何か分かるかもしぬないと思つたからだ。その声に反応した連が顔を上げた。

「あ、そうか。お2人は知らなくて当然ですね」

そう前置きしてから説明を始める連。

「これは俳句、じゃないな、短歌つていうものです。美しい景色を見た感動とか、自分の気持ちを誰かに伝えたいときとかに詠む……まあ、詩みたいなものですよ。ただ、単なる詩と違つていろいろ制限があるんですけど」

「制限？」

聞き返してきたベラスに、連は答えた。

「ええ。俳句だと五七五の計十七音、短歌はそれに七七を加えた計三十一音で全てを表現するんですよ」

「へえ、東洋の神妙だね。それで、意味は？」

「んとね、『いくら我慢して待つても、空の景色は晴れにならず曇つて』いる。だから渡り鳥は飛び立つていく』前半部分はこんな

感じかな

霞の回答にますます訳が分からないと2人が首を傾げる。

「えっと、……だから、何なんだろう?」

その様子を見た連が苦笑を浮かべながら説明する。

「それは文字そのままの表の意味です。龍斗がわざわざ置いてったんだから、必ず別の意味があるはずです」

「別の意味?」

「そうそう。東君、長く家を空ける時たまにこうこうの残して行ってたんだよね。で、毎度何か伝言を隠してたから、これもそうだろうなって」

そうして霞と連による解説が始まった。デイビス夫妻は旅亭の仕事をがあるのでここで退席した。

「忍ぶはもしかしたら『傀ぶ』がかかるんじや」

「景色は?……『景色』?」

「後は何があるかな?……」

30分後、仕事が一段落した夫妻は連と霞の所へ向かつた。だが扉を開けた瞬間、中の空気が重くなっていることに気付いた。連は肘をついて頭を抱え、霞は椅子に全体重をかけて天井を仰いでいる。その様子にただならぬものを感じたベラスが声をかける。

「ちょっと、2人ともどうしたの、何か分かったの!?」

ベラスに視線を向けた連は、顔を起こした。

「ん、ああ、ベラスさん。ええ、大体分かりましたよ、奴の言いたいことは

「それで、何だって?」

トマスの質問に脱力した声で霞が答えた。

「『いくら故郷を懐かしんでも、気持ちを押さえよつとしても、自分の気は晴れない。だから俺は渡り鳥の如くここを離れていく。ちよつと面倒事残して行つちまうけど、心配するな。』……全体的に

まとめると そうなるね

部屋の重い空気がデイビス夫妻を飲み込んだ。驚いた表情のまま固まっている。やはり結構ショックを受けた様子だ。ある程度こうなることを予想していた連はフォローに入つた。

「まあでも、お2人にはちゃんと感謝しますよ。ほら」

テーブルの上に置いてある3枚の金貨を指さす連。

「1泊2食で2000ドルク、1ヶ月30日で6万ドルク。30万ドルクは明らかにおかしい。命を助けてくれた。食住を提供してくれた。それに対するせめてもののお礼のつもりでしょう」

「そんな大金……とても受け取れない……」

「駄目ですよ、ここは受け取るべきですよ」

「そうですよ。それが龍斗に対する礼儀つてもんです」

連も霞もベラスに反論した。そこからは受け取れ、受け取らないの堂々巡り。このままではらちが明かないとトマスがある提案をした。

「えっと、なら4人で山分けにするのはどうだい？ 龍斗君は色々教えてくれた君たちにだって感謝しているはずだろ。なら、君たちにも受け取る権利はある」

全額はもらえないでの、連や霞にも分配することで額を減らそうという考え方である。だが連も霞も目を丸くして首を振つた。

『受け取れないですよそんなの！』

こうして立場が入れ替わり、再び堂々巡りとなつてしまつた。いつの間にか日は傾き、窓から入る光がテーブル上の金貨を照らしていた。

最終的にこのお金は、デイビス夫妻が10万ドルク、連と霞はそれぞれ5万ドルクを受け取るということで決着がついた。残つた10万ドルクは教会に寄付することとなつた。

第10話・無常の闇を斬り裂かん（前書き）

総合評価10ポイント
お気に入り登録件数5件

いやはや、有難うござります。本当に嬉しい限りです。

第10話・無常の闇を斬り裂かん

鬱蒼と生い茂る緑の中、草一本生えていない一筋の地面が蛇行していた。その道の真ん中に1人の少年が立っていた。鋭い眼光で周囲に目を走らせた少年 龍斗は麻袋をたすき掛けにし、腰を落として構えを取つた。左腰には祖父の形見である脇差が、紐を通して括り付けてある。左手で鞘を固定し、右手で柄^{つか}を逆手になるように軽く握る。そのまま目を閉じ、周囲の気配を探りながら呟く。

「森羅万象、無為自然……『即応の霧』」

忍の世界にはその道を歩む者にしか伝授されない秘伝の技というものがある。それらを総称して「忍術」という。今龍斗が呟いたのはその忍術の一つ『即応の霧』。霧のように意識を広げ、より広範囲の気配を察知するという技である。

しかし木陰や落ち葉の中に隠れる『葉隠の術』、話術によつて相手を翻弄する『五車の術』あたりなら実際に使うことが出来るのだが、口から火を噴くなど攻撃としての『火遁』、蝦^{がま}蟇を呼び出す『幻術』、分身を作り出す『分身の術』など、忍術と呼ばれるものの大半はおよそ人間業とは思えない物ばかり。『即応の霧』も現実的にはあり得ない術の一つと認識されている。しかし気配の察知には精神の統一が必要となる。故に今では短時間で精神統一するためのまじないという認識で『即応の霧』発動の呪文が唱えられる。龍斗が唱えたのも本気で効果発動を信じているからでなく、精神統一の認識からであつた。

迫る気配を探り当てた龍斗は左足に体重をかけ、右足を滑らせて構えを直す。

「無常の闇を切り裂かん……『暁』」

脇差の銘を語り、左手の指で鯉口を切る。その刃が露わになつた瞬間、森の陰から唸り声と共に一匹の犬が現れた。大きな犬歯をむき出しにし、尻尾を立てて龍斗を威嚇するその姿は、遠目に見てもかなりの大型であることが分かる。その膂力も並大抵ではない。一瞬身を屈めたかと思うと、次の瞬間には龍斗の喉を噛み千切らんと彼の身長よりも高く跳躍する。

（やはり狙いは喉笛か、甘いな）

龍斗が野犬と戦うのはこれが初めてではない。玲角島にいた時、忍の修行の一環として山籠もりをしたことがある。それは大陸の言葉で言えばサバイバルと呼ばれるもので、人里離れた山の中たつた1人で1ヶ月間、自給自足で生き延びねばならない過酷なものだった。その修行によつて野生動物との戦い方や自然の中で生きる術、薬草の知識などを学ぶのである。

野犬は短期決着を好む。跳躍して上から攻撃すれば相手の視線もそれを追うために顔が動く。顔が上を向けばどうなるか。狙いである急所の喉笛が無防備に晒されるのだ。

だがこの戦法には1つ弱点があつた。

龍斗は体重を右足に移動させ、右腕を斜め上へと振り上げた。逆手に握られた脇差の刃が、戦法の弱点 無防備となつた野犬の腹に突き刺さる。勢いそのままに腕を振り切ると、野犬は自重によって刃から抜け落ち、地面に叩きつけられた。腹から赤い血を溢れさせ、血だまりを広げながらもなお立ち上がろうとする野犬の首筋に脇差を当て、龍斗はその喉笛を引き裂いた。

（さて、あと何匹だ）

動かぬ死体となつた野犬から目を離し、辺りを見回す龍斗。その顔には、その目には人間らしい情など欠片もない。命を奪うこと慣れ、殺すことには何の躊躇ためらいもない殺戮者さつりくしゃの目である。だがそれは同時に、相手にやられて自分が命を失う覚悟がある、ということも意味している。

『忍たるもの、生死あらば情を断つべし』

やはり龍斗には忍の教えが染みついているのだ。そして忍である以上、一切の油断は禁物。野犬が単独で動いているというのは樂観的すぎる思考である。少なくとも五、六匹、多い時には数十匹という単位の群れを形成しているはずなのだ。

複数の気配が迫るのを感じ取った龍斗は腰を落として構え直し、脇差『暁』を握る手に力を入れた。

「ふう、終わったか」

血だまりに沈む10匹の野犬を見ながら龍斗が言つた。気配を探つてもこちらに向かってくるものはない。着物と違い、大陸の服は肌に密着する作りであるために体がどれだけ動かせるか不安だったが、実際戦闘をしても問題はなかつた。龍斗は足を曲げ、野犬の顔に近付いた。

（これが、ハウンドドッグか……確かに上顎の歯2本を取るんだつか）

龍斗はオリジアを出るにあたつて1つの任務を受けていた。その内容は、ハウンドドッグ及びワイルドボアの討伐。次の街に行くために必ず通らなければならないこのアサンの森でのクエストだったので、ついでに受けたものである。

討伐系のクエストを受けた際は、対象を仕留めたという物的証拠が必要となる。何を何体倒したか、その証明のために対象の体の一部を持ち帰るのだ。ただ持ち帰ればいいというものではない。ギルドが指定した特定部位を持ち帰ることで初めて討伐完了となる。今回討伐対象となつている2種の特定部位は歯。なので龍斗はその部位を回収する作業に入った。他の歯より幾分大きい犬歯の上に脇差の刃を突き刺し、歯茎から抉り取つた。

残り9体のハウンドドッグからも歯を回収すると、龍斗は死体の前足を両手で掴み、森の中へと投げ捨てた。野生の肉食動物は死肉

を食らうものが多い。人が通る道路のど真ん中に放つておけば、その肉を食らうために本来道路まで出てこないはずの野生動物が道路に出てきてしまう。そうなれば通行の邪魔どころの話ではない。なのでギルドの規則として道路上に死体を残さないことが定められている。道路上にさえ残さなければ後はどう処分しても構わないとのことだったので、龍斗は文字通り、好きなように放り投げたのだった。

死体を処理した後、龍斗は地面に耳をつけた。こうすることで近くに川があるかどうかを探ることが出来る。幸いにもすぐ近くにありそうだったので、龍斗は森の中へと入つていった。途中で自分が放り投げたハウンドドッグの死体を1つ見つけた。龍斗は再び横に放り投げ、更に進んで川に出た。

着いてみると川というよりは小さな清流であった。しかし龍斗にとってはそれで十分だった。回収したハウンドドッグの牙を1本1本水にさらし、脇差を使って歯茎の肉をそぎ落としていく。血や肉は時間の経過と共に腐敗が進み異臭を放つ。大抵の冒険者は気にせずそのままにする。ギルドとしても部位の回収さえできればそれでいいので、特に気にすることはないというのだが、龍斗は道中で悪臭が移るのを嫌つた。

20本の牙を全て洗浄し、オーリジアで買つた2つ田の麻袋に詰め込んだ。

（さて、そろそろ戻つて進みますかねえ）

そう思つて歩き出したその時、遠くで派手な破壊音が響いた。

第10話・無常の闇を斬り裂かん（後書き）

今更ですが……このタイトルのつけ方どうなんだろう
いいのかなこれで…？

忍術についてですが『即応の霧』は自分で考えだしたオリジナルの
技です。実際にはそんな技ないです。

（何なんだ、さつきの派手な音は）

龍斗は木々を飛び移りながら走っていた。地上を走るのは様々な野生動物に遭遇する可能性があるために危険である。この辺りに生息する動物は木の上に登ることはないので、これが最も安全な移動経路ということになる。

（そういやさつきの俺みたいに路上でも襲われることがあるんだよな。ところことは、馬車か何かが森の中に突き飛ばされた可能性が高いな）

「其の速きこと風の如し……つっても変わらねえか。もうちょい足速くならんものかね」

1人悪態をつく龍斗だが、その声に応えるものは誰もいない。焦る気持ちを押さえながら龍斗は森を突っ切つていった。

「あー、やつぱりな……」

音の発生源を見つけた龍斗は、木の上からその様子を眺めていた。案の定、そこには道路から突き飛ばされた馬車が1台転がっていた。恐らく馬車をそのようにした張本人、ワイルドボア数体が取り囲み、自慢の長い牙を以て馬車を大きく揺すっていた。馬車を引いていた馬は既に息絶え、巨体の猪^{いのしし}がその肉を食らい始めていた。

暫く観察していた龍斗はあることに気付いた。耳を澄ましてみると、馬車が揺れる度に人間のうめき声が聞こえた。中にまだ人がいる。

（さて、体長は1メートル程のが3体か。『暁』……じゃあ時間がかかるな。ならここは……）

龍斗は左手を背中に回した。麻袋と同じように、左肩から右腰へとたすき掛けした太刀の鞘を掴む。

「父さん、頼むぜ。……早霧の山に茜差す、『東雲』！」

父の形見である太刀『東雲』の刀身を露わにすると木から飛び降り、着地と同時に横薙ぎの一撃を放つた。それはすぐ傍にいたワイルドボアの前足を斬つたため、相手はバランスを保てず横倒しになる。隙だらけになつたその首筋に刃を当てる、躊躇いなく刀を引いて血しぶきを上げさせる。次の瞬間、気配を察知した龍斗は後ろに転がつた。体勢を直して見ると、赤く染まつた猪に進路を阻まれた別の猪の姿があつた。

（ちつ、俺としたことが……気配捉えるの忘れてたな。だから俺はまだまだなんだ）

かすつた左腕の痛みに顔を歪めながら自身に悪態をつく龍斗。だが今はそれどころではない。瞬きで気持ちを切り替え、太刀を両手で構え直す。

「森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

そう呟き、今度は敵の気配を逃すまいと意識を全体に向ける。先程避けたワイルドボアがこちらに突進しようと動いた瞬間、龍斗は数歩分横跳びし、馬を食らう1体に向かって走り出す。こちらに気付いた猪は顔を振り、龍斗を弾こうとするが空振りに終わった。猪の背に飛び乗り、両耳の間に太刀を突き刺す。

だがその後のことを考えていなかつた。猪が派手に暴れ出したため、太刀を抜くことも降りることも出来なくなつた。両足で胴体をはさみ、太刀を握つて振り落とされないようにしがみつく。流石にこの状態から普通に飛び降りれば無事では済まない。形見の太刀を見捨てる気は毛頭ない。暴れる反動を利用してしつつ何とか片足を背中に上げた龍斗。太刀を握る手の力を強め無理矢理空けた手で脇差を抜く。

ワイルドボアが飛び上がり、後ろ足2本で直立するような格好になつた。好機とばかりに龍斗は後ろ足の1つから鮮血を上げさせる。全体重がかかっている足が脱力しバランスが崩れる。その瞬間に龍斗は太刀を手放し、飛び下りた。倒れてもなお足をばたつかせる猪

に背中側から近付き、体当たりを受けないようにしながら首や腹を滅多刺しにする。やがて動きが小さくなり、ぴくぴくと痙攣けいれんするだけとなつた。頃合いと判断し、脇差を直した龍斗はワイルドボアから太刀を引き抜いた。血糊を振り払いながら気配を探る。

（もう1匹いたはずだが……まあいい）

太刀『東雲』を鞘に納め、龍斗は馬車を確認した。ワイルドボアの牙にやられ所々布が破れている。車輪は大破しているし木枠にもひびがある。馬車としては使い物にならないだろう。

（それでも中に侵入できるようなところはないな。ひとまずは無事か）

見当をつけた龍斗は馬の血に濡れた横向きの御者台から中に入つた。

第1-1話：無常の闇を斬り裂かん 2（後書き）

今までに比べると文量少ないかな。いつもは2000字越えなんですが。今回は1600ほどかな。別に意図しての事でないので特に気にしていませんが。

「誰かー、生きてるか?」

声を掛けながら龍斗は馬車の中に入った。中の様子を見た瞬間、龍斗は目を見張った。馬車の中には男3人、女2人、計5人の人間がいた。だがそこには生氣というものがまるで感じられない。薄汚れた白い服に身を包んだ一同はこうべを垂れて座り込んでいた。不安、絶望、諦念……龍斗に感じ取れたのはそんな負の感情だけだった。

その空氣を作り出している要因の1人、最も御者台に近い位置にいた男が龍斗に気付き顔を上げた。

「……おや、どちら様ですか？　見たところ、冒険者とお見受けしますが」

男は目を細めた。薄暗い馬車の中に長時間閉じ込められていたため、龍斗の後ろから射す光が眩しいのだ。龍斗は光を受けるその顔に目を向けた。黒髪、黒目と大和人のような特徴を持つているが、それにしては肌色が白すぎる。冒険者、という言葉に眉を顰めるも、龍斗は渋々肯定する。

「ん……まあ、その通りだが。そういうあんたは大和人、てわけでもなさそうだな」

「ええ、仰る通り私は大和人ではありません。貴方は……いや、止めておきましょう。今は悠長にしている場合ではありませんしね」（何だこの落ち着き払った態度は？　他の4人も、今の状況分かってるのか？）

男が言う通り、今は悠長にしている場合ではない。道路上ならまだしもここは森のど真ん中だから。しかし馬車の中にいる5人には慌てる素振りが無い。話しかけてきた男以外は俯いていただけだった。男の顔も無表情、何処か達観したようにも見える。

「では冒険者さん、我々に構わず早くお逃げなさい。いつまた獣が

襲つてくるか分かりません故

「は？」

龍斗も同じ結論に達していた。それ故に男の発言が信じ難く即答で反応してしまった。訳の分からぬ龍斗は問いかける。

「何故だ？ 何故それが分かつて見捨てろと？」

「我々が『奴隸』だからですよ」

遮つた男の言葉は非常に衝撃的だった。龍斗は驚きを隠しきれず、同時に歯を食いしばつた。無意識のうちに力が入り、握り拳が小刻みに震えている。

「……奴隸……人を人とも思わぬ極悪非道……！…」

奴隸とは言わずもがな、他人に所有される立場の人間のことである。島国大和では、国の成立と共に単なる商売目的の人身売買は禁止されている。例外として大飢饉などの災害時、他にどうしようもなく娘を遊郭に、という2つの場合に限り人身売買が認められるが、それ以外で行つた場合は厳しい拷問にかけられる。余談になるが、大和では殺人は重罪。正当防衛が認められない限り罪人は極刑即ち死刑。大和において命とは非常に重い物なのだ。

だが海を渡つたこちら側、ランドレイク大陸ではその常識は当てはまらない。こちらの世界では人身売買は当たり前のように行われている。殺人を犯した者が死刑になることもない。森の中で野獣に殺されたと嘘を言えればあっさり認められてしまうからだ。初めてそれを知らされた時、龍斗は今と同じように怒りを表したものだった。滅多に感情を表に出さない龍斗にしては珍しいことで、連や霞でさえ驚いたくらいだ。その時と同じように怒りを晒し、また同じようなことを思う龍斗。

（畜生が、人の命を何だと思つて　）

だがその思考は突然起こつた地震によつてかき消された。たたらを踏むも何とか倒れ込むのを防ぐ。

(いや、地震じゃない。馬車が揺れてるのか……！……まさか……)

耳を澄まし、荒い息遣いを聞いた龍斗は確信した。

「また来たか野獣共。お前ら、本当に死ぬ気か？」

「死にたくはないが呪いのせいで全く動けねえんだよ。主の命令無しに動きまわれねえ。奴隸つてのはそういうもんだ」

金髪の男が両手を上げる。その手首には他の4人と同じ黒革の手枷が付けられていた。重さで垂れる鎖を見て龍斗は苦い顔をした。

「解放しなきや動けない、か……ここまで来て見捨てるつてのか……？」

「まさか我々を助けるおつもりで？」

「当たり前だ。こっちじゃどうか知らんが人の命はそいつに捨てられるもんじゃねえ。全員助け出す」

ほう、と黒髪の男が声を上げた。そして龍斗に一つの提案をする。「そこまで仰るのなら一つだけ手があります。我々と契約して頂けますか」

「契約？」

龍斗は男の黒田を見た。相変わらずの無表情だが目に光が戻つているように見える。

「ええ……皆さんも、ただ死を待つよりかはマシでしょう」

男の言葉に皆同意した。どうやらその契約というものをよつて、少なくとも動くことが出来るようになるらしい。全員の意思を確認した龍斗は男に聞く。

「で、何をすればいい」

「本来なら法的手続きがあるのですが、形式上の事なので必要ないでしょう。簡単なことです。貴方の血をこの手枷につけて下さい。それで契約完了です」

「血、か」

龍斗は脇差『暁』を抜くと、左小指に切先を当てた。少し力を入れ、皮膚を破る。痛みに一瞬顔をしかめたが、血が滲み始めたのを見ると刃を鞘に納めた。

その血を男の手枷、手首に巻かれた革の部分につける。すると、手枷全体が淡く光を放ち、その光と共に鎖の部分が消えていった。それに目を見張りつつ他の4人の手枷にも血をつけていく。5人全員の鎖が解かれたところで、龍斗が呟く。

「さて、鎖を外したはいいが……」

馬車は相変わらず揺らされている。心なしかさつきよりも激しさを増しているように感じられる。

「2～3体じや済まないよな……」

「ようしければ、我々をお使い下さい」

3人の中では最も背が低い黒髪の男がそう言つた。龍斗が見ると、解放した男3人が直立不動で立つていた。龍斗は3人に尋ねた。

「戦闘経験は？」

「俺は元々冒険者やつてたんだ。ワイルドボア如きには負けない腕がある」

と金髪の男。馬車の中で最も背が高く筋肉質でガタイがいい。

「折角助けてもらつたんだ。恩を返したい」

と燃えるような赤い髪の男。

「フフフ、私達は元々戦奴隸……戦闘の道具として売られましたので、皆腕に覚えのある者ばかりですよ」

と黒髪黒目の男。龍斗は更に質問する。

「得物は？ 縛らなんでも素手は無理だらう」

「確かにそうだが、そんなこと言つてる場合じゃないだらう」

金髪の男がそう言つと、その前にいた黒髪の男が鼻で笑つた。

「まあ貴方のように馬鹿力があるなら武器が無くても立派に戦えそうですが……」

「何だと……」

「『安心ください。あの商人、我々と一緒に武器の類も載せていましたので。使い慣れた得物ではありますんが、これも無いよりはマシでしょう』」

よく見ると馬車の奥に大きな箱があつた。龍斗が開けて中を見る

と、細身の片手剣や斧などが入っていた。

「よし、それぞれ得物を持つたら一斉に出る。死に物狂いで戦うしかないと……死にたくなけりや、な」

その言葉を肯定し、それぞれ武器を手に取った。

第1-3話・無常の闇を斬り裂かん 4（前書き）

このタイトルいつまで続くんだろう。予想以上に展開が進まないのですよ。内容的に大丈夫かなと思ってこのままで……

何はともあれ、第1-3話です。

「おい、あつたぞ。ここだ」

「ちょ、ちょっと待つてくださいよベリスさん」

レザーアーマーを着た4人が息を切らし木に手をつきながらやつてきた。その視線の先には緑色のバンダナを頭に巻いた無精ひげの男が手招きをしている。

「馬鹿が、静かにせんか！！ 気付かれたらまずいだろうが！！」

例のバンダナの男、ベリスは語氣を荒げながらも小声で怒鳴るという非常に器用な真似をやつてのけた。視線を戻すと3人の男達がワイルドボアの群れと戦っているのが見える。

「あいつらに見つかって命を落としてえか」

赤髪の男は剣で的確に急所を突いているし、黒髪の男は動きが速く目で追つのがやつとといったところ。金髪の大柄な男など、明らか両手武器と思われるサイズのバトルアックスを片手でぶんぶん振り回している。その様子を見た4人は青ざめた顔で首を横に振った。「分かつてるじゃねえか。うちの盗賊団に命知らずの馬鹿は要らねえからな。さて、とつとと済ませるぞ。収穫なしじゃあデツツの兄貴に何されるか分からんからな」

ベリス一行はこのアサンの森を縄張りとして活動する盗賊団の一員、主に道路を通行する旅人や商人の馬車に襲撃し、奪つたものを売り払うことで荒稼ぎしている連中である。だが実際のところそのやり方には大きなリスクが伴う。他でもない冒険者の存在である。冒険者と一口に言つてもその仕事の幅は広い。野獣の討伐、遺跡探索、傭兵といったスタンダードな仕事の他に、配達や馬車の護衛として冒険者は強い。複数人で取り囲めば何とかなることが多いが、

1人1人の力量となると冒険者の方がまず格上であると思つていい。故に彼らは安直な浅慮で人を襲うことはない。機会があれば野獸に襲われた馬車からめぼしい物を奪うという手段を使う方がセオリーとなつてゐるのだ。

横倒しになつてゐる馬車の裏手に隠れると、ベリスは腰からジャックナイフを取り出した。刃を幌に押し付け、一気に切り裂く。

「お、こいつあ……」

ベリス一同は目を見張つた。中にいたのは2人の少女。10代中盤と思われる金髪の2人は怪訝な表情を浮かべているがそれを抜きにしても端正で綺麗な顔をしていた。ねめつけるような視線で、ベリスはその全身をくまなくチェックしていく。

（服のせいで詳しく述べ分からんが、出るところは出でているな……おまけに顔がいい。それに手の黒革……奴隸がつけてる呪いのアイテム『拘束の手枷』か）

「こいつあ上玉だ。おい、2人1組で担ぎ出せ」

「イエッサー！！！」

言つが早いか4人の盗賊は馬車へと乗り込み、2人がかりで1人を肩に担ぎ、外へと運び出す。

「ククク、今夜は楽しめそうだなあおい

飢えた獣のような目で下卑た笑いを浮かべたその時だつた。

「何をしている」

突然のことに身を震わせ硬直した。が、ベリスは他の4人と違ひすぐさま声の主へと顔を向けていた。そこにいたのは少女たちと同年代と思われる黒髪の少年。

（何だ、ガキか）

気を軽くしたベリスは4人に命令した。

「とつととテツツ兄貴のアジトへ持つてけ！！ 直ぐ片付けて追いつくからよ

「は、はいっ」

「待て！！」

「おつと、行かせねえぞ」

ベリスは少年の行く手を遮った。右手のジャックナイフを目の前に突き付け、薄笑いを浮かべて少年に告げる。

「見たところ駆け出しの冒険者か何かか？ あいつらの事なら諦めな。俺らでしつかりその体を楽しんでやるからよ」

その言葉を聞いた途端、少年の顔から表情が消えた。対照的にベリスは下卑た笑みを強めていく。

「ははっ、何だその顔は。気でもあつたか？ まあ何でもいい。お前がここで死んだって、野獣にやられたことにしかならねえよ」

「1つだけ聞く。お前らは盗賊だな？」

「あ？ だつたら何だ？ あれか？ 怖くなつたか。ええ、坊ちゃん？」

少年は腰に挿していた黒光りする棒に手を掛けた。右手が上がると、見慣れない形の刃を持つ短剣が現れた。ベリスに多少の緊張が走るが表情は笑みを浮かべたままだ。

（まあどうつてことはない。所詮駆け出しのガキだ）

「何だよ、自棄になつたかお前」

「『俺が死んでも野獣にやられただけ』……そう言つてたな

「ああそうだな、命知らずのお前にや似合いの死に様だ」

「その言葉、そつくりそのままお返しする」

ベリスの表情が一瞬で消えた。直後、その顔に青筋が立ち、歯ぎしりと共にナイフの切つ先がぶれ始める。

「ガキが……なめやがって！！」

怒り心頭のベリスはナイフで斬りかかった。だがその刃が少年に当たることはなく、力任せに振ったため体制が前に崩れていく。その瞬間、ベリスの視野の片端で何かが動いた。同時に首筋から何か冷たいものが走つてゆく感覚が出てきた。攻撃が当たらなかつたことに驚きながら何かの方へと顔を動かす。だが思ったように体が動

かず、非常にゆっくりとしか首が回らない。まるで時間の流れが遅くなつたような感覚である。ベリスは内心苛立つていた。

（くそ、何が起きた！？ 何が動いた！？ 速く動けよ俺の体だろ！…）

ようやく視界がその何かを捉えた。そこには先程まで自分の目の前にいた はずの黒髪の少年。無意識のうちに目が合つた。
(何だ、あの目は。デツツ兄貴と同じ、人を人とも見ないような…いや、そんなもん比ぢやねえ、もつと冷酷な、そう、殺すことにな慣れきつた、命を奪うことに何の躊躇いもないような… 何だあの短剣、あんな赤い色してたか……いやまさか)

その刹那、ベリスの視界は真つ赤に染まり、もう2度と元に戻ることはなかつた。

「ああ、最悪だ」

頸動脈から鮮血を上げるベリスを見下しながら少年 龍斗が腕を振つた。血糊を落とし、脇差『暁』を鞘に納めたちょうどその時、男3人が龍斗の元へ集まつた。血の池に沈んだ男を見てぎょっとする2人。

「如何なされましたか」

唯一平静を保つてゐる黒髪の男が龍斗に問う。龍斗は頭を搔きながら苦い表情で答えた。

「盗賊だ。あと4人、2人1組で馬車の中にいた女2人を連れ去つちまつた」

流石の黒髪もこれには驚いた。金髪がすかさず発言した。

「なつ……けどよ、おかしくねえか？ 拘束の手枷はあんたとの契約で外されたる。声の1つでも上げればいいんじや」

「……しました、私としたことが……」

台詞の途中で黒髪の男が声を上げた。その顔は龍斗と同じ、苦虫をかみつぶしたような表情。

「何か知ってるのか」

「ええ、すっかり失念しておりました……女性奴隸の自由を奪っているのは拘束の手枷だけではありません。『束縛の呪い』もあるのですよ」

「呪いだと？」

「はい、奴隸の自由を奪う道具、呪いは一つだけではありません」

「何故2重に？」

「簡単なことですよ。……女性奴隸は性奴隸としての需要もありますから」

第1-3話・無常の闇を斬り裂かん 4（後書き）

主人公側からの描写が難しかつたので相手側にしてみたらすんなりかけたという

「性奴隸……ちつ」

龍斗は舌打ちした。赤髪の男が龍斗に問う。
「で、どうしますか、追いますか？ それとも……見捨てますか？」

言葉を詰まらせたのは敬語に直すため。内容自体は悪い話ではない。この場から無事に立ち去ることを考えるならそれが最善の策である。

「なつ、それは

「それは無い。俺は追うぞ」

黒髪の男を遮って龍斗が断言した。その言葉に安堵した様子の男だつたが、ふと思いついて龍斗に問う。

「理由を伺つても？」

龍斗は男3人を見渡しながら言つた。

「俺は『全員助け出す』と言つたはずだ。『必ずから約しき盟を破ることなかれ』言つた以上は実行する。それだけだ。文句がある奴は来なくともいい」

龍斗の意氣を感じてか2人が気圧されたように体をのけ反らせる。だがそれに屈しない者もいた。黒髪黒目の中である。

「フフフ、何と義理堅い。ま、我々は奴隸の身。主の命に従うだけです」

そう言つて何故か片手を頭にかざす。だが一瞬眉を顰めて直ぐに腕を下ろした。

「何でもいい。取り敢えず奴らの気配を探つて見つけ出さないと。森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

龍斗は4人が走り去つていつた方角を向いて意識を集中させた。声をかけた時に感じていた気配を探ると、指先ほどの点を感じた。

「ちょっと遠いか？ でも動き回つてはいけない……まっすぐ行けば

良いかもだが、急がないとやばいな。普通に走つて間に合つかどうか

「それはまずいですね……ふむ、私に一つ考えがあります。お任せ願えますか?」

「策があるのか? なら任せる」

龍斗からその言葉を聞いた黒髪の男は片手を頭に口を歪めた。
「では……風の精霊シルフよ、我らに力を、『フェアウインド』」
途端に龍斗は風を感じた。それは自然の風とは違う、質量を持つ
て纏わりつくような風である。そしてそれは驚くべき効果を龍斗に
もたらす。

「凄いな、体が軽く感じる」

「お前、ただもんじやねえとは思つてたが……」

「まさか魔法が使えるとは……」

他の2人も感嘆の声を上げた。だが黒い目はもう笑つていなかつ
た。鋭い眼差しで3人を諫める。

「感心している場合ではありませんよ。それに効果は一時のもの。
お急ぎになつた方がよろしいかと」

「おつとそうだった。じゃあ行くぞ……其の速さ」と風の如し、『
疾走』

龍斗はいつもの癖で忍術の文句を呴き、気配の方へと駆け出した。

「……今は……」

「ああ……」

「フフフ、さて、急がなければ取り残されますよ

あつけにとられている2人を尻目に黒髪の男が龍斗を追つ。

「あ、ま、待てよー!」

正気に戻つた2人もその後に続いた。

「ハア、ハア……お、追いついた……」

「な、なんてスピード……」

「しつ、静かに」

たつた一言で金髪、赤髪が一気に黙つた。それには一瞥もくれず龍斗は前方にある洞窟を見続ける。山肌にポツンとあるその入口には2人の見張りが立つていた。それを見た金髪の大男が囁くような声で言つ。

「あそこか……あの程度ならすぐ倒せるな」

「あれだけならな。どう考へても中に親玉がいるだろ?」

その声を聞いた元冒険者という赤髪の男があ、と声を上げる。

「この辺で盗賊なら、デツツ辺りじやない、ですかね、その親玉」

「どんな奴だ?」

「ぶつちやけ単純な奴ですよ。欲に忠実で深く考へることはない。元々はそれなりに力のある冒険者だつたとか。いつの間にか10何人程のチンピラを従えて盗賊になつちましたが」

「ならば、如何いたしましょうか」

龍斗は黒目に見据えられしばし沈黙した。

天然の鍾乳洞に少し手を加えただけの洞窟の中。その最奥へと1人の若者が歩いていった。濃い緑色のバンダナに茶色のシャツ、革製の胸当て　レザーアーマーというその格好は、見張りをしていた内の1人のものである。目的の場所には洞窟の端から端まで毛皮が敷かれている。壁際に並ぶのは、恐らく今までの盗賊稼業で得た物の中から選りすぐつたのだろう、一目見ただけでも良質と分かる品々が並んでいた。

その中心に7人の人間がいた。2人は女性。顔を見る限り10代くらいで、両手には黒い革を巻いている。残り5人はすべて男性だつた。床に転がされた女性を下卑た目でねめつけ、着衣の上から体を触りまくつている。その中心にいる大柄の男に若者は声をかけた。

「お頭!!　お楽しみの所失礼ですが、1つ報告が」

「ああ?　何だよ人が楽しんでる時に!!」

「おい、デツツさんを怒らせるなよ。命が惜しいだろ」

今まさにズボンのベルトを外そうとしていたデツツは若者を睨んだ。伸びた無精ひげに涎をつけているが、その目は野獣のように荒々しい。しかし若者は威に屈さず言葉を返す。

「洞窟が冒険者に見つかりました。現在入口で交戦中です」

その言葉に全員の目が大きくなる。しかしそこは元冒険者という経験故か、立ち直りの早かつたデツツがすぐに状況説明を求めた。

「それで、どうなつてんだ」

「取り敢えずその辺にいた仲間達を応援に行かせました。1人は潰しましたが、あと3人と交戦中で予断を許さない状況かと」

デツツの顔に焦りが見えた。

（俺は盗賊になつて日が長い。とうくに賞金首になつてておかしくないな……）

「取り敢えず、相手は3人だな？」

「はい」

「なら12人で一斉に行け！！！ 念のため俺も行く。最悪それまでの時間稼ぎだ！！！」

「あ、それなら良いものがありますぜ」

若者が取り出したのは一本の黒光りする棒だった。それを見た女性2人の顔色が変わるが、誰一人気付いた様子はない。

「潰した1人が持つてた武器です。かなり良いものみたいですよ」

そう言いながら若者は棒を両手に持ち、左手を動かした。現れた刃を見てデツツは驚愕した。

「こりやすげえ、なんて綺麗な刃だ……だがこいつあお飾りのなまくら剣じゃねえのか？」

「いや、飾りじゃありませんよ？ 実際戦闘で使いますし、何より切れ味が抜群で」

デツツの目の色が変わった。武器として優れているという情報は彼にとって何よりも重要なことだからだ。デツツは若者が持つ短剣を受け取ろうと腕を伸ばした。良いものが手に入るという先走った

気持ちから思わず顔がにやけてしまつ。

「……ほつ、どれだけすごいんだ、その切れ味は？」

「それは……こんだけだよ」

刹那、若者はその手首を斬りつけ、踏み込むと同時に手首を返して首筋を斬つた。あまりに突然のことだったので、デツツが倒れた後も沈黙が続いた。血が広がり、若者が左胸に止めの一撃を刺す頃ようやくその沈黙が解けた。

「デ、デツツさん！！」

「嘘だろ……」

「まさか、こ、じゃ最強なのに……」

「さてと」

動搖を隠せない他の面々を他所に若者はバンダナを投げ捨てた。バンダナの影に隠れていた黒髪が露わになり、血糊を振り落とすと、藍色の鋭い目が残る男共を睨みつける。

「さて……こいつより腕のある奴はいなか。その命をかける覚悟あらば、お相手致す」

第14話・無常の闇を斬り裂かん 5（後書き）

んー…… まともな戦闘がないへへ；

野獣と不意打ちかあ

まともな戦闘の場はちゃんと考えてあります。でも全然たどり着けない

ポイント入れて下さる方、お気に入りに入れて下さった方、本当に有難うござります。

至らない点などあるかと思いますが、頑張って書いていきますのでよろしくお願ひします。何かありましたら感想など頂けると嬉しいです。

デツツ率いる盗賊団はものの数分で全滅した。赤髪の男が言ったように、この盗賊団は元冒険者で力のあつたデツツがチンピラをまとめて作ったものである。大した戦闘経験のないチンピラの中に、デツツと同じかそれ以上の力量を持つ者などいるはずがなかつた。2、3人が敵討ちだとつて黒髪の少年、龍斗に挑むも、それは脇差『暁』により多くの血を吸わせるという結果に止まつた。頭と同じ血の池に沈む仲間を見て、恐れをなした盗賊たちは我先にと洞窟から逃げていつた。

（外道に救い在らず。己が所業を悔いるがいい）

その心の声に呼応するかのように、全ての最後の一手が龍斗の前に現れる。

「命令通り、全て片付けました」

「いやあ、話に聞いてたが、見事にその通りになつてら
「いやはや全く、見事なご慧眼。けいがん感服いたしました」

3人の男が口々に龍斗を持ち上げる。自分で考えた作戦が上手くいつて満更まんざらでもない龍斗だつたが、思わずにはけそつになつた顔に力を入れ、最小限の笑いに止める。

「別に大したもんじやない。俺が見張りの1人に成りすまし、中に入つて頭を潰す。動搖して洞窟から出でいく盗賊をあんたら3人が斬り捨てる……軽くつついで敵を誘き出す、単なる啄木鳥戦法だ」

それはともかく、と龍斗は2人の女性に目を向ける。先程の経験からか2人の眼には不安と怯えの色が見えた。襲われる相手が変わるだけかもしれない。大方そんな見当外れな考えだろうと龍斗は男の黒目を見る。

「で？ こいつら開放するのはどうすりやいいんだ？」

「ふむ……本来は束縛の呪いをかけた者からその所有権を譲り受けるものなのですが……」

一般的な、しかし現時点では不可能な前置きの後に続ける。

「む……やはり、『真血の契り』しかありませんかね……？ しかし、それをしてしまって……」

今まで淀むことなく言葉を発してきたこの男が、初めて言葉を濁した。それ即ち、その方法をしてしまって後が困るところなのだろう。だが彼の迷いを断ち切る声が出た。

「私達は……構いません。奴隸に堕ちたその時から、覚悟はしていました」

他ならぬ女性の声だった。今まで聞いたことのない彼女の声に男4人は驚きの表情を隠せない。……もつとも、黒目を見開いている男が驚いているのはそこではなかつたのだが。

「……よろしいので？」

「構いません。攫われた時点で全てを失つ覚悟はしていました。もつとも、呪いのせいで舌を噛み切ることは敵いませんでしたが……今は失わずに済んだ、その幸運で十分です」

透き通るような金色の髪を持つ女性が毅然とした態度で龍斗を見据えた。その青い目に、少々幼さを滲ませながらも大人が持つような風格と威厳を感じて少しのけ反る龍斗。視線が揺れてもう1人の女性に焦点が合つた。この女性も、彼女と同じ決意の目をしている。「……」うつ申しておりますが……如何なさいますか？

黒目を向けてきた男の声にもう迷いは無かつた。後は龍斗の鶴の一声で全てが決まる。腕を組んだ後、龍斗は渋い顔で最後の確認をした。

「……本当にそれしか方法が無いんだな？ それをしなければ彼女らはここで飢え死にするしかない」

「はい」

「何が起るか知らないが、後がある」

「はい」

「……あんたらも、本当にそれでいいのか？」

『はい』

黒髪の男に念を押し、女性2人に最後の確認をした。深く息を吸い、大きなため息をつく。
「ハア……仕方ない、その何とかつてのをやるしかないか」

「……では、今言った通りにして下さい。そちらの方は……分かっていますね？」

龍斗と女性2人が頷く。それを黒目に映した男は結構、と一言残し男2人と共に壁際へと移動していった。特に意味はないのだが、言葉を他人に聞かれるのは倫理にもとる、とのことである。

龍斗は再び『暁』を抜き、左手の小指と薬指に刃を突き立てた。赤い液体が球を作つていくのを見届けると今度はその刃を女性2人に向けた。差し出された左手を裏返し、その小指の自分とほぼ同じ位置に傷をつける。赤い血が出てきたのを見て鞄にしまう。

龍斗は血が滲む2本以外の指を折り畳み、向かって左側にいた女性の小指に自分の小指を、もう1人の女性の小指には薬指をそれぞれ重ねる。指を離すと、女性達はそれぞれ自分の小指と重なつた龍斗の指を口に含み、ついている血を舌で舐め取つた。口から指が離れ2人の喉が動く。一瞬躊躇いを見せた龍斗だったが、彼女らに倣つて1人ずつ同じように血を舐め取り、それを飲み込んだ。龍斗の動きを確認した女性2人は口を開いた。

『盟約神ミスラ、契約神ヴァルナの名において』
「レイア・フォルデント・マーテイスが誓約す」
「ミーア・フォルデント・マーテイスが誓約す」
『我が身、我が心、我が魂、我が全てを汝に捧ぐ』

2人が言葉を紡いだ後、3人の体が強い光に包まれた。薄く紫がかつたその光が消えると同時に、2人につけられていた黒革製の腕輪と首輪が地面に落ちた。

「真血の契りの儀式はこれにて終了です」

男3人が近づいてきた。黒髪の男に目を向けようとした龍斗だが、途中で動きが止まつた。その様子に男が首を傾げる。

「如何なさいましたか？」

「あんたはそれ、外さなくていいのか」

龍斗が指差したのは男の手首。男は両手を広げ、手の甲を見せながら上に上げる。手首にある黒革を見て合点がいった男は苦笑した。「確かに同じ方法でも外せますが、あまりお勧めできない方法ですし……そうですね、切り落とさない限りは

「ならそのまま動くな」

突然龍斗が男の眼前に現れた。あまりに急なことだつたので、幾筋かの光と風圧が通り過ぎる間、男の眼は皿のように丸くなつたままだつた。その間に金髪の男、赤髪の男も順番に同じ感覚を味わつていた。

数秒の後3人が正気に戻つた。信じられないといった様子の顔で、握つたり開いたりを繰り返しながら両手を見る。彼らの手首にあるはずの黒革の腕輪は、既に大地の上に落ちていた。

「嘘じや……ないよな……！」

「外れた…… 腕輪が……！」

「フ、フフフ…… 何たる僥倖きよつけい！」

三者三様に喜ぶ様子を見た龍斗は思わず口を歪めた。その右手にはいつの間にか抜かれた脇差を握つている。

「無常の闇を斬り裂かん…… どうやら上手くこつたようだな」「しかし、よろしいので？」

未だ興奮冷めやらぬ様子で、しかし聞きなれた口調で黒髪の男が龍斗に問う。龍斗は脇差を鞘に納めながらそれに答えた。

「構わない、といふか俺は奴隸制度と相容れるつもりはないからな。良かつたなあんたら。これで晴れて自由の身だ」

その声は無意識のうちに低くなつていた。

ほとぼりが冷めた頃、金髪と赤髪の男は重ね重ね龍斗に感謝の言葉を述べながら洞窟を出でていった。今は黒髪の男を見送るうとしているところである。元々彼らと一緒に出るつもりは毛頭なく、盜賊が溜め込んだ物品の中で剣が挿してある樽の辺りを物色していたのだ。何か気になる武器でもあるのかと思っていた龍斗だったが、すぐ見当違いだと分かった。彼が手に取つて見ているのは細長い革製の袋。つまり剣を納める鞘を探しているのだと気付いたからである。彼が龍斗たちの方を向いた。丁度良いものがあったのか左手には皮袋に入った剣を持っている。

「この度は命をお救い頂き誠に有難うございました。重ねて奴隸身分からの解放。不肖この私、何とお礼を申し上げて良いものか皆目見当もつきません」

「おいおい、そんな大層な挨拶いらねえって。出会いは一期一会、だから誠意を尽くしたまでだ」

龍斗が苦笑しながらそう言った。黒髪の男はいつも不敵な笑みを浮かべてирいるだけである。

「フフフ、左様でござりますか。では最後に一つだけ。彼女達の事、宜しくお願ひいたしますよ」

「ああ、ちゃんと次の町まで護衛していくぞ」

「……フフフ、ええ、お願ひします。そうそう、洞窟から出て右に少し歩いたところに馬小屋がございました。馬車もありましたのでどうぞご利用下さい。では、私はこれで失礼させていただきます。ご縁があればまた、お会いしましょう」

黒髪の男は右手を左胸に当て、恭しく一礼して去つていった。

（結局あいつが一番分からないんだよな。口調から態度から、常人とは違うんだが……まあいい、どうせ俺はこいつのことをほとんど知らないからな）

最後に聞いておいてもよかつたのだが、龍斗は些細なこととして流すことにした。

「さて、あとはあんたらか。ここからじゃ、オリジアよりも次の町に行く方が早いんだよな……折角馬車があるつてんなら使わせてもらうかね。それで良いよな?」

振り返り、女性2人の顔を見る。

『承知致しました、ご主人様』

「……は?」

口を揃えて述べられた言葉に龍斗は違和感しか覚えなかつた。

第1-5話・無常の闇を斬り裂かん 6（後書き）

気付けばお気に入り登録件数が増えている。評価ポイントも増えている。

読んで下さっている皆様、本当に有難う御座います。黒髪黒目の中ではあります、本当に「何とお礼を申し上げて良いやう見え

当がつきません」。。。

拙い作品ですがよろしくお願いします。

第1-6話・果たしてこの濃霧に茜を射せるのか

「さて……んー、じゃあ、あんたらにしか出来ない事を頼むとするか」

龍斗達3人は馬車で街道に出た後、丸2日かけてアサンの森を抜けた。今は森を抜けた先にある国、エルグレシア王国内にある旅亭の一室にいる。関門を通りた時には既に空が赤く染まっていたため、今日これ以上動くのは無理だと判断したのだ。

龍斗の言葉を聞いた女性2人は身を固くした。男性が女性奴隸に命じることなど基本的には1つしかないからだ。だがその予想は見事に裏切られた。

「先に言つとくけど、夜伽の相手しろとか言わんから、そう身構えるな。取り敢えず俺はあんたらの情報が欲しいんだがな」

「私達の……？」

「ああ、今後どう動くかに関わることだしな。てか、いつまでそこに突っ立つてる気だ、椅子あるだろ」

旅亭の部屋はたいして広くはない。龍斗の傍にあるシングルベッド、反対側には壁に寄せられている木製の机、その下の空間にピッタリ納まるように作られた背もたれの無い木製の椅子が2つ。家具と呼べるものはそれだけである。というより、立ち歩くスペースを考えるとこれ以上は置こうにも置けない、といった感じである。龍斗は椅子を引っ張り出し、座るよう促した。それだけで歩けるスペースが半減する。

「え、あの、しかし、私たちは奴隸ですので」

「いいから座れ。そっちが良くても俺が話し辛い」

困惑する2人に軽い苛立ちを含め、命令口調でそう言つた龍斗。

それを聞いた2人は戦々恐々といった様子で椅子に腰かけた。奴隸にとつて主の命令は絶対である。幾ら意に沿わぬことでも、命令されたことには従わねばならない。逆に命令が無ければ勝手に動くこ

とは許されない。故に一般常識で言えば奴隸というのはモノ扱いである。その常識を持つレイア、ミーアにとつて龍斗の行動は不可解だった。もつとも龍斗には何かおかしなことをしているという自覚は無い。奴隸の扱いという大陸の常識を知らず、ただ単に対等な人間として扱っているだけである。そもそも彼には彼女らの所有者であるという自覚がないのだが。

龍斗はベッドの上で胡坐をかいて座つた。鳶色と青色の畳を正面から見据える。

「まずあんたらの事を聞きたいんだが……どつちがどつちか忘れたけど、確か姓が一緒だったよな。つーことは姉妹か？」

「あ、はい。私はレイアと申します。歳は今年で15になります」

「わ、私はミーアです。年は13です」

透き通るような金髪に鳶色の目をした姉のレイアからは、とても同年代とは思えない大人びた風格を感じ取つた。一方、妹ミーアの方は年相応といった感じで、全体的にまだ幼さが残つている。

（なるほどな、性奴隸用の呪いを掛けられただけはあるわ）改めて彼女らを見ると、髪や目の色、雰囲気、胸の大きさ等細かいところでは差があるものの、どちらも共通して言えることがある。即ち綺麗、可愛い、美しいと形容される容姿の持ち主であることだ。

「で？ 2人は大陸出身か」

「えつと、それはこのランドレイク大陸出身という事でしょ？」

「ああ、そうだな」

「でしたら違います。私達は別の 俗に北方大陸と呼ばれる大陸の出身です」

「え、ちょっと待て、大陸ってここ以外にもあるのか！？」

龍斗は思わず身を乗り出した。まさかランドレイクのような巨大な陸地が他にあるとは夢にも思つていなかつたのだ。今まで発言していたレイアは龍斗の様子に少し気後れしたが、何とか気を戻して質問に答えた。

「はい……東西南北そして中央にそれぞれ1つずつ大陸がある、と

教えられました。因みにこのランドレイク大陸はその内の一つ、東の大陸にあたります」

「そうか……いや、広いなこの世界は。人間が住むには広すぎるんじゃないかなえ」

龍斗は詠嘆の声を上げながら態勢を戻した。腕を組んで上を向いたまま首を横に振る。が、しばらくしてあることに気付き、視線を2人に戻した。

「待てよ？ 他所の大陸からここまでどうやって来た？」

2人の目を交互に見る藍色の眼は、最終的に口を開いたミーアの青目で止まった。

「大きなガレオン船に、帆船に乗つてきました。お父さん、お母さん、リノにアルトにダルジオ、アレン、ポルドール……護衛の兵士や従者と共に何ヶ月も掛けて……なのに、なのに……」

ミーアは途中から顔を下げ、両手で顔を覆いながら肩を震わせた。時折すり泣く声が龍斗の耳にも届いてきた。レイアはそんな妹の肩を抱いてなだめている。ただならぬを感じた龍斗はレイアに問う。

「……道中、何かあつたのか？」

「はい……ランドレイク大陸に向かう途中、私達が乗る船は海賊の襲撃を受けました。勿論、対策は十分にしておりました。善戦しましたがしかし、相手の力量が上回り……結果、ガレオン船は海賊に乗つ取られました。その時に……父を始め多くの方が殺されました。母や従者の一部は……奴らに犯された後に……つ、私たち姉妹と残りの従者、生け捕りにされた兵士たちは2～3の部屋に詰め込まれました。そして大陸に着くと同時に……生きている者は全員奴隸商人に売り渡されたのです」

ミーアよりも気丈なレイアも途中からは目を固く閉じ、声を震わせながら語った。語り終わると唇を噛み、涙を流すまいと瞼を更に固く閉じる。だが思いとは裏腹に彼女の眼尻から一筋の涙が流れ、妹と同様に肩を震わせた。

……龍斗はそれをただ見守るしかなかつた。

第1-6話・果たしてこの濃霧に茜を射せるのか（後書き）

このタイトル、正直言つて書き手である私自身に対する問いではないでしかね。感情移入しすぎたのかな？

うーん、こういう余話だけの部分つて結構難しいなあ……精進あるのみですね。はい。

翌日、3人は朝から馬車に乗つて移動していた。街の通りは馬車のための道というわけではないのであまりスピードを出す事は出来ない。龍斗たちも他の馬車と同じようなスピード、人が歩くより少し早い程度でゆっくりと進んでいた。もつとも、龍斗達は周りに合わせて速度を落としているわけではない。馬車があまりに重すぎてそれ以上速度が上がらないだけなのだ。本来オリジアから出てエルグレシア王国に着くまで馬車で2日かかるというアサンの森。途中から出発したにもかかわらず王国に着くのに2日かかった原因もここにある。

何故そんな荷馬車が重くなっているのか。それはレイア、ミーア曰く重量オーバーだからである。ではなぜ重量オーバーなのか。それは盗賊団が抱えていた物品を龍斗が全て積み込んだからである。武器や鎧を始め、デッツの盗賊団は様々なものを溜めこんでいた。その中には宝石類など明らかに高額と思われるものも混ざっていた。このまま寝かせておくのももったいないということで龍斗が無理やり積み込んだのである。因みにこの時、レイア、ミーアの2人は龍斗から適当なレザーアーマーをつけるようにと言われた。薄汚れた真っ白な服だけではあまりにみすぼらしくて目立つてしまう。かといって盗賊団の隠れ家に女性用の服など置いてあるはずもない。仕方が無いので龍斗はそれをつけさせ、見た目だけ冒険者として誤魔化そうと考えたのだ。因みにその後龍斗は一度も外せと命令していない。故に今の今まで、夜寝る時ですら彼女達はレザーアーマーを着けたままであった。

一行の馬車は銀行の横にある小屋のような場所に止まった。龍斗は馬車から降りると、近寄ってきた男に声をかけた。

「買い取りつてここでいいんだよな？」

「はい、左様でござります」

「なら馬車の中身全部売りたいんだけど」

揉み手をしながら笑顔でやってきた男は失礼します、と断つて馬車の荷台にかかる幕を開けた。

ランドレイク大陸の銀行は商人、ギルドが経営している。そして大陸全土の金の動きを掌握しているわけだが、それだけではない。当然ながら商人は元々物を売買してお金を儲ける人間で、物の動きも掌握していると言える。そんな商人達が作った銀行だ、ただ金を動かすだけではなく普通の商人のように物の売買を行う場所も付属しているのだ。

これは普通の商人としての側面なので銀行でしか物を売れないと云うことはない。寧ろ個人商店に行つて売つた方が物によっては銀行よりも高く買い取ってくれることもある。……逆に悪徳商人に安く買いたたかれる心配もあるが。龍斗の場合は良い意味で言えば効率を重視した。悪く言えば店回りが面倒だからである。

承認は暫く顔を動かして中身を確認した後、再び龍斗に向き直つた。

「申し訳ありませんが、少々お時間を頂きませんか」

「ああ、別に急ぎつてわけでもないし、銀行にも用があるからな」
「では鑑定が終了次第お呼びいたします。失礼ですが、カードをご提示願えますか」

龍斗は呪文を唱え、カードを出して相手に渡した。隅々まで目を通した男は両手でそれを返してきた。

「冒険者ギルド所属、東龍斗様ですね。^{いわゆる}では、また後ほどご連絡させていただきますので」

そう言って商売人がよく見せる所謂営業スマイルをたたえた男に背を向け、龍斗はレイア、ミーアを呼んだ。

「レイア、ミーア、銀行行くぞ」

『承知しました』

馬車から降りた2人は既に歩き出していた龍斗の一歩後ろまで移動し、歩調を合わせて歩いていった。と、突然龍斗は立ち止まつた。ほぼ同じタイミングで後ろの2人も歩みを止める。何だろうと不思議に思つていると龍斗が振り向いて男に問いかけた。

「そういや、その馬車 자체も売れるのか？」

「ええ、まあ買い取りは可能ですが」

「んじゃ馬車も買い取つてくれ」

「分かりました。では、いつてらつしゃいませ」

その言葉を背に3人は銀行へと入つていった。

「東龍斗様、いらっしゃいますか？」

銀行内に女性の声が響いた。長椅子に腰かけていた何人かが反応したが、チラッと一瞥しただけで視線を戻す。銀行ではよくある光景である。呼ばれた者とそれに従う者が銀行員の前まで移動した。

「ああ、はいはい、俺ですが」

「鑑定が終了しましたのでお知らせに。……そうですね、4番窓口が空いておりますので、そちらまで」

3人は4番窓口まで行つたが、そこに銀行員はいなかつた。あれ、と思つていると先程龍斗を呼んでいた銀行員がその場所に座つた。「では鑑定結果を報告いたします。幌馬車が一台、ナイフが10本、レザーアーマー4着……」

「あー、その辺省略でいいよ、結果だけ教えて」

「そうですか、では買い取り価格の合計は……400万8044ドルク、です」

その金額にレイア、ミーアは息を飲んだ。だが龍斗は全く動じなかつた。未だにこちらの金銭価値に慣れていないし、そもそも彼が最初に聞いた自身の貯金額より少ないため、ああそうとしか思わなかつたのだ。額を聞いた後、龍斗は振り返つて2人を見た。

「さて、じゃああんたら2人のカード貸して」

「え……承知しました」

『マイカード・オープン』

実は鑑定が終わるまでの間に、2人に銀行口座とカードを作らせていたのだ。当然戸惑っていたが、耳元で命令だと告げると2人は従わざるを得なかつた。出来て間もないカードを受け取つた龍斗はそれを銀行員に見せて言つた。

「その金を、この2つのカードに分けて入れることって出来るかな？」

「可能ですよ」

「じゃあ幾らだ、200万ずつ？ 平等に入れといて」

「分かりました。ではお預かりします。レイア・フォルデント・マイティス様、ミーア・フォルデント・マーティス様、それぞれ200万4022ドルクですね」

「ついでに……マイカード・オープン」

龍斗は自分のカードを出現させ、銀行員の前に出した。

「俺の口座から2人の口座に、それぞれ100万ずつ、動かせる？」

「……分かりました。200万ドルクですね」

額に一瞬驚いた銀行員だつたが、すぐ事務的に処理を始めた。だがレイア、ミーアはまだ目を丸くしていた。

「あ、あの」

「ご主人様、と言いかけたレイアだつたが、その口は龍斗の人差し指と眼力で止められた。黙つて見ていろ、という意の視線はミーアにも向けられた。彼女もその意を察したらしく、開いた口を閉じて小さく頷いた。

「東龍斗様」

銀行員に声を掛けられ、龍斗はそつちに顔を戻した。3枚のカードが龍斗に返される。

「ではこちらをお返しします。東龍斗様734万2011ドルク、レイア・フォルデント・マイティス様、ミーア・フォルデント・マイティス様それぞれ300万4022ドルクです。ご確認ください」

「だつてよ。じゃあこれで」

「有り難うございました。またのお越しをお待ちしております」

カードをしまつと龍斗達3人は銀行を出た。馬車も一緒に売り払つたために、宿までは歩いて帰るしかない。その道中で龍斗はある看板に目を止めた。寄り道してくかと言つて店内に入つていく龍斗。女性2人も入つていくとそこは仕立て屋だつた。龍斗が2人の方を向いて言つた。

「んじゃまあ2～3着を選ぶといいよ。金は出しどくから」

「！！『ご主人様、そ、そこまでして頂かなくても……』」

「あ、あの、さつきのお金がありますし……」

「気に入りんな」

「しかし……」

「じゃあこれは命令だ……それと、昨日辛いこと思い出させちまつたからな。詫びのつもりということで」

そう告げられた2人は黙るしかなかつた。その後2人は店員によつて採寸され、1つ2つ生地を選んで注文した。ミーアの方はレイアが選んだよりも少し上等そうな生地だつたが、それでも遠慮して選んできたような感じだつた。龍斗は上等な方の生地で3着ずつを注文し、現在泊まつている旅亭の名を伝えて店を出でていつた。

第17話・翌日（後書き）

軽いからか直ぐ3000字になりました。心理的なもので取り敢えず分けてみます。まとめた方がいいのかなとも思つたんですがね……

第18話・龍斗の危機

「……申し訳ございません、『ご主人様』
「申し訳ありません」

旅亭に戻り椅子に座った龍斗は首を傾げた。部屋に戻ってきた途端に2人が頭を下げる意味が分からなかつたからだ。龍斗は素直に聞くことにした。

「何だ？ 2人して……あ、その前に顔上げろ」

「はい……その、『ご主人様は私たちの事をどうされるおつもりですか？』

「どうつて、奴隸身分から解放したんだから、あんたらが自立するまでの面倒を見る。約束だしな」

解放した黒髪の男との約束のことを持ち出す龍斗。それを龍斗は今言つたような意味だと解釈していた。だがそう思つていたのは龍斗だけだった。

「申し訳ありませんが……私達は真血の契りで隸属を誓いました。

それはつまり、己の全てを『ご主人様に捧げたということになります』

「……私達は『ご主人様に永久隸属する身です』

「……何だと！？」

驚きのあまり龍斗は立ち上がり声を張り上げた。それに一瞬体を硬直させた2人。レイアの鳶色の眼が藍色の眼を捉えた。だがそれも一瞬のことで、すぐに視線を下げてしまった。

「真血の契りは盟約神ミスラ、契約神ヴァルナという2つの神の名に懸けて誓うものです。神の名に懸けて誓つた契りを破る事は出来ません」

「……マジか……ハア」

龍斗は力が抜けたように椅子に座り直した。暫く天井を見上げていたが、やがて2人に目を向け直した。

（後を引くとは覚悟してたが……まさか永久隸属とは……仕方ない、

正直なところを話しておくれか)

そう考へた龍斗は口を開いた。

「……悪いが俺には従者は必要ない。俺が元いた国、大和では俺は忍として生きてきた。忍の最優先は弱点を極力減らす事。幾ら力があつても弱点を突かれたら終いだからな。だから忍は情を無くす。たとえ幼馴染が隣で死にかかっていようと見捨てる……俺はそういう人間なんだ」

2人はただ黙つて聞いていた。忍など聞き慣れぬ表現があるもの、何が言いたいのかは察しがついた。

「そういう訳だから俺は他人を従えるような器じやない。取り敢えず考えといてくれないか、俺から離れて暮らしていく方法を。こつちはあんたらを解放するように言えば……！」 ぐつ、あああ……ちつ、こんな、時に……「ああ……！」

龍斗は突然椅子から転げ落ちた。頭を抱え、うめき声を上げながら床で身悶える。ただならぬ容態に驚く2人。

『主人様！？』

「……来るな……」

「し、しかし……！」

龍斗の身を案じた2人が近付こうとするのを左手を出して止めた。龍斗の顔を見た2人は背筋が凍つた。苦悶の表情を浮かべる龍斗の顔。だがその目は明らかに異常だつた。右目はこの数日ですっかり見慣れた藍色の瞳。だが左目は充血し、血のような真紅の光を放っていた。その光には人間らしい理性など欠片もない。あるのは獣が持つような、あるいは怪物が持つような、本能的な欲しか感じ取れない凶暴な目である。

「物憑きだ……忍を目指す者に多いらしい……くつ、そして俺も例外じゃない……」

「そ、それはどのよのうな病ですか！？」

ミーアが叫ぶように言つた。本当は龍斗の傍まで行きたいのだが、来るなと命令されている以上そこから近づく事は出来ない。レイア

もまた同じである。

「ぐ……病じやない、分からぬかもしれないが、こいつは、……亡靈とか妖怪の類、が……俺の体を、のつ、取ろうとしてる……ぐあ

『女だ！』

龍斗の方から2つ目の声が聞こえてきた。龍斗の声ではない。それよりも低く下品な声。まるで私達が出会った奴隸商人のようだと2人に鳥肌が立つ。

「まずい、逃げろ！』

『犯す！』

『早く！』

『殺す！』

『この……』

『喰らう！』

龍斗が何かを言つ度に謎の声も主張を繰り返す。片膝をつき、息を荒げ、歯を食いしばる龍斗の様子にレイアは覚悟を決めた。

『早く……視界から、消えてくれ……ぐあ……出ないと……！』

『喰らう！』 ひたすら殺す！』 殺す！』 殺

龍斗の中で時間が止まつた。先程までの痛みも、声も、何も感じなくなつた。いや、一つだけ感じるものがあつた。温度だ。龍斗を包み込むように背中に回された腕の感覚。そして左半身に感じる熱。肩甲骨の辺りには胸の双丘が当たつているが、今の龍斗にそこまでの余裕は無い。驚きに目を丸くした龍斗はそのまま視線を左に向けた。そこには透き通るような金髪に薦色の目、他ならぬレイアの顔があつた。

『何故……逃げろと……』

『申し訳ありません、命令に背いてしまつて……しかし、御主人様の事は我が事です。御主人様は全てを1人で抱えてらつしゃいます……理由はおぼろげに把握しましたが……私達では、駄目ですか？私達では、支えることすら出来ませんか？』

少し震える声で台詞が止まると、今度は右側に熱を感じた。見ればミーアが姉と同じように身を寄せていた。

「私も、頑張ります……お姉ちゃんよりは頼りないかもしませんが……」

「2人共……くつ……マイカード・オープン」

再び頭痛に襲われた龍斗は自身のカードを出現させた。正面に移動してきた2人を見ながら言つた。

「悪いが、2～3日の間、この部屋には一切誰も入れるな。お前ら2人も入つてくるな。何があつてもだ……それ、と……お前らは自由に生きる。奴隸じゃなく、俺がいなくとも自分で考え行動する、レイア、ミーアとして生きる……つ、俺の金は好きに使え。これが最後の命令だ」

『そ、それは……！』

「いいから出ていけ！」

龍斗の怒鳴り声に従い、レイア、ミーアは部屋を出た。錠を掛け音が鳴ると、堰を切つたようにミーアが泣き始めた。うずくまる妹を腕に抱きながらレイアも静かに涙を流した。

その後暫く、この旅亭には呻き声と泣き声が空しく響きわたつた。

第1-8話・龍斗の危機（後書き）

一日2度更新…だと…正氣か　＾＾；

その日の朝は珍しいことに快晴だった。窓から黄色い光が差し込み、ベッドに寝ていた龍斗を照らす。何処から飛んできたのか雀の鳴き声がよく響く。そんな平和の象徴ともいえる朝の中で龍斗は目を覚ました。はつきりしない視界で見えるのは木製の天井のみ。（ああ、この景色にもだいぶ慣れてきたな……それと、このベッドの感覚も……ん？）

龍斗は文字通り飛び起きた。掛け布団を跳ね除け、片膝をつくようになんとなく机の隙間と言つた方が正しいような床で構えを取つた。だがそこで有るはずのものが無いことに気付いた。素早く辺りを見回す。それが机の上にあるのを見つけ、素早く体を起こして手に握る。だがそこで龍斗は気付いた。

（誰かいる）

気配を感じた龍斗は反射的に左手に握る棒から刃を抜き放つた。いつもなら逆手に持つことが多いが、今回は普通の刀剣と同じように持つている。だがその刃は相手の喉笛に触れるか触れないかといつたところでピタリと止まった。

その先には、脇差『暁』の刃の先には、突然のことに驚き目を丸くしながら、両手を頭上に上げて立っているミーアの姿があった。

その後、龍斗は脇差を鞘に納め、目に涙を溜めたミーアの頭を撫でながら部屋を出た。出た瞬間にレイアと鉢合わせし、脇差と同じくらい鋭い眼で睨まれたが、事情を説明して何とか抑えてもらつた。空腹感を覚えた龍斗は1階の食堂に降りて適当な席に着いた。レイア、ミーアは相変わらず直立不動で待機しようとしていたので命令して反対側に座らせた。

「……にしても、やけに静かだな」

龍斗が辺りを見回すと、食堂内には3人以外誰もいなかつた。不思議に思つていると不意に画面が褐色に染まつた。

「そうさねえ、どつかの誰かさんが亡靈騒ぎ起こして叫びまくつてたからねえ、客は全員恐れをなして逃げちまつたんだよ。まったく、商売あがつたりだ」

「す、すいませんでした！！」

瞬発的に立ち上がつた龍斗は直ぐに腰から折れて頭を下げた。相手はこの旅亭の女将だつたのだ。

「えと、ちゃんと弁償しますので」

「あんた、東龍斗つてので間違いないかい？」

「！……何故それを？」

旅亭は基本的に宿泊客の名前などいちいち聞かない。人数が多くて忘れることがあるし、昼夜問わず食事だけを利用する客も多い。宿泊客のことは止まつている部屋の番号を使って何号室の人、と呼べば事足りる。龍斗は宿を取る時にする必要のない名乗りなどしていい。故にこの女将が龍斗の名を知る機会は無かつたはずである。だがその予測は外れた。

「うちら商売者は全員商人、ギルドに入つてゐる。けど、商売つつたつてピンキリさ。だからギルドの中で更にグループを作つた。武器屋なら武器屋グループ、旅亭なら旅亭グループって感じでね。特に旅亭のグループメンバーは他のグループメンバーと自由に通信できる手段を持つてゐる。そうすりや客との間に信用が出来る。1人で全く得体の知れない宿を探すよりか仲の良い主人が勧める宿の方が安心できるだろう？」

龍斗が頷いた。褐色の肌を持つ初老の女将は満足げに頷き返した。
「でだ、あんたのことは『デイビス』とこから聞いてるんだよ。『迷惑料を払われる方が迷惑だから、もしそういうことがあつたらあんたからは受け取らない』ってねえ」

龍斗は啞然とした。まさか『デイビス』夫妻とこの女将が繋がつていたとは思わなかつたからだ。女将はそれを見てしたり顔を作つた。

「というわけで、あんたからは迷惑料は過度には要らない。少しはもううよ、あんたら3人の宿泊代に加え、1人部屋5日分。もしそれ以外で払いたいってんなら……そうだね、『除霊したからもう安心です』て張り紙でもしてもらおうかねえ。ま、その前に冷める前に食べちまいな」

豪快な笑い声と共に女将は厨房へと去つていった。テーブルに皿を戻すと、さつき女将が持つてきた料理の皿が並んでいる。「さて、食つか。頂きます」

そう言つて手を合わせると、龍斗はパンを手に取つて食べ始めた。しかし暫くして2人の様子を見た龍斗は軽く諫めた。

「何やつてる、さつさと食えよ。冷えたの食つたつて美味しいぞ」「い、いえ、私達は……」

「奴隸がご主人様と同じ席で、まして同じ物を食べるわけには……」

今まで何度か食事の機会があつたが、2人が龍斗共に食べる」とは無かつた。その理由を龍斗は今初めて知つた。

（またそれか……奴隸奴隸つて、命令せんかつたらマジで動かねえ……なら）

龍斗はあることを思いついた。思い立つたが吉田と龍斗は直ぐにそれを実行した。

「そうか、なら選択権を与える。すぐに飯を食つか、食わずに腹を空かせたまま過ごすか。どっちでもいいぞ。俺はどうもしない。さ、選べ」

暫くの間、龍斗は2人の反応を見ていた。命令は命令だが、その中身は自分の意志で選ぶこと。逡巡する様子が何とも可笑しかつた。龍斗の予想通り、まず空腹に負けたのはミーア^{よつや}だった。彼女が食べ始めるのを見て、こちらの反応を伺つてから漸くレイアがパンを手に取つた。出会つてから初めての3人での食事だった。

食事を終えた3人は龍斗の部屋で腰を下ろしていた。前回と同じ

で、レイア、ミーアが椅子に座り、龍斗はベッドの上で胡坐をかい
ている。だが表情は、3人共以前より固いものとなっている。無表
情の龍斗が口を開いた。

「さて……何故命令を無視した。部屋に誰も入れるな。お前らも入
つてくるな。そう言つたはずだ。俺はベッドで大人しく寝た記憶は
ないぞ」

「はい、確かにそう承りました。なのでご命令通り3日間、部屋の
中には誰も入れませんでした。私達が部屋に入ったのはその後、
4日目の朝です。ご主人様の声が途絶えていましたので何かあつた
のか、と」

緊張した面持ちの3人だが、レイアは毅然とした口調でそう言つ
た。ミーアは少し不安を持つていたが、姉の言葉に追従するように
強い意志をたたえた目で龍斗を見る。龍斗は相変わらず無表情のま
ま。

「……なるほど、違反はしていないか。だが何故見捨てなかつた。
あの異常さを目の当たりにしてなお、奴隸だからとか言うなよ、自
由な人間として生きていくと言つたはずだからな」

「……はい。……ですのできれは私個人の意思で行つた行為です。
個人的にお助けしようと思つてしまつたことです」

「わ、私もです！！……それに、今まで何の役にも立てなかつた
し……」

「……物憑きが来る前に話したことも覚えてるな？」

「はい」
「はい」
「……ハア、もういいや、結果的にあんたらには何も無かつたよう
だし」

そう言つて龍斗はベッドに寝転んだ。頭の上で手を組んでいるそ
の姿に女性2人は戸惑いを隠せなかつた。氣まずい空氣を何とかし
ようとミーアが口を開いた。

「あ、あの、1つ聞いていいでしようか？」
「ん、何だ」

「その……物憑き、とは一体、何なのでしょうか？」

第20話・物憑きと……

「その……物憑き、とは一体、何なのですか?」

「……ちょっと、ミーア、それは……!」

单刀直入に質問してきたミーアに対してもレイアが慌てた。恐らくは主人である龍斗にとつて苦となるもの。それを口にさせるのはまづいと考えたのだ。だが龍斗が止めたのはレイアの方だった。

「あー、レイア、別に構わないから。分からなくて当然だからな、どうせならちゃんと教えとこ!」

「……分かりました」

妹の方を向いていたレイアは姿勢を正して座り直した。龍斗も腹筋を使ってベッドから体を起こし、胡坐の状態に座り直す。

「始めてに確認したいんだが……亡靈とか妖怪とかいうの分かるか?」「ヨウカイ、は分かりませんが……亡靈というのは、死後人間の魂が現世に留まり、実体化する『ゴースト』のことですね? それならどこの大陸でも伝説が残っております。実際に見た人もいるようですが、あまり信憑性のない話ばかりです」

意外なことに姉よりも妹の方が早かつた。龍斗は首を縦に振った。

「そうか、こっちでは亡靈^{ゴースト}か。早い話その『ゴースト』が俺に憑りついて俺の体を乗っ取ろうとしていたんだ。それが『物憑き』だ」

そう説明するとレイアはにわかに信じがたいといった様子で眉を顰めた。一方ミーアは顔を青くした。

「そ、それって、『ゴーストに呪い殺されるということですか?」

「いや、死にはしない、こともないのか。あいつが勝つて俺の体を完全に支配するようになれば、今こうしてあんたらと話してる東龍斗という人格は消えるからな。2人共聞かなかつたか? 俺じゃない、誰か別の奴の声を」

2人が首を縦に振つた。その体には鳥肌が立つていて

「なら、奴が何を言つてたかも聞いてるよな。『殺す』『喰らう』『

『犯す』……奴はそういう欲の塊だ。正直あんたらがいない方が抑えやすかつた。故に命令でも何でもいいから出ていつてもらつた。
すまなかつた

「い、いえ、奴隸が命令を聞くのは当然のことなので
「そ、そうですよ！！」

頭を下げる龍斗に2人が慌てて声を出す。立ち上がりうとした2人だつたが、続く言葉に力を失つた。

「あんたらを巻き込むのは避けたかつた。他の誰かを巻き込むのだけは、避けたかつた」

部屋の空気がさらに重みを増した。まるで肩に鉛を乗せてくるようを感じる。かなり逡巡した様子のレイアが口を開く。

「……やはりご主人様が抱えていらっしゃるものは、1人では重すぎるものですね……でも私達の力ではお役に立てないのですよね……」

そう言つて顔を伏せた。再び鉛の空気が支配するかと思われたその時、龍斗の言葉が空気を変えた。

「いや、役には立つてると思うぞ」

「……え？ で、でも……」

驚きのあまりレイアは声が出なかつた。ミーアは途中で言葉を止めたが、2人のは同じことを思つていた。
(私達は何もしていらないのに……)

それを察した龍斗は苦笑しながら言つた。

「流石に今回は俺もやばかつた。奴に飲み込まれるか、そうでなければ俺ごと死んでいただろうな。何せ、俺は気付けで自分の手首を切つていたんだから」

レイア達は4日目の朝、龍斗の部屋に入った時の事を思い出した。部屋中に鉄臭さが漂い、床には右手に脇差を持ち、左手首から血を流す龍斗の姿。彼が死んだと思ったミーアが泣きそうになるのを制

し、レイアが脈を測つたところで初めて龍斗がまだ生きていると確認できた。流れた血の量から考えると少しでも遅れていたら危なかつたかもしれない。

「……それでも、前の俺ならしなかつたな。奴との戦いにてめえの命かけるなんてな。今回それが出来たのはあんたらのことが頭にあつたからだ。自分でもよく分からんが、奴があんたら2人を標的にした瞬間、俺は躊躇いなく刃を抜いてた。初めて知つたよ。血が抜けていくのと同時にあいつの力も弱つていつた。直接じゃないが、今回あんたらは物憑きから俺を救つてくれた、命の恩人なんだよ」

「ありがとう、と龍斗は再び頭を下げた。だが彼が顔を上げると

人は同時に溜息をついた。レイアが言う。

「物憑きを払うお役に立てたと言つて下さるのは恐縮ですが、そのお陰で失血死寸前だつたわけですから。結果から申し上げると喜べません」

「ふむ……そういうやうだな。まあ、終わり良ければ全て良し、てことで」

「全然良くありません!!」

龍斗の言葉にいち早く反応したミーラが叫び、室内の時間が止まつた。

「ク、ククク……」
「フフ、フフフフ……」

誰からともなく笑いが始まつた。

「……ところで、その、私達はどうすれば良いのでしょうか」「場が治まつたところでレイアが曖昧な質問をしてきた。龍斗は首を傾げた。

「ん？　どういうことだ？」

「いえ、その……」主人様はご自分の死を予想されて……そうなれば命令する者がいなくなる私達の身を案じてあのような命令をされ

たのですよね？」

「その、結果的にそうならなかつたのですから……私達は奴隸です。ご主人様にお仕えする義務が」

「あー、それなんだがな」

龍斗は渋い顔で頭を搔いた。そして続ける。

「俺は自分が言つたことの責任はちゃんと持つ主義だ。だからあの時言つた最後の命令つてのは撤回しない。これからどうするかは自分で決めてくれ。俺は……つーか、最初からだけあんたらを奴隸とは思つていない。ま、それだけだ」

龍斗がそう言うと姉妹はひどく困惑した様子でこちらを見ていた。やがて後ろを向いて2人でこそこそ話し合いを始めた。『即応の霧』を発動させて会話を聞き取るうかとも思つた龍斗だったが、結局それをすることは無かつた。

「ご主人様、よろしいでしようか？」

「んあ？ ああ、結論出たか？」

腕を組み壁にもたれていった龍斗は重心を前にずらした。姉妹は互いを見ると最終確認で領き合い、声を揃えて言つた。

『私達は最後までご主人様にお仕え致します。有事の際には全力でお守りいたします』

「……ハア、まさかこんなことになるとはなあ。後悔先に立たず。言つとくが、命の保証はしないぞ」

「構いません。奴隸に身を落とした時から覚悟はしていました」

「それに、私達にはもう失うものはありませんし」

藍色の眼が2人の顔を注視した。そこには迷いが無かつた。完全に腹を括り、覚悟を決めた者の顔があつた。そこに嘘偽りのないことを見て取つた龍斗は口を歪めた。

「フフ、ああそうかい。ならもう何も言わない。たださつきも言った通り、あんたらを奴隸とは見ていない。そして、俺は女にほいほ

い死んでもらうほど薄情じやない。仕えてもらおうとも思つていな
い。あんたらに守られるほど弱くもないが……どうするか……んー
なら、家族みたいなもんとして扱うかね

「え、家族……ですか！？」

「そ、そんなもつたいたいない

「なら選択肢を与えよう。俺と対等の人間としてついてくるのか、

ここでお別れか

「うつ……」

レイアが言葉を詰ませた。再び視線を交わした姉妹はまた頷き合つて言った。

『承知致しました』

その返答に大きく頷いた龍斗は言う。

「なら色々と改善しないとな。まず対等な人間なんだから俺を『主
人様』と呼ばないこと。それから人間としての全権があるから、意に
沿わなかつたら権突いてよし。食事も^{わざわざ}態々^{わざわざ}分ける必要もないし……
そうかこれで妹2人か。ミーアが13、レイアが15か。あ、俺も

……あ

突然並べられる要求に慌てていた2人だが、奇妙な声を上げたところで龍斗に注目した。彼はレイアに聞いた。

「今日つて何日だ？」

「確か、10月30日ですが」

「あー……自分の生まれた日忘れてたな……いつの間にか16か俺
は

第20話・物憑きと……（後書き）

評価とかお気に入り登録数とかの数字が日に見えて上がっています。ホント恐縮です。皆さん有難うございます。

第21話・レイアの夜

妹が寝静まるのを確認すると、私は音を立てないようにつむづくり歩いて部屋を出た。一つは手に持つ燭台の火を消さないようにするため。もう一つは今寝たばかりの妹を起こさないようにするため。蝶番が鳴らないように扉を開け、部屋の外へと左足を出した。

しかし体重をかけた瞬間、木製の床が軋んで音が出てしまった。私は慌てて室内を見た。……良かつた、今の音で起きた様子はない。ほつと胸を撫で下ろし慎重に扉を閉めた。蝶燭片手に廊下を歩くのだけれど、またさつきみたいに音が鳴らないかと心配になり、自然歩みが遅くなってしまう。……念のため断つておくと、私は別に太って体重が重いわけではない。幼少の頃から様々な面で気を使ってきたためにそれなりに見目の良い容姿であると密かに自負している。しかしさか、それを後悔する日が来るとは思わなかつた。どうしてこうなつたのだろう。父も母も殺されたのに何故私達だけ残され、奴隸にされたのか？ 答えは簡単。海賊が容姿を見て金になると言つた、容姿ゆえに売られて奴隸にされ、また容姿を気に入られたが故に買われ……つまり、このような結果になつたのは全てこの容姿が生んだ結果。どうしてこうなつたのだろう。キリが無いとわかつていても、何度も考えずにはいられなかつた。

私は旅亭から出て建物の裏手へ回つた。酒場の明かりだろうか、夜だとのにあちらこちらに明りがある。今出てきた旅亭も夜は酒場として営業しているらしく、食堂の方から野太い声と光が漏れできている。表側は通りに面しているけど、その裏側には何もない。敢えて言つならば、大きな木が一本と、昼間は子供たちの遊び場となる何もない土地だけ。数年前に商人が何かを建てようとしていたけど、ある日盜賊に襲撃されて死亡。計画は頓挫し、以来手つかず

の状態なのだと女将さんが教えてくれた。

けれど私は他にあると感じた。それは闇。かつては、北方大陸にある母国の屋敷にいた頃は見下ろすだけだった、光の無い真っ暗な空間。こちら側にも少し光が漏れているから、完全な闇ではないけれど、すっかり環境が変わってしまった今はそれすら懐かしいと思えてきた。屋敷で見ていた風景と重ねながら空を見た。雲の無い群青の中に大小様々な星が瞬いている。でもしばらくすると景色に違和感を覚えた。おかしい。何処でどう見たところで夜空が変わらわけではないのに。そして気付いた。「変わったのは私の方なんだ」と。確かに夜空は変わらない。しかしあの時は屋敷の3階、自室のベランダから前を見ていた。でも今は、あの時見下ろしていた闇の中から見上げているのだ。そしてなんという皮肉だろう、今の私の状況にピッタリではないか。そう考えるとあまりに可笑しくてつい笑ってしまった。まあ、どうせ誰もいないのだから周りを気にする必要もないか。

「女の1人歩きとは不用心だな」

突然声を掛けられた私は本当に驚いた。慌てて周りを確認したけど、何所にも姿はない。さっきの感じだとすぐ傍にいたとしか思えないのに。

「……ククク、何処見てるんだ？ そっちに俺はいないぞ」

今度は分かった。私の頭上だ。でも、見上げた瞬間私の驚きは更深くなつた。

「『ごしう』」

「おい、昼間言つたばっかだよな、レイア。お前はもう奴隸じやねえから、その呼び方するなつて」

「あ……申し訳ございません、龍斗様」

私が背を預けようとしていた大木の上に座つていたのは、他の誰でもないご主人様……東龍斗様だつた。月光の影になつて表情がよ

く見えないけれど、あまりいい顔はしていらっしゃらないだらう。
何故なら。

「ハア……あんま変わつてないだろそれ。身内にそんなこと言つ奴
俺は知らないぞ」

そう、この人は主人扱いされることを嫌つてゐる。もつと言えば、奴隸制度そのものを嫌つてゐる。あの人にとつて私達は最初からただの人だつた。でも、私たちにとつてあの人はそうじやない。家族も家も、何もかもを失い、拳句この我が身すら失いかけていた绝望の中から救つてくれた人。あの日以来、与えられることの無かつたものを与えてくれた人。物憑きの一件。あんなことがあつたのに、あんなことの真つただ中というのに、私達の身を案じて守ろうとしてくれた人。この人からして頂いたことはどれも身に余る、感謝してもしきりないことばかり。私はこのご恩を忘れたくない。……だからこそ。

「なら、ここにいます。幾ら龍斗様の頼みでも変えるつもりはありませんので」

「確かにお前の自由だが……何も敬語使わんでも……なあ、ミーア？」

あの人は振り返ることもなくそう言つた。振り返つてみると、そこには確かにミーアがいた。建物の影から出した顔と手が、月の光を浴びて白く輝いて見える。その顔は私と同じ、驚きで目を丸くしている。もつともその理由は正反対。ミーアは気づかれたことに、私は気付かなかつたことに。

「あ、えと、ごめんなさい。音がしたから目が覚めちゃつて、そしたらお姉ちゃんがどこかへ行くのが見えたからそれについてて……おお、お邪魔してすみません!!」

「別に邪魔じやないからいいさ。レイアが来たのだつて予想外だ。別に俺が呼び出したわけじやないし」

「そ、そうですか」

ほつとした様子の妹はそのまま私の隣まで來た。そこで肝心なこ

とに気が付いた私はあの人を見上げた。

「ところで龍斗様は何故こんな時間にこんな場所に？」

「ああ、ちょっと昔のことを思い出してな。軽い月見に来ただけだ」私はその視線の先へと顔を向けた。……そこには半円の白い月があつた。暫くして、目だけを動かしてあの人を見てみた。月光に照らされ、浮き彫りになつたあの人藍色の眼を見ていると、不思議と気持ちが落ち着いてきた。向こうがこちらに気が付いている様子はなく、私はまた月に目を戻した。気が付いていたとしてもあの人はきっと気にしない。

……何故だろう。あれほど心を占めていた後悔の念が今はあまり感じられない。いつの間にか重い荷物が肩から降りている。これもあの人のお陰なのだろうか。

「さて、そろそろ戻るか。お前らも、夜更かしは女の敵だぞ？」

『はい』

あの人は木から飛び降りた。私とミーラはその背中を追つていつた。

第21話：レイアの夜（後書き）

女性一人称つて難しいね、うん。しかも大して意味の無い話です。
すいません。まあ、練習回としてお見逃しください

旅亭の裏にある何もない広場。商人が何かを建てようとして整備されたものの、計画が頓挫して放置状態となっている場所である。普段なら近所の子供達が走り回って遊んでいるのだが、その子供たちは今建物の屋根の下でただ呆然としていた。彼らが何故そのようなことになっているのか。それはその目の前に広がる光景を見れば明らかだつた。

「無常の闇を斬り裂かん、『暁』」

龍斗は脇差を抜いて相手が繰り出した槍の軌道を逸らせた。それが地面に当たるのを見届ける前に龍斗は上体を後ろに反らす。先程まで彼の首があつたところにまた別の槍が繰り出されていた。そのままブリッジをするように手をついて、足を跳ね上げ槍を蹴る。勢いそのままに後転し、体を起こしたところに2本の槍が同時に、左右から挟み撃ちの難ぎでその胴体を狙う。跳躍することでかわした龍斗だが、すぐにその判断がまずいことに気付く。

「やべつ

「隙あります！」

槍は平行になつたところでピタリと止まり、そのまま上へと突き上げられた。空中では人間はまともに身動きできない。その隙をついた攻撃で、普通に行けば確実に一撃を入れられる。

だが龍斗は体を捻り、2本槍の間に体を納めることで場をしのぎ、着地と同時に脇差の柄を口に咥え、槍を持つ2人の間へと突進する。2人が槍を振り下ろす。だが既に槍の交差点より内側に龍斗の侵入を許している。龍斗は両手を広げ、2人の首を掴んだ。

『……参りました』

槍を持った2人、レイア、ミーアは脱力して槍を手放した。

「ああ、危なかつた。危つく刺殺されるところだつた」

元気に走り回る子供達を見ながら、龍斗が水で喉を潤す。その左隣にはレイア、ミーアが並んで座り、彼と同じ水が入つた木製のコップを持つている。ミーアが口を開いた。

「いえ、私たちなどとも。龍斗様の方が凄いですよ。まさか槍2本とやりあつて勝つてしまふなんて」

「ハハハ、いや、あれは本当に運が良かつた。確かに槍はリーチ長いし、2体1もきついが、手加減されてりやあ、な」

「う、とミーアが呻き声を出した。忍として何度も死線をかいくぐってきた龍斗の眼からすれば、さつき姉妹が見せた槍捌きは随分と甘いものである。例えば龍斗が空中に逃げた時。本気で仕留めようとするならば、穂先を上げて斬るのではなく腹や胸に突きを入れてくるだろう。幾ら命を狙つつもりで、と予告していたとしてもやはり仕える相手に攻撃するとなると心理的ブレーキがかかるものなのだ。

「朝話を聞いた時には半信半疑だつたが……本当に強いんだな」

「私達の家は代々王国直属の騎士を輩出する武家の名門でしたので。女と言えどそれなりに武芸を身につけております。初めてお会いしたときに一緒にいた……あの黒髪の男性の言葉を覚えていらっしゃいますか？」

レイアの言葉で龍斗は瞬時に思い出した。姉妹と共に馬車の中にいた、黒髪黒目の人奴隸の男の事である。他とは何かが違うと感じ、ずっと印象に残つていた。

「ああ、そういうや言つてたな。5人全員戦奴隸だ、とか何とか」「そういうことです。……もつとも、私達の場合はそれだけではなかつたでしょ……が……」

2人の気が沈むのを感じ取つた龍斗。これはまずいと話題をその男のことにする。

「あ、そ、そういうやあの男なんか色々引つかかるんだよなー。態度や口調もそうだが魔法が使えるとか何とか」

『……え!?』

龍斗の言葉に2人は驚いた。が、2人が驚く理由が分からぬ龍斗はきょとんとするだけだった。

「ん、どうした?」

「龍斗様、あの方は本当に魔法が使えるのですか?」

「ああ、お前らが連れ去られた後追いかける時に、なんて言つてたか……『風の精霊シルフよ、我らに力を、フェアウインド』だつける。姉妹は顔を見合わせた。目を丸くしたままレイアが龍斗の方を見

「……それは確かに呪文ですね。となると、やはりそれなりの身分だつたのでしょうか……?」

「ちょっと待て。……あの時の様子、そんで今の言い様だと……魔法つてのはそう簡単に使えるものではないのか? いやそもそも魔法つてなんだ?」

「……ご存じないのですか?」

「小さな島国に魔法なんてものは無かつた。大陸出身の母さんからも聞いた覚えはないな……」

物憑きが去つて目覚めた後、龍斗は自らの過去について姉妹に語つていた。龍斗は基本的に自分の情報を他人に与えることはしない。しかし身内として扱う以上この2人には話しておく方が良いと判断したのだ。その反応と言えば、龍斗が姉妹の経験を聞いた時よりも随分オーバーだった。もつともこれは、感情を表に出さない訓練を積んできた者とそうでない者との比較なので仕方のないことである。そんなことを軽く思い出している頃にレイアが説明を始めた。

「魔法というのは……簡単に言えば、神に祈りを捧げる代償に神の力を具現化したもの、というところでしょうか?」

「……すまん、分からん」

「でしううね……」

そうして2人で考えあぐねているとミーアが田の前に移動してきた。そして口を開く。

「だつたらまず、見てもらうのが早いのでは？」

「……なるほど。龍斗様、如何でしきうか？」

「ふむ、百聞は一見に如かず。その方が早いかもしけんな。頼めるか？」

『はい！』

2人は満面の笑みで返事を返した。

ユニークが2800超え

読んで下さる皆様有難いござります。

「火の精霊サラマンダーよ、我が求めに応じその力をここに示せ、『ファイア』」

ミーアが伸ばした右手の先に突然何の前触れもなく炎が上がった。焚き火程度の炎が、消えることなく地面の上で揺れている。龍斗は目を見張った。

「ほう、すげえな。焚き木も火種も無しに」

「ありがとう」ござります。といつてもただ発火させただけなので。下級魔法ですけど」

褒められたことで笑顔になつたミーア。場所はもちろん旅亭の裏にあるただの広場。ただし他人を巻き込まないようになると森の近くまで移動している。ミーアは顔を崩さないまま説明した。

「このように、呪文を唱えて一定の魔力を消費することで魔法が発動します」

「出た火はそのままか……て、このままだと山火事じゃないか?」「ご安心下さい。私が消火いたしますので」

そういうと今度はレイアが両腕を上に上げた。

「水の精霊ウンディーネよ、我が求めに応じよ。汝の水の力を以てこれを滅さん、『ウォーターボール』」

空中で何かが弾けたかと思うと、そこには大量の水が浮かんでいた。レイアの腕が下ろされると同時にその水も下に動き、ミーアが出した炎の上へと落ちていく。小さな音と共に炎が消えた。それでも水が消えたわけではなく、まだ半分ほどの量が空中に浮かんでいる。水の球体は龍斗のそばを通り過ぎる。それを目で追つていくと、最終的にレイアの手中に収まっていた。

「術にもよりますが、下級魔法であればこのくらいの操作も可能となります。これが詠唱魔法と呼ばれるものです」

そう言つとレイアは両手を叩いた。パンッという音と共に水球は

姿を消した。

「はあー、便利なもんだな。あ、そういうや呪文つてのはいちいち違うもんなのか？」

「はい、火操るなら火の精霊、風操るなら風の精霊、どどいの属性を使うかによつて祈りを捧げる対象は変わつてきます」

「……なるほどねえ。けど、何か引っかかるな……発動させる条件つて何だ？」

「はい、条件としては2つあります。1つは呪文を唱えること。そしてもう1つが魔力を消費することです」

「……魔力？」

龍斗は腕を組み、首を傾げた。レイアが説明を続ける。

「魔法を使用する時に必要となる力の事です。例えば走る、跳ぶ、剣を振る、といった動作をするには体力を消費しますよね。それと同様で、魔法を扱うには魔法を扱うための力を消費する必要があるのです。人によっては靈氣、生氣、などと呼ぶこともあるらしいですが」

「ふーん……ん？ 瞬氣……氣？」

レイアの言葉に引っかかるのを感じた龍斗だが、ひとまず流すことにして不思議そうに眺めている姉妹に続きを促した。

「あ、いや何でもない。んで？ 確か魔法は3つあるんだよな。1つがさつきの詠唱魔法、残りは？」

「あ、はい。もう1つは回復系、です。これは魔力によつて傷を治したり、体力を回復したりするものです。自身の回復はもちろん魔力を送ることで他の人の回復も可能です。効果は……既に体験されている通りです」

ミーアの言葉を聞いて龍斗は左腕の袖をまくつた。物憑きの際、彼は自分で自分の手首を切つていて。だが今その時の傷は何処にも見当たらない。気絶してた間に2人から回復魔法を掛けられたため実感はないのだが、自分で切り付けた傷を見間違ははずがない。それが跡形もなく消えているのはやはり回復魔法の効果なのだろう。

因みにこの魔法、切り落とされてたほど時間が経つていいならまだ繋がる望みもあるらしいが、無いものを再生するところは不可能だという。

「そしてもう一つ。これは正確には魔法と呼んで良いのかどうか分かりませんが……一般に強化系と呼ばれるものがありますか？」

「強化系？」

「はい、これは文字通り魔力を体の強化に使うものです。一番多いのは筋力強化でしょう。実は私達が自在に槍を操れるのもこの強化の恩恵を受けていたりします」

「なるほどな。さほど筋肉があるよう見えないので、よく槍が振るえると思つたらそういうことか」

「……なんか軽く馬鹿にされてるような気がするのですが……」

「気のせいだろ。そうか、魔力、靈氣か……氣……氣？ あつ、待てよ、もしかしたら……なあ、その強化系つてのでさ、感覚を強化することはできないか？」

「感覚……ですか。少々お待ちを」

先程引っかかったことを思い出した龍斗の要求にレイアが答えた。彼女は静かに目を閉じると、一つ息を吐いた。すぐに龍斗は変化を感じ取つた。

（これは……！）

龍斗は足元に気配を感じ、地面を見た。だがそこには特に何があるわけではない。目に見えるのは土だけだ。顔を上げるとレイアはこちらを指さしていた。

「感覚を強化しました。これで目を閉じていても相手がどこにいるか分かります」

試しに龍斗は数歩動いては止まり、動いては止まりを繰り返した。それに合わせてレイアの指も動き、龍斗がいる位置を正確に指してくれる。真後ろに回つてもちゃんと指してきた。そこで今度は後ろに下がる。暫くはこちらを指さしたままだが、あるところを境にレイアは腕を下ろしてしまつた。

(なるほど、ここが感知できる限界か)

龍斗は足元に転がっている少し大きめの石をいくつか拾い、レイアに当たない程度に適当に放り投げる。

「これは……石ですか？」

「そう正解」

「ひやつ！？」

レイアは思わず身をすくめた。突然後ろから声を掛けられたからである。レイアが振り向くとそこには龍斗が悪戯を成功させた子供のような、意地の悪い笑みを浮かべて立っていた。レイアは驚いた。一度真後ろに来られた時はちゃんと感じ取った。だが今回は、一切気配を見せずに背後に立つて見せたのだ。

「そ、そんな、いつの間に」

信じられないものを見たような様子のレイアに龍斗は種明かしをした。

「簡単なことだ。この感覚強化は地面の上にしか効果が無いんだよ。だからさつき投げた石の上を歩けば感知されずに済む」

「へえ、そうなんですか……あれ？ 龍斗様確かに魔法については何も……」

「ああそうだ。確かに俺は大陸に来るまで魔法といつものを知らなかつた。だがこれは知ってる感覺だ。忍術の一つ、意識を気に乗せて周囲に分散させ、気配を探る『即応の霧』の失敗版。そうか、気が。そういうことか」

納得した声を上げる龍斗。1人呟くその声は、首を傾げる姉妹にも聞こえていた。

「ああそうか……忍術は、妖術は、夢物語のような力の数々は……『魔法』だったのか」

いつも読んでくださっている皆様ありがとうございます。
不定期更新ですが、よろしくお願いします。

「そりか……忍術は魔法だったのか……」

そう呟いて1人笑う龍斗に困惑する姉妹。

「あの、龍斗様？ ニンジュツとは一体……」

「ん、ああすまん。そういうやこつちには忍がいないんだつたな。分かるわけもないか」

そう前置きしてから龍斗が説明した。

「忍術つてのは忍と呼ばれる人間が使う術のことだ。中身は色々あるが、主に身体能力強化だな。感覚を研ぎ澄ませて気配を探る『即応の霧』、通常の何倍もの力を発揮することが出来る『金剛鉄身』、それから普段よりも速く走ることが出来る『疾走』なんてのもあつたか。気を集中させる事によって発動すると教えられているが、正直誰も本気で発動を信じてはいない。呪文を唱えて集中力を高めることで動きが良くなる。それを呪文のお陰だと錯覚する。そういうもんだと思っていた。それと忍術の中には到底実現不可能と思われるものもあつた。山のよう大きい蛙を呼び出すとか、水の上や空中を走るとか、口から火を噴くとかな。そんなことができるはずがないと思っていた」

「な、なるほど。……思つていて、て過去形ですか？」

ミーアの問いに龍斗は笑みを深くした。

「そうだ。ついさっきまではな。だがレイア、ミーアが使う魔法つてのと、俺が教えてきた忍術つてのはかなり似てていることに気付いた。そしてさつきの、レイアの感覚強化で確信した。即ち、名前が違うだけで力としてはやっぱり魔法なんだろうな。だが、何か特別な発展の仕方をしたんだろう。所謂強化系の魔法に特化しているんじゃないだろうか」

未だ訳が分からぬという様子を見た龍斗は一つ頷いた。

「よし。百聞は一見に如かず。今度は俺が実演する番か」

そう言つて龍斗が取つた行動は姉妹にとつても不思議としか言いようが無いものだつた。脇を閉めずに胸の前で手を組んだ。それもただ手を合わせてゐるだけではない。指を絡ませ、人差し指を伸ばし、それと対をなすように親指も合わせる。その状態で呪文を唱える。

「森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

途端にレイアは、自分の感覚強化を感じた時の龍斗と同じような顔をした。隣のミーアも同様の顔をいつている。但し、感じたものは龍斗とは違つていた。

（……嘘、これは、感覚強化？ でも、何か……）

その心の声を汲み取つたかのように龍斗が説明をした。

「これが今言つた忍術の一つ、『即応の霧』だ。効果はさつきレイアがやつたのと同じで、周囲の気配の察知。だが決定的に違うことがある」

「……もしかしてこれは、面ではなく空間で把握、できるのですか？」

「『J明察』

目を閉じたままの龍斗が、背後に移動したレイアに笑みを向ける。自分がやつたのと同じ効果だと分かつてはいるが、見えてないはずの人間に突然、しかも正確に顔を向けられることに軽く恐怖を覚えた。

「ハハハ、まあそんな怖がるなつて」

「え……な、何故」

「自分で分かつただろ、『即応の霧』は地面の上だけじゃない。空中も含めた一定範囲内の空間の気配を察知することが出来る。そう、空間で相手を感じ取るが故に表情を読み取ることも不可能ではない。まあ、普通そこまで気にしないけどな。とまあ、前置きは置いといてだ」

姉妹が首を傾げるのを感じ取った龍斗。次に言う言葉の反応を楽しみにしながら龍斗が言った。

「じゃあ2人共、槍構えて」

『え?』

卷之三十一

卷之三

果たして、龍斗の予想通りの反応だった。

「あの、本当にやるしいのですか？」
「ううん、さつきも全然当たらなかつたんですけど……」

「ああ、構わん。てか、さっきのあれば本当にやばかったぞ。途中で脇差抜いたろ。あれで防いでなかつたら確実に喰らってたぞ。というわけで、今回俺は武器を持たない」

「N-0°」掩体合集

「 そう。俺は全てを避ける。そして武器を手で止めたま俺の勝ち。
2人は俺に一太刀でも浴びせられたら勝ち。負けた方は勝つた方の
言つことを一つ聞く、てのはどうだ? 」

その提案に驚いた2人。
だが姉妹は互

に槍の穂先を向けた。因みに2人の格好は膝が隠れる程度の丈がある色違いのワンピース。その中にはレギンスを穿いているため戦闘行動でも難なく動ける。

「よし、なら始め！！」

「！」

開始の合図と同時にミーアが槍を突き出した。だが目を瞑つてい
る龍斗は直ぐ反応し、右腕を隠すように半身をひねる。

「不意打ちとはやるねえ」

「足元への突きから足払い」
中があつたところにはレイアが槍を縦回転させて斬りを放つていた。龍斗は左足に左足を曲げて姿勢を傾ける先程まで背

龍斗が後ろに一步下がると今言つた通りの攻撃がやつてきた。レイアの上段突き、ミーアの薙ぎが同時に襲いかかるも上体を逸らして上手く避けた。

その後も2人は流石のコンビネーションで突き、薙ぎ、回転斬りを繰り返す。だが龍斗は目を瞑つたまま、時折何処をどう攻めてくるのかを言い当てながらことごとく避けていく。そして、手合せが終わりを迎える時が来た。

「肩を狙つて振り下ろす」

左右から振り下ろされた槍を龍斗の手のひらが掴んだ。そう、龍斗の勝利条件が満たされたのだ。

「……参りました」

龍斗が手を離すと2人は槍を引き寄せて地面と垂直にした。多少は腕に自信のあつた姉妹は術を使つているとはいえたままの相手に負けたことで氣落ちしているようだつた。2人は、そよ風が吹いた時肌に感じるようなあの感覚が無くなつていくのに気付いた。龍斗が術を解いたからである。

「分かつたる。この術は相手が何処にいるかだけじゃない。どう動くかも分かるという代物だ。で、勝負の報酬なんだが……レイア、ミーア、俺に魔法を教えてくれ」

『えつ……！』

俯いていた2人は顔を上げて驚いた。いや、驚いて顔を上げ、そこで更に驚いたといった方が正しい。それに構わず龍斗は続ける。

「忍術としての教えしか受けていないからあれだが、ちゃんと教えてもらえば俺にも魔法は使えるんじやないかと思つてな。……駄目か？」

「あ、いえ、その、それは……約束なのでいいんですけど……その日は……」

「眼？」

龍斗が首を傾げたところへミーアが近寄ってきた。腰の辺りにあるポケットのボタンを外し、中から小さな手鏡を取り出す。どうぞ、

と渡されたそれを見て、龍斗は眉にしわを寄せた。

「……何だ？ 紫の……田っ？」

鏡に映った龍斗の眼の虹彩は、普段の藍色から紫へと変わっていた。

た。

第25話・清算（前書き）

ユニーク3500人越え

お気に入り登録44件

読者の皆様本当にありがとうございます

「うーん、紫な……」

「もしかして、魔力の使用が原因では？」

そう言われた龍斗は目を閉じて意識を集中させた。体の中に何か表現できそうにない物を感じる。これが気、こちらで言うところの魔力。龍斗はそれに意識を向け、体の中心に集まる様子を思い浮かべる。胸の辺りに大きな球体のような物を感じた龍斗はそれをへその辺り、丹田と呼ばれる場所まで移動させ、そして消滅させた。なお、この作業にかかった時間はほんの数秒ほどである。

「治つたか？」

「……ええ、そうですね、元に戻つてます」

ミーアの確認を取つた後、改めて手鏡を見る。そこにあるのは馴染みのある藍色。1つ息をついた龍斗は礼を言つて手鏡をミーアに返した。ミーアがそれをポケットに戻す間にレイアが声をかける。

「しかし、紫、ですか」

「何か問題なのか？」

「ああいえ、そういう訳では。以前、紫の眼について何か聞いていたような気はするのですが……申し訳ございません」

頭を下げようとするレイアを途中で止めさせ、龍斗は軽く肩を回した。

「まあ何でもいいや。害は無い感じだからな」

「はい、呪いとかそういう話ではなかつたので大丈夫だと思います。それにこれは一般にはあまり知られていない話ですし」

「何でそんな情報を、てそうか。貴族出身だったか」

「はい」

彼女らの出自を確認したところで龍斗は気付いた。いつの間にか空は赤に染まろうとしている。

「ああ、もうこんな時間が。んじゃあさつさと戻るか」

『はい』

3人は旅亭へと戻つていった。

翌日、龍斗達3人は長く世話になつた旅亭を後にした。勿論、請求された料金を支払つてである。この時誰がお金を支払うかで結構もめたのだが、最終的にそれぞれ1部屋分の料金、龍斗はそれに加え賠償金もということで収まつた。

暫く大通りを歩いていくと、龍斗は白い石造りの建物の前で止まつた。その入口の上には堂々と「冒険者ギルド」の看板が掲げられている。

「俺についてくるとならやつぱ、同じ職の方がええわな。て、本当にいいのか?」

「私達の事ならお気になさらないで下さい」

「そうですよ、それに、自分で決めた事ですから」

「……なら、もう何も言わんさ。じゃあ2人の登録をしつかないとな。それともう一つ。んじゃ行きますか」

『はい』

龍斗は両手で木の板を押しながら建物の中へ入つていった。

「すいません、討伐クエストの清算をしたいのですが」

「かしこまりました。ではカードと特定部位の提出をお願いします」

「ああ、はい。マイカード・オープン」

龍斗はカードを出現させ、背負っていた麻袋の1つと共に事務員に渡した。その女性は傍にあつた水晶にカードをかざした。水晶から淡い緑色の光が現れ、空中に文字を浮かべていく。魔法というものの存在を理解し始めた龍斗は、流石に表情には出さないものの内心はやはり驚いていた。事務員の女性は宙に浮かんだ文字を読み上げる。

「ええと、クエストは……アサンの森での、ワイルドボアとハウンドドッグですね。では特定部位の確認をさせて頂きます。2、4、6……ハウンドドッグの牙が20本、ワイルドボアのが18本。単価は……あ、あつた。ハウンドドッグのが1本30ドルク、ワイルドボアのは1本50ドルク。1500ドルクですね」

「へえ、そんなもんなのか」

「はい。まあこの程度の野獸はさほど強くもないですし。……にしてもこれ、綺麗に洗つてありますね」

女性は牙を見て感心していた。それもそのはず、龍斗はその全ての牙を洗浄していたからである。

「普通はしないでしあげど、血や肉が腐つて臭いを出すのは、ちよつとね」

「わかります。私も仕事の関係上こういったものをよく扱いますが、皆さん血肉をそのままにしてるからもう臭いが凄いのなんのって。こちら側としてはこれは有難いことですね」

そう言つて笑つていたところに、後ろから小声で声をかけるものがいた。

「龍斗様、登録完了いたしました」

「ん、ああ、ご苦労さん」

それはレイア、ミーア姉妹だった。ギルドは役所仕事のため、仕事の内容によつて窓口が変わつてくる。登録の間ただ待つていてもなんだからと龍斗は精算窓口で清算をしていたのだ。

と、姉妹を見た時ふと思いついたことを事務員に尋ねてみた。

「あ、そういうや盗賊退治とかつてクエストにあつたりするんですか？」

「ええ、あると思いますよ。ああ、私はまだクエスト窓口を担当したことがないので。詳しくはクエスト窓口でお願いします」

龍斗は2つ隣の窓口に行つた。そこは突き当りの壁際にある窓口だつた。壁には淡い光を放つ魔法掲示板が掛けられており、黒い活字で「冒険者ギルド 依頼一覧」という文字が浮かんでいる。龍斗

が手で触れるとなれば文字は粒子となつて消え去り、代わりに別の文字が画面いっぱいに浮かび上がつた。それは横並びになつており、よく見てみると「オルボラ帝国傭兵募集」「バルコール王国ゴブリン討伐」「トズロ山でのアミカラタケ採取……」といふ感じに読める。つまりこれは現在ギルドが受け付けている依頼の一覧なのだ。下まで目を通し、何度も指先を上に跳ね上げて画面をスクロールさせる龍斗だったが、面倒なので直接聞くことにした。窓口にいた事務員に声をかける。

「すみません、ちょっとといいでですか？」

「はい、何でしょうか」

相手の女性は手元の書類から顔を上げて対応した。因みにギルドも銀行も、応対する事務員は女性が多い。印象を良くするための心理作戦だらうと龍斗は頭の片隅で思つた。

「ちょっと気になつたんですけど、盗賊の討伐クエスト……てあたりします？」

「盗賊はですね……アルドバール、ザザンクス、ソベンの3地方から依頼が来ますね。あ、あとアサンの森も」

「ではそのアサンの森の依頼を受けます」

「分かりました。ではカードを」と提示願えますか

カードを渡すと女性はそれを水晶にかざした。中に溜まる黒い粒子が、カードに吸い上げられる。暫くすると粒子が下に沈み始めた。女性からカードを受け取る龍斗。

「これでクエストの登録が完了いたしました。お気をつけて」

その言葉を背に龍斗は再び清算窓口に向かつ。既にアサンの森の盗賊は倒した後である。窓口担当は交代制のようで、今は30代と思われる男性が担当していた。

「アサンの盗賊退治の件、清算したいんですけど」

「分かりました。ではカードの」と提示を

了承の意を伝えると龍斗は2枚のカードを出した。1つはもちろん龍斗自身のもの。もう一つのカードは盗賊の頭デッジのものであ

る。

（あの時解放した黒髪の男、あいつに言われるがままに死後現れたカードを回収しといったが……まあ、金になりや儲けもんだな）

野獣を倒せばその証拠として体の一部を提出しなければならない。それと同じで盗賊討伐の場合も証拠となる物を提出する必要がある。その最たるもののがカードだ、とあの男は言つていたのだ。

「ほう、デツツが墮ちましたか。どれ、記憶を探つてみましようか」男が手をかざすと、デツツのカードは一瞬で真っ黒に染まった。何をしたのかと尋ねると、男はあっさりと答えた。

「このデツツという男は冒険者ギルドに登録していましたから、ギルド規約を違反した行為が無かつたかを調べたんです。カードは所有者と同化するでしょう。だから所有者が経験したことをそのままカードが記憶しているんですね。盗賊行為は当然規約違反ですから、すぐ結果が出ましたよ。ギルドの人間じゃなかつたら他の魔法で色々調べないといけませんが。色が黒に変わつたということは盗賊だと認められた、という認識でいいですよ」

「なるほど」

男はデツツのカードを水晶に突き刺すようにした。カードが触れている部分から黒い粒子が砂のように落ちていき、男の指が水晶に触れる時にはカードは無くなっていた。その粒子は水晶の中で渦を巻き、次第に数字を形成していく。

「この一件の報酬は50万ですね。あ、そうそう。盗賊が銀行口座にお金を預けていた場合、それを倒した人にその口座にあるお金を受け取る権利がありますが」

「へえ、盗賊が預けてたお金を、倒した俺がもらえるってか。つしても、期待は出来ないな」

「そうですね、盗賊のほとんどは銀行なんかに預けるより手元に置いてきますし……あ、ちょっとはありましたね。5万2000ドルです。取り敢えず受け取る、にしますよ」

了承の意を伝えると、事務員は龍斗のカードを水晶にかざした。

一瞬水晶が、その後にカードが光つて元の色に戻った。返却されたカードを見る龍斗。といつても元々持っている金額が金額、しかも様々な出費のために細かい額など覚えていない。龍斗は50万増えていることだけ確認すると、クローズ、と唱えてカードをしまった。

建物を出た龍斗は体を伸ばし、辺りを見回した。少し先の噴水の周りには取り囲むように木製のベンチが置かれている。龍斗がその1つに座ると、左右を埋めるように姉妹が座った。

「……あれ？」

「？ どうかしました、龍斗様？」

「いや、何か違和感が……ま、いいか……？」

ミーアの無邪気な顔に違和感を誤魔化された龍斗は空を見上げた。今日は雲が多く、太陽は出たり消えたりを繰り返している。雲に語りかけるように、静かに口を開いた。

「さて、これから課題は魔法の習得か。今まで無意識とはいえてたんだから、身につけようと思えば身につけられるよな。まあ、宿代くらいは……あー、防具も武器も金は要るか。まあ、それを補えるだけ稼ぐかね。無理に稼ぐ必要はないか。……まあ何にせよ、これから暫く魔法の事を学ぶ必要があるんだけど」

「あ、その差し出でがましいですけど……」

「私達でよければある程度のことはお教えできますが……」

「ああ、もちろん最初からそのつもりだ」

そう言つと龍斗は椅子から立ち上がり、振り向いたかと思うと立て膝を突いた。幸いにも今はお昼時、大通りから1本外れたこの噴水通りにはあまり人がいなかつた。1人2人を除けば驚いているのは姉妹のみ。

「つーわけで、これから宜しくお願ひしますよ、師匠」

「え、あ、いや、こ、こちらこそ……」

「よ、よろしくお願ひします！！」

時が止まつたかのよう静まり返る3人。だが次第にこの空気の可笑しさに耐えきれず、龍斗が笑いで体を震わせた。それにつられて姉妹も互いの顔を見て笑いあつた。

「さて、形式だからやつたけど茶番はもういや。休憩は終わりだ。
行くか」
『はい！』

この日以降、龍斗は定期的にクエストをこなし、必要経費を稼ぎながら、魔法習得に向けてマーティス姉妹からの指導を受けた。また姉妹の方も龍斗の戦闘技術を学びたいと言つてきたため実戦形式で稽古をつけた。急がば回れ、石橋を叩いて渡る、という龍斗の意向で、3人は特に大きな動きを見せることなく、徐々に力をつけていった。

そして、光陰矢の如し……気付けば2年の月日が経つていた。

第25話・清算（後書き）

はあ、やつといひまで来た……

後半少し懸念がありますがこれで、第一章とでもいいつべき部分が終わりました

次からはバトルとかもつと増やせるのではと考えています。

拙い作品です。不定期更新ですが、なんとかかんとか頑張つて書いてます。ご支援いただければ幸いです。

「せやつ！…」

「ハツ！…」

岩山をくりぬいたような何もない場所で2つの黒い影が激しく衝突を繰り返していた。気合の声と共に繰り出された回し蹴りを左腕で受け流すと、相手の空いた脇腹に拳を入れる。しかし直ぐに反応され右手で受け止められる。相手はこちらの腕を捻る、その勢いに逆らうことなく跳躍して体を捻り、相手のこめかみを踵かかとで狙う。それに気付いた相手は右手を離し後ろに跳んだ。回し蹴りを放つた方も着地し態勢を整えた。

「空中後回転蹴りとはやるねえ、龍斗」

「素直に脇腹に一発喰らつとけばいいのに、連」

場所は商業都市国家オーリジアの郊外にある岩山の麓。何の気兼ねもなく思いきり暴れることが出来る、という理由で連が案内した場所である。草の一本も生えていない地面。同じく草が生えていない赤土の壁はおよそ5mほどの高さがある。

連は龍斗を正面に捉え、構えを取った。龍斗も膝を曲げて中腰になり、すぐ反応して動けるようにする。

「よつしゃ、そろそろ本気行くぞ！… 覚悟しろよ！…」

「ほつ、面白い。見せてもらおつか…『即応の霧』」

「氣概空手！…」

気配を察した龍斗は直ぐに横跳びで避けた。直後、後方で爆破音が響く。龍斗が振り返ると、直径1m程の大きな岩がガラガラと音を立てて崩れていくところだった。

「『碎石衝』」

その延長線上で、右拳を正面突きにしたままヤ顔をした連が技の名を語った。が、龍斗は動じず、連との距離を縮めていく。2、3度避ける度に響く爆破音を背に、龍斗は連の懷に入り左拳で顔を

狙う。

だがそれは右腕で防がれ、それを皮切りに一進一退の攻防が始まつた。回し蹴りや拳が止められた途端に、肘鉄や掌底、膝蹴りなどが襲い掛かる。10合、20合、30合……連打が止み、距離が空いた。再び距離を詰めた龍斗はまた左拳で同じ場所を狙う。

「ふつ」

「残念」

右腕を立てて防ごうとした連だが、そこに当たる前に龍斗が止めた。そして龍斗は真の攻撃、右の拳を繰り出した。

「ぐつ」

「ぐおつ」

フェイントをかけ連の腹に一撃入れる。龍斗の目論見は成功した。だがその代償に龍斗も、腹に連の膝蹴りを食らつた。互いに飛び退き、距離を取る。肩で息をする2人の視線が交差した瞬間、また勢いづいて走り出した。が。

「はいそこまでー」

『終了』

『うぐつ』

龍斗と連は同時に呻き声を上げた。連は1人の女性に頭を叩かれたことで。龍斗は鳩尾みぞおちと肩の辺りを槍の長棒で打たれたことで。連を止めたのは霞、龍斗を止めたのはレイア、ミーアだった。

「全く2人は……ほんと呆れるわ」

「同感です。まさかルールを破つて戦い続けようとするとは思いませんでした」

「2人とも仰いましたよね。相手に一撃入れた時点での終わり。忍術、氣概空手は使わない。自分たちで決めたたつた2つのルールも守れないでどうするんですか」

「龍斗が『即応の霧』使うからだろ」

「その前にお前が『碎岩衝』使おうとしたろ」

『言い訳無用！！』

『……面白次第もございません』

ため息をつく靈。説教をするマーティス姉妹。この3人は龍斗、連に釈明の余地すら『えなかつた。龍斗と連は言い逃れ出来ないと観念して頭を下げた。その様子が可笑しなつた3人は互いに顔を見合わせて笑い合つた。反して男2人は苦い顔になる。

「まあでも面白いもの見せてもらつたし、可哀相だから許してあげるわ」

「何で上から……」

「あー、袋頂戴」

『はい』

「龍斗は良いよな。忠実な美少女2人侍らして……」

「阿呆、こいつらは妹だぞ。身内を女として見るほど甲斐性無じじやねえよ。大体こいつらだつて小言五月蠅いし、しつこいしつ……うおつと、『ご覧の通り手も早い』

「あら、何の事でしようか

「何の事だかさつぱりですわ」

笑顔を崩さぬ姉妹の手には得物である槍。その穂先は喉笛を正確に狙つていた。しかし狙われた本人は上体を僅かに反らしただけ。紙一重のところで攻撃をかわしていた。

「レイア、ミーア、悪かった。だから槍下ろせ。お前ら食い物を無駄にする気か」

「承知しました」

「お騒がせしました」

姉妹は槍を引き寄せると、片手を上に向けて広げた。暫くして、上から落ちてきた白い小さな紙袋がそれぞれの手の中に納まつた。中身はどちらも齧かじられた跡のある豚まんである。

龍斗達5人は先程の岩場を離れ、オーリジアの中心を貫いているサン・トルマ通りにいる。ちょうどお昼時ということもあり、屋台で

売られている食べ物を買い食いしていたのだ。

(こうして屋台が並んでいるのを見ると、やっぱ祭りに見えるよな。
ま、じれがこここの普通なんだと分かつちゃいるけどな)

そう思いながら茶色い紙袋の中から豚まんを取り出し口に運んだ。
因みに龍斗が食べる豚まんはこれで4つ目である。

「んで？ 龍斗君、いつまでここにいるつもり？」

霞が2つ目の豚まんを頬張りながら質問してきた。豚まん片手に歩きながら、思案顔になる龍斗。

「そうだな……あと2、3日つてとこか？ そろそろエルグレシア王国に行かないと間に合わんかもな」

「随分呑気ね。事が事だつていうのに」

「慎重派つて言つてくれるか。大体急いでるんなら2年も待たないしオリジアにも戻つてきてない。石橋叩いてるんだよ。俺が戻つてきたのは連の空手を習得するためだ」

龍斗達は2年間、修業期間と銘打つてとにかく力量のレベルアップを重視して活動していた。そして龍斗は、その最後の仕上げとして連の空手に白羽の矢を立てた。そうして冬のオリジアに来て、連に修行を頼んでみれば、何ということはない。連の空手も格段にレベルアップしていたのだ。それが昨年の12月27日の事。連の都合もあつて修行が始まったのは年が明けた後。龍斗、レイア、ミーアの3人はそれから2ヶ月間、空手の習得に精を出した。その修行の成果は先程の手合せの通り、徒手空拳のみで連と互角に戦えるほどに成長した。もつともそれは龍斗の話。姉妹の方は筋力強化を以て2体1で戦つてやつと、といったところである。しかしそれでも一般人より力がついたことは間違いない。たしか嗜み程度で鍛えてきたか、本格的に鍛えてきたか、という環境の違いであるため、比較するだけ野暮と言える。

「さて、腹ごしらえも済んだことだし」

龍斗は紙袋を近くのゴミ箱に投げ捨て、レイア、ミーアを隠すよう前に出た。その隣には連が、指を鳴らしながら肩を並べた。 2

人の視線の先にいるのはナイフを構えた男、一瞥しただけだがざつと30人はいる。

「こりや また結構な人数だねえ」

「感心している場合ではありませんよ龍斗様」

「完全包囲されました」

レイア、ミーア、霞は2人に背を向けた。いつの間にか5人はナイフや槍、剣など様々な武器を持つた気性の粗そうな男に取り囲まれていた。その内の1人、龍斗と連の目の前にいる男が口を開く。「よう、坊主共。大人しくしててもらおうか。あんまり傷つけると金にならんからな、傷は付けたくないんだよ……特に娘3人は」

360度全体から下卑た笑いが聞こえてくる。その視線は女性の胸や下半身に集中していた。3人は同時に嫌悪感を顔に出した。

「観念するんだな、どの道この70人の包囲網からは逃げられねえ」

「だつてよ龍斗。10人ずつ、俺とお前で20ずつ。どう?」

「ふむ、なら無制限だろ。レイア、ミーア、折角だから槍無しで何処まで行けるかやってみるか」

『分かりました』

「あたしも基本自分の身は自分で守るから」

「さあ、大人しく縄にかかり！」

『お断りつ！』

5人は一斉に動き出した。

龍斗は正面で槍を構える男に掌底を叩き込んだ。正確に額を打ち抜かれた男は脳を揺らされて気絶した。すぐに龍斗は後ろに跳んだ。襲い掛かる武器の全てを手で払いながら、合間を見て腹に拳を叩き込んでいく。直ぐに相手が動けなくなるわけではない。だが確実にダメージを与えていく攻撃。龍斗は最初から持久戦になると読み、体力を温存しながら徐々に戦力を奪う作戦を実行していた。

だが連は違つた。

「気概空手、『碎石衝』！！」

「何つ」

龍斗は跳躍した。次の瞬間、龍斗が視認できる人間は吹き飛ばされ、着地点周辺には誰もいなくなつた。連は攻撃を受け流しながら大声を出した。

「余計なこと考えるな！！ 思つてるほど時間無いぞ！！」

龍斗は気付いた。大上段から振り下ろされる剣を避けると、回り込んで足を掴んだ。線の細いその男を放り投げ、数mのスペースを作つた。

「考えたら欲のために動いて命賭けない連中だつたな。なら一気にやつてやる……全員跳べ！！」

龍斗の声を聞いて少年少女4人は跳躍した。身長とほぼ同じ長さの棒を持つた盗賊の仲間がまずいと言つたが時既に遅し。

「気概空手、『陸鳴衝』！！」

龍斗が地面に拳を叩き込んだ。その拳を中心に衝撃波が大地に伝わり、地震が起きたかのように辺りが揺れた。足場が揺れて不安定になり、盗賊は次々とバランスを崩していく。

『そらつ、『碎石衝』！！』

龍斗と連の同時攻撃で、盗賊の半数ほどが挟み撃ちに遭つた。何の前触れもなく吹き飛ばされた状態で迫りくる仲間を避けるなど出

来るはずもなく、盗賊たちはそれぞれの武器や体をぶつけ合つ。加えて岩をも碎く威力の衝撃波、この攻撃を受けて氣絶していない者はいなかつた。

2人は女性3人を振り返つた。攻撃をかわし、顎や腹に掌底を食らわせている様子を見て安心した。しかしそれぞの背後に回る影に気付き、急いで距離を詰めて足払いする。

「有難うござります」

「礼はいい。だいぶ減つたし一気に決めるか……『衝拳』」

既に及び腰であるにも構わず、5人は盗賊の頭、腹、膝裏などに攻撃を叩き込む。それら全ての攻撃が当たる度に衝撃を放つていてるため、見た目以上にダメージを与える攻撃である。

ミーアが腹に蹴りを入れ、その相手が崩れ落ちるのを確認すると、龍斗は足元に転がつていた盗賊、最初に声をかけてきた男に視線を向けた。

「で？ 70人が……なんだっけ。まあ、どうでもいいか」

龍斗は紫に変わつた目で辺りを見回した。目に映る盗賊は全て地面に伏していた。

氣概空手。それは一見普通の空手と同じであり、特別動きが変わるものでもない。しかし決定的に違うものが一つだけある。それは「氣」である。攻撃に氣を乗せることにより、通常よりも遙かに威力の高い攻撃を繰り出せるという『衝拳』。1ヶ所に集めた氣を大地に放出、その時生み出される衝撃波で地震のような振動を起こす『陸鳴衝』。そして、集めた氣を一定方向に飛ばし、岩を碎く程の衝撃波を放つ『岩碎衝』。

すなわち氣概空手とは、氣を操り、衝撃波を操ることに真髓がある拳法なのである。元々は忍術などと同じように荒唐無稽な伝説として伝わっていたこれらの技。それを会得し、「氣概空手」という名で大成したのは他でもない、烏丸連その人である。

そしてここにおける「気」と呼ばれる力の正体。それは大陸の人間が言うところの「魔力」であった。だがその魔力の使い方が通常と違つて特殊だった。ただそれだけの話であった。

因みに連は気を習得するために毎日あの岩場に足を運び、1日1万回、岩に向かつて正拳突きをしていたといつ。

その連は今、盗賊達の後始末を駆け付けた警備隊の者に頼んでいるところである。警備隊はオリジアの中を警邏けいらし盗賊などを排除する、他の国で言うところの警察に当たる組織である。オリジアは商業都市国家、大陸全土の経済の拠点である。同時に大陸全土の金の拠点でもある。故にオリジアは盗賊の襲撃を受けやすい。建国当初は、周辺の小国が出兵してくることもあつたという。それらに対抗するためにオリジアは都市全体で人を雇い、独自の戦力を持つことにしたのだ。

「おお、流石だな連。仕事振りが板についてる」

「これでも4年目だからね。俺も運搬手伝いたいけど、流石に疲れてるしなあ」

連は大陸に流れ着いて以降、この警備隊の一員として働いていた。隊員の中でも珍しい徒手空拳の使い手ということで、正装で警邏する隊員では見つけられない犯罪を取り締まる覆面隊員としてそれなりに活躍しているらしい。

隊員への話が終わると連は龍斗達の間を通り過ぎるように歩いていった。4人もそれについていく。先程疲れたと言つていた連に龍斗が声をかける。

「何なら回復魔法で戻してやるつか

「あ、それ助かる。なにせ今夜はお楽しみ……ウフフ

「……夜伽のために回復させるわけじゃないんだが」

「えーいいじゃーん。ご祝儀代わりにさー」

実は龍斗がオリジアを出た後、いつの間にか連と霞は結婚してい

た。龍斗がそのことを知ったのは年が明ける前、修行の為にオリジアに戻ってきた時である。因みにご祝儀は「既にもらつてゐるから」と言つて2人から断つていた。

「か、霞さん、それは……ねえ、姉さん

「そ、そうですよ。それと龍斗様、何故そんなにはつきりと言葉に

」

「別にいいじゃん、発言は自由よ。それよりもお2人さん……どうなの、龍斗君の下の槍は」

「阿呆

「きやつ、いつたー！！」

赤くなつたマーテイス姉妹の顔がさらに赤くなるのと同時に龍斗が霞の頭を叩いた。相当な威力だつたらしく、霞の目には涙が滲んでいた。

「もう、何？ まさかまだ手つけてないの？ こんな美人姉妹を手籠めに出来るなんて滅多にないことでしょうに」

「身内に手を出すほど甲斐性無しじゃねえつつたよな？ そんなに殴られたいか、よし、なら衝撃付きであと107回殴つてやろう」「申し訳ございませんでした」

普段男勝りな性格の霞が素直に頭を下げた。有言実行、やると決めたらどんなことでもやり通す龍斗の性格を知つてゐるが故に、大人しく謝つておいた方が良いと判断したのだ。

「まあこの辺で許してやるか。おお、ちょうど旅亭まで来たか。じゃあな、お2人さん

「ああ、じゃあな

「じゃあねー3人共

『お疲れ様でした』

龍斗達3人は旅亭の屋内に消えていった。連、霞夫妻も2人揃つて通りの人ごみの中へと入つていった。

エルグレシア王国は大陸内で最も広い面積を持つバース平野、その3分の2を国土として保有しており、大陸最大の面積を誇る大国として名を知られている国である。元々は平野の北部にある、現在のオーデリアと大差ない程度の小国だったが、建国当時から軍事力の強化に努め、周辺国への侵攻を繰り返し相手国を支配下に取り込むことで成長してきた軍事国家としても知られている。

軍事国家が軍事国家たる所以は、当然ながら国が持つ軍の強さにある。軍を構成するのは兵士である。その兵士は普通、幼少の頃から様々な訓練や徹底した教育を受けて兵士となる。しかしこの方法では即戦力は手に入らない。適性というのもあるため兵士が戦力となるまでに相応の時間がかかるからである。傭兵を雇うという手段もある。しかしこれには相当なお金が必要となる上にリスクも多い。雇われの兵には国のために命を捨てる覚悟などありはしない。少しでも身の危険を感じたら我が身可愛さに逃走する者ばかりだらだ。

そこで3代目エルグレシア王トルドカーズが考案したのが国王主催の武闘大会。世界中の猛者共を集め戦い合わせ、実力を確かめた上で軍に登用するという方法である。集まつてくるのは腕に覚えのある者、更にその中で真の強者を選び出すことが出来る画期的な方法なのだ。ここで一定の実力を認められた者が軍属を希望した場合、徹底した教育を受けなければならないものの即戦力として兵士になることが出来る。そのシステムは非常に大きな効果を表したため何度も行われたという。それは今でも年に1回、春に行われており、エルグレシア王国の伝統行事として定着している。

「やつと着いたか、セトラベルク」

渡し船から下りた龍斗は、その視界の中にある今までに見たことの無い尖塔の集合体を確認しながらそう呟いた。

バース平野には2つの大河が存在する。1つは隣国との国境となつているセルゾア河。もう1つは、今しがた龍斗が渡ってきたオライン河である。どちらもランドレイク大陸の中央にある大きな淡水湖から、平野を貫いて海へと通じているのだが、セルゾア河が元から存在する天然の大河なのに対し、オライン河はエルグレシア王国によつて作られた運河であるという点において違いがある。何百年、何百億ドルクをかけて作られた運河は農業の発展に大きく影響したという。オライン河が完成したことによつて3つに分断されたバース平野。王国内では、オライン河以東の地域をレフトベルク、2つの河に挟まれた地をセトラベルク、セルゾア河以西をライトベルクと呼んでいる。なおライトベルク地方は10年前のクーデタ以降自治政権を擁立しており、現在も対立が続いている。

オリジナルでの盗賊騒ぎから1週間後、龍斗と姉妹はエルグレシア王国に到着した。そして修行期間の間は渡ることの無かつたオライン河を渡り、セトラベルクに向かつていた。

「どうでもいいことだが、左と右って逆じゃないか？」

地図を広げて疑問を口にする龍斗。その一歩後ろから疑問に答える声があつた。

「それは王都、正確に言えば王宮から見た様子で決定された名称だからです」

「なるほどな。京の左京、右京と同じか」

レイアの返答を聞いて納得する龍斗。レイアは聞き慣れぬ言葉に首を傾げたが、すぐに疑問を捨て去つた。龍斗もただ気にするなど言つただけで済ませた。説明したところで龍斗の生まれ故郷である大和のことなど彼女に分かるはずもない。

「で？ ミーアの方は大丈夫か？」

心配する龍斗に向けてミーアが顔を上げた。その顔には血色が無い。

い。

「え、ええ、大丈夫です。姉さんに回復魔法かけて頂いたので……」
ミーアは船酔いしていた。船に乗っている時間は30分ほどだが
いうが、陸を離れてものの数分でこうなってしまったのだ。
(仕方ないよな。船だしな)

レイア、ミーアにとって船は悪い思い出の乗り物である。船に乗
つているところを海賊に襲われ、奴隸に身を落としたのだから。精
神的なダメージはそう簡単に消えることはない。恐らくはそれも一
因にあると龍斗は踏んでいる。因みに龍斗も一人舟に乗つて嵐に遭
い大陸に漂流、と悪い思い出があるのだが、自分の事は棚に上げて
いた。

「まあ、少し休ませた方がいいか。いよつと

「え、りゅ、龍斗様！？」

突然龍斗に担がれたミーアは驚きの声を上げた。極力揺れを抑え
て木陰まで運び、静かに下ろして座らせる。

「暫くミーアは休んでろ。なんか飲むもん持つてくるから」

「え、あ、そんな……」

「レイア、様子見といてくれよ

「承知しました。行つてらっしゃいませ龍斗様」

分かつてゐる、とでも言つように片手を挙げ、龍斗は2人に背を向
けた。

「ああ……行つちやつた……」

そんなことして頂かなくても大丈夫です。そう言おうとしたミー
アだったが龍斗の声に阻まれて言つ事は出来なかつた。気付けば姉
と一緒に取り残されている。

「まあ、あの人はそういう人だから。貴女だつてもう十二分に分か
りきつてることでしょ」

レイアが微笑みながらそう言つた。我が姉ながらかなり魅力的だ
と思つミーア。

「分かつてゐるわよ。でも、さ……私達の人に何かしてもらつばかりじゃない。いくらあの人人が言つても、私達はその、ど「あり、何か不満？ 人を人と見ない酷い物扱いの方がいいの？」

「そ、そんなこと言つてない！！」

「ミーア。私達は『従者』、自分の意思でついてくつて決めたんでしょう。だつたら素直に従いなさい。従つ命令が無いならあの人人が望むように振る舞えばいいの。それが従者つてものよ」

諭すようなレイアの言葉に釈然としないままミーアが頷く。

「……うん……分かつてゐるけど……」

「ん、どうした？」

「え、あ、龍斗様」

「お帰りなさいませ」

突然降つてきた影に驚いたミーア。いつの間にか龍斗が戻つてきていたのだ。手に持つていた紙コップの1つを差し出してきた。

「あ、有難うござります」

「はいレイア」

「有難うございます」

姉妹は紙コップを受け取り、ゆっくりと飲み始めた。中身はミーアが好きな林檎のジュースだつた。それを飲み終える頃には大分落ち着き、嘔吐感も無くなつた。ふう、と一息ついたミーア。

「すみません、もう大丈夫です。ご迷惑おかけしました」

「困つたときはお互い様。んじゃあ行きますか、今日の宿に

『ちょっと待つて下さい』

歩き出そうとした龍斗を姉妹が止めた。振り返つて姉妹を見る龍斗。

「……なんだよ2人して」

「龍斗様、ご自身が飲んだ分の紙コップをお忘れですよ」

「まさかポイ捨てするつもりですか」

「あー……任せた」

そう言つて龍斗は町の方へと走り出した。

「あ、逃げた！！」

「お待ち下さい！！」

レイア、ミーアが後を追つた。2人は怒つていながらもどこか喜色が浮かんでいるように見えた。だが、後ろを振り向かず、また即応の霧も発動させていない今の龍斗にそのことを知る術は無かつた。

第28話・セトラベルク（後書き）

不定期と言いながら連日投稿のような状態。

突然ですが週1くらいのペースに切り替えたいと思います。大した理由はありませんが、「急いては事をし損じる」「急がば廻れ」ということことでよろしくお願いします。

今週はこれで、29話からは土日の間に更新する……つもりです。

第29話・舞台、プロセセオ（前書き）

取り敢えずすいません。rzn

週1にするとか言いながらいきなり破棄します
理由は……書いたのにHPせず手元に置いとくつてのが出来なくて
ですね

やっぱ書き終えたら上げるのが一番いいです、はい
とゆーわけで不定期で上げます。更に個人的にめでたい日なので
2話同時更新です

第29話・舞台、クロッセオ

「オリジアも大概だと思つてたが……」りや 柄違いだな

「当然です。ここは王都ですから。王都といつのは国を統べる王の御膝元、その国の中です。当然他国から最も注目される場所ですね。国の中である王都の様子が、その国の現状を反映していると看做されますので。王都が繁栄しているということは、王が有能な証である、と言つ者もいます」

「もつとも、王が見栄を張るためにあの手この手で繁栄させている所もありますが」

「なるほど、よく分かつた」

セトラベルクの北側にある王都セトレア。地図で見る限りその面積はオリジアよりも幾分か小さい。だが龍斗は、関所を通る前からここがただの街ではないということを感じさせられた。

まず王都を囲む城壁の高さ。オリジアの場合は森の木が要害となることもあってそれほど高くする必要は無かった。18歳になり、身の丈六尺、即ち身長180?に成長した龍斗が軽くジャンプすれば天辺に手が届く、その程度の高さだった。

だがセトレアの城壁はそんなものではなかった。軽い目算でも龍斗の身長の2倍はある。さらにその下には、白く輝く鎧を身に纏つた兵士が5人。彼ら顔はどれも引き締まっており、真面目に仕事をこなす性格であることが窺える。暇そうな顔をしてやつつけ仕事をしているような他の街の門番とは明らかに違う。

（徹底した教育、か。なるほど、確かにレベルは高そうだ）

龍斗達は関所を通り、通行税を支払った。対応した兵士の1人が龍斗に尋ねた。

「冒険者か。この時期に来るつてことは、春闘田当てか？」

春に行われる伝統行事、国王主催の武闘大会。その通称が春闘である。

「ええ、まあ」

「そうか、なら頑張れよ。共に働くことを期待するよ」

「有難うございます」

（目を見る限りあれは素だな。なかなか人当たりのいい兵士だ。いや、だからこそ門番やつてんのかね）

そんなことを考えながら、龍斗は華やかな王都の中へ足を踏み出した。

歴史を感じさせる古い石の壁。セトリアを囲う城壁よりも高い赤い壁がセトリアの一部を切り取っている。この建物こそ春闘の舞台となる場所、闘技場「ロジヤオ」である。その壁には入り口となる穴が20。龍斗はそのうちの1つから屋内へと入つていった。

（力を示し、勝ち残れば王国騎士への道が約束される。安定した収入、衣食住の心配なし。国に縛られるという欠点はあるが、普通に生きていく分には好条件。だから不安定な生活から抜け出すために冒険者の参加が何時も多い、か。まあ、俺もその1人だな）

ホテルの中を歩きながら、龍斗は巷「ちまた」で聞いた春闘についての情報を整理した。『即応の霧』を発動させていないにもかかわらずかなり多くの視線を感じ取る。そのほとんどは、彼の後ろに控えるマーティス姉妹に向けられていた。その後龍斗に軽く敵意を滲ませたような視線が向けられる。当然ながら、その視線の主の9割は男である。それらを全て受け流し、龍斗は受付係の前まで行つた。姉妹と出会つてから2年間、人がある程度いる場所ならどこに行つても大抵同じ状態になるため、そういう視線にはとっくに慣れてしまつている。

「すいません、春闘の受付はここですか？」

「ええ、そうですよ。参加者ですか？」

「そうです」

受付にいたのは黒縁の眼鏡を掛けた金髪の若い男性だった。人当

たりの良いように笑顔を作ったその人は、自分の前に置いてある水晶を手で示す。

「では参加登録をしますので、カードの「」提示をお願いします」

龍斗はカードを出現させ、相手に渡した。男性はそれを水晶にかざした。ある一点から光が現れ、空中に文字を刻んでいく。

「東龍斗さん、18歳。職業は冒険者。はい、確かに確認しましたよ、と。では登録完了です」

そう言って返されたカードを見て、龍斗はあることに気が付いた。

「ん? 」このマークは何ですか?」

龍斗が指差したのはカードの右下。そこには今まで存在しなかつた謎のマークがついていた。2振りの剣を交差させた中に、黄金に輝く獅子の顔。

それを見た受付係が即答で答えた。

「ああ、それは今回の春闘に参加しますっていう証明のマークですね。あ、そうそう、店によつては参加者だけに特別サービス、なんてところもありますよ」

「なるほど、ありがとうございました」

礼を言つてホールを突つ切りロッセオの出口へと向かう。参加希望の一団を避け損ない、そのうちの一人の足を踏んでしまった。

「おつと、」めんよ」

謝罪をして出口に向かおうとしたその時だった。

「待て貴様ら……」

「待て貴様ら……」

そんな叫び声がホールに響いた。辺りを見回してみた龍斗。他にホールを出ようとした者がいなかつたことから、その声は自分達に向けられたものだと判断した。だが龍斗が止まつたのは一瞬のみ。用はもうないと再び外に出ようとした。

「待てと言つてるだろうが……！」

龍斗は再び足を止めた。一瞬遅れてその喉元に剣が突き付けられる。剣の持ち主が横から声をかけてきた。

「貴様、この俺様の前を無断で通り過ぎたばかりでなく、俺様の足を踏んづけて行きやがつたな？」

後ろに控える姉妹が息を飲むも、龍斗は無表情のまま藍色の目を声の主に向けた。青い目に金髪という大陸ではよく見かける特徴に浅黒い肌。その男は眉間に深いしわを寄せ、こぢらに怒りを表していた。

（何だ、こいつは？）

顔を見た瞬間に龍斗は『即応の霧』を発動させた。これは2年間の修行で得た成果の一つである。即ち、レイア、ミーアが使う強化魔法と同じように身体能力強化系の忍術を呪文無詠唱で発動出来るようになつたのだ。そしてもう一つの成果。それは魔力使用時に起つてもこれは非常に簡単なことだつた。『即応の霧』は大陸の魔法で言えば『感覚強化』^{センス・ポイント}に当たる。人間が持つ感覚は視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚の5つ。感覚強化はこれら全てを魔力によつて強化する。当たり前の話だが余計な感覚を強化するのは魔力の無駄である。そのことに目をつけた龍斗は、特定の感覚に絞つて強化する方法は無いものかと2年間探し続けた。

そして見つけた。それは非常に簡単なことだつた。即ち、その感

覚を司る感覚器官に魔力を通さなければ良いのだ。味覚を強化しないのならば舌に魔力を通さなければ良い。同じように、視覚強化が必要ないならば目に魔力を通さなければ良い。そして目に魔力を通さなかつた場合、藍色の目が紫に変わるといつ現象は起らなくなつた。このことはレイア、ミーア姉妹によつて確認済みである。なお、これは感覚強化魔法だけの特性で、その他の魔法を使用する時は変色を抑えることが出来なかつた。

「おい、まずいぞあれ……」

「ありや死ぬぞ」

「ヴァンサーードだ……」

「オルドラン家の三男坊……」

「また奴か……」

聴覚と触覚に絞つた『即応の霧』により、周囲の小声を拾つた龍斗。ほんの少し盗み聞きしただけだが、龍斗が判断するには十分な情報があつた。

（家、ということはよう分からんがどつかお偉いさんの七光りか。しかもまたつて普段からやばい奴なんだな）

判断したところで態度を変えるわけでもなく、龍斗は普段通りに口を開いた。

「ちゃんと謝つたんだからそれでいいだろ。分かつたらそれ下ろしてくれ、物騒な」

龍斗としては当たり前のことと言つたつもりだつた。だが相手は刃物を下ろすどころかより一層しわを深く刻み、怒りで肩を震わせた。頭に血が上り、顔が真っ赤に染まつた。

「貴様……！ 誰に向かつて口をきいてある……！ 平民風情が楯突きおつて、田にもの見せてくれるわ……！」

『龍斗様……』

今まさに龍斗の首を切り落とさんとしていた腕が止まつた。男の

視線が龍斗の首からその後ろに向けられる。龍斗の目は見逃さなかつた。男の目が、欲にまみれた卑劣な光を放つところを。駄目押しで下卑た笑みを浮かべながら、龍斗の方に向き直る男。この時点である程度の予想はついていた龍斗。果たしてそれは現実のものとなつた。

「おい、この2人は貴様のものか？ そうだ、この2人を俺に寄越せ。そうすれば貴様の命は助けてやらんでもないぞ？」

（……だと思ったよこのど阿呆が）

呆れても言えない龍斗に、下卑た顔を崩さぬまま男が畳み掛ける。

「どうした、返答は！？ ……ああ、俺様怖さに声も出せんか。ククク、そうだ、畏れ多くも貴族の名門、オルドラン家のヴァンサー様がわざわざ平民に声をかけてやつたんだからな。平民はそれに感謝し出すものに出せばよいのだ！？」

そう言つて男は空いている手をレイアの方に伸ばした。その瞬間、龍斗は突きつけられていた剣を跳ね上げ腕を掴んだ。右手で相手の首を捉え、右足で相手の右足を払いバランスを崩し、そのまま腕を前に出して男を地面に倒す。大和に伝わる古流武術、柔道の技の1つ『大外刈り』である。

己が身に起こつたことを理解できず、呆けた顔をしている男に、龍斗は顔を近付けた。そこには何の表情も、感情もない。

「何処の誰かは知らんがな、理不尽な理由でうちの妹に手出させやしねえぞこのど阿呆が」

辺り一帯が完全な沈黙に支配される中、龍斗達3人はコロッセオを後にした。暫くして支配が解け、誰かの叫び声が3つ先の通りまで響いてきたが、龍斗がそれに気をやることは無かつた。

「……よろしかつたのでしょうか」

「ん、何が？」

「ロッセオから3区間離れたオープンテラスのカフェで休憩していると、ミーアが不安そうに呟いた。龍斗はクッキーを食べながらのんびりしているが、姉妹は些か気まずそうにしている。

「詳細は覚えていませんが……エルグレシア王国のオルドラン家といえば、かなり有名な貴族の家だつたと思います」

レイアの説明に龍斗は一瞬眉を顰めた。

「貴族？ そいつあどういう身分だ？」

「えつ……あ、はい、貴族というのは、例えば建国の際に活躍した戦士だつたり、亡国の危機を救つた英雄だつたり、そういうた者に国王が与える身分です」

「……て、さつきのあいつが英雄か？ どう見ても蛮勇だろ」

「貴族という身分は個人に与えられるものではありません。そうですね、血統そのものに与えられると考えて頂ければ分かりやすいけど。つまりあの方の祖先がそういう方だつたということです。世襲制なので、国王が剥奪を明言しない限り代々その名を残すことになります」

龍斗はグラスを傾け、中身を全て飲み干した。口元に手を当てる。

「因みに特権とは？」

「主なものとしては国土の一部を統治する権限、つまり領主権ですね。一定の租税を国王に支払う義務が発生しますが、それ以外は基本的に自由です。また一定の軍を率いる権利が与えられますね」

「……確実に腐るなその体制」

溜息をつきながら背もたれに体重を預ける。

「まあ、誰が相手だらうが関係ない。正々堂々戦つて勝ち残ればいいだけだ。何位まで上がればいいか知らないけど」

「やはり王国騎士団に入るおつもりですか」

「そりやそうだな。冒険者なんて不安定な職で家族3人がやつていけるとは到底思えない。かといって商人や鍛冶屋に転職するのは無理だしな。騎士団に入るのが一番いいだろう」

「いや、その、私達の事もお考えなのでしたら、何もそこまでそこ

までして頂かなくても……」

「そ、そうですよー！　自分の分は自分で稼ぎますから……」
「大和なら2つ返事で雇ってくれるとこもあるかもしけんが、ここ
はそういう訳に行かんだろ。安定した収入の方が何かと都合がいい
しな。さつてと、どつか近くに宿は無いかな」

『あつ、お待ちくださいー！』

龍斗達は席を立ち、宿を探して通りに消えていった。

「それでは大変お待たせ致しました！！ これより、第203回 ルグレシア王国国王主催セトラベルク春季武闘大会を開催いたします！！」

壇上に上がった男の声に、コロッセオ全体から大歓声が沸き上がった。その拍手と声量の大きさに龍斗は顔をしかめた。

まず1回。1拍置いて3連続、男の手の動きに合わせ、全員が同じタイミングで手を叩いた。それと同時に会場に響く声も治まった。

「なんなんだこの茶番は……」

「……そう仰らずに」

思わず口に出た龍斗の呟きに、苦笑しながらレイアが言った。

龍斗がいるのは闘技場コロッセオの中の観客席に最も近い場所。参加者は全員、戦いの場となるグラウンドの中にいる。一方参加しないマーク・テイス姉妹は壁を隔ててすぐ後ろ、観客席の最前列に座っていた。3人は観客や他の参加者たちの熱気に馴染めず辟易としてていたが、続く注意説明に気を引き締めた。

音量を上げる魔法を付与した道具を使用しているので、男の声はコロッセオ中に響く。

「それでは毎年恒例の口上ですが、ルール説明をいたします！！ルール説明をいたします！！ 大事なことなので2回言いましたよ！！ まず戦闘方法ですが、これは総合戦闘、即ち自由です！！ 剣でもハンマーでも拳でも魔法でも、とにかく自由です！！ 得意な攻撃で自由に戦つてください！！ なお武闘大会中、このコロッセオには王国魔術師団の方々による特殊結界が張られています。これによりコロッセオ内の戦闘は管理戦闘、即ち致命傷を負つても死ぬことの無い、一定の安全が確保された戦闘です！！ 各々の力を存分に發揮して下さい！！」

龍斗以外の参加者から歓声が上がった。

（やかましい……ああ、イライラする！－）

龍斗は内に怒りを秘め、ただ眉を顰めるに留まつた。

「それでは只今から春闘第1ブロック1回戦を行います！－」

宣言と共に歓声が上がり、グラウンドでは剣を交える音、爆発音などが響き始めた。

「さて、この対戦形式でどうなるのか見物だな」

のんびりとした口調で言つた龍斗。彼が今いるのはマーティス姉妹のすぐ後ろにある観客席。抽選の結果第3ブロックにふられたため暫くは時間がある。特にすることもないので対戦が始まるまで他の対戦を見ておこうと思ったのだ。

第1回戦はバトルロワイヤル。参加者50人が自由に戦い、最後に残つた1人のみが次に進むことが出来る。この方法でベスト32を決定し、後は1対1によるトーナメント戦となる。総勢1600人の中からただ1人の頂点を目指す戦い。それがこの春闘なのである。ベスト16以上に残つた者にはそれぞれの順位に合わせて一定の賞金、更に王国騎士団員としての勲章を与えられる。誰もがその栄光を手に入れるため、結界のお陰で相手を殺すことが無いというのもあって全力で戦つている。

「ふむ……本当に何もかもばらばらだな。魔術師も戦士もこっちやか。剣は言わずもがな、鉄槌、槍、あれは徒手空拳か？ 魔法も詠唱系が目立つが、強化系使つてるのもいるな。誰を相手に戦つても勝ち残れるような実力者、それを見極めようつてか」

「そう言つ事ですかね……龍斗様、これではあの戦法は無理なのでは？」

ミーアが振り返り、龍斗にそう尋ねた。いつものよつと飄々とした態度で龍斗が言つ。

「いや、予定通りあの戦法で行く。前衛陣は力とスピード頼り。魔法は威力大だがそれに比例して溜め、詠唱時間が長くなる。飛び道

具は……基本狙いを定める必要があるからなあ。やっぱ隙が出来るな。懷に入られたら終わりつて奴がほとんどみたいだし。今回の50人だと誰かな……あ、あのでかい剣持つての奴が残るかな」

「典型的な一般論ですね。それで言えば龍斗様は魔法が使って接近戦も出来る。臨機応変に対応できるのでは?」

「それはそうなんだがな、レイア。俺は忍、真正面から戦うなんてのは本当は専門外なんだよ。だから姑息な手段を使うが……それだと実力は分からぬい」

「それで力を絞る、と?」

「ああ。接近戦は元から修行と経験があるからいいが、魔法はこっちに来てから得た力で経験に乏しい。経験を積むにもいい機会だろう」

「しかし、『自分で仰つた詠唱の隙が残りますよ』

「強化系の術で防御、回避する方法もあるし、いざという時は接近戦も辞さない。忘れてないさ、要是勝てば良い。終わり良ければ全て良しだ」

と、その時、戦闘終了の合図となる銅鑼の音がコロッセオに響いた。

「試合終了!! 第1ブロックを制したのは大剣を振るうこの男!!

! マルス・ディンバートンだ!!」

グラウンドに立つ1人の男に向けて会場中が歓声を浴びせた。その人物は龍斗が勝ち残ると予想していた人物だつた。

「なるほど、あいつか……んじゃ、そろそろ準備しどくかね。次の次だし」

「お気を付けて」

「ご武運を」

姉妹の声援を受け、龍斗は観客席を後にした。

第32話・大和の力

「それでは第3ブロックの対戦に入りたいと思います！！ 暫く準備の時間を取りますので好きな立ち位置を選んでください！！ 目立ちたがりは真ん中にどうぞ！！ 何をやっても何処からでも丸見えですからねえ！！」

観客席から爆笑の声が響いた。大和の着物姿で参戦する龍斗は腕を組んだ状態で壁伝いに移動し、自分の立ち位置を決めた。そこは観客が最も少ない位置。

（一応指向性は持たせるんだが……かなりの人を巻き込みやすいからな、念のため）

龍斗は目を閉じ、丹田から魔力を引き出した。外に漏れださないよう注意しながら、最初の攻撃のために静かにその時を待つ。そしてその時が訪れた。

「それでは第3ブロック、始め！！」

開始の号令と共に銅鑼が鳴った。雄叫びを上げ、己の出世に邪魔な周りの者を淘汰せんと一斉に動き出す戦士達。それは龍斗も例外ではなかつた。

銅鑼の音が聞こえた瞬間、龍斗は目を見開いた。刹那、龍斗の体から膨大な魔力が放出された。まるで津波のようなその力に飲み込まれたほとんどの者は、一瞬体を硬直させて地に倒れ伏した。魔力の波が引いた後、グラウンド内で立つていられたのは龍斗を含め約20人ほどだつた。

大和に伝わる伝説の1つによると、真の強者はその威圧感のみで相手を倒すことが出来るという。その幻の力の名は『霸氣』。龍斗は魔力を使うことでこれを再現したのだ。

今回龍斗は体内に宿る魔力を爆発的に放出した。ただそれだけの

ことである。しかし魔力というのは文字通り「力」である。魔法発動のために消費されるだけのものという固定観念があるが、体力や筋力などと同じ、れっきとした力なのである。そして魔力というのは普通、体から自然に放出されていくので、人によっては敏感に感じ取ることが出来る。それが一般的に「オーラ」「プレッシャー」「威圧感」と呼ばれるものとなる。即ち、ただ放出されただけの純粹で膨大な魔力は、そのまま圧倒的な威圧感として相手に伝わるのである。しかもこの力は魔力を引き出し放送出するだけで、消費したりはしない。体内に魔力を戻せばその分はまた魔法を発動させるのに使える。数頼みの相手には非常に有効な手段である。

（忍術を筆頭に大和で得た奇術の知識、大陸に来てから得た魔法、魔力という概念に、連から教わった氣概空手の氣概。この3つを学んだからこそ出来る技だな。さて、残ったのは……）

開始早々多数の戦士が倒れるという前代未聞の事態に、誰もがただ呆然としていた。霸気を受けてなお立っている戦士達には、ピリピリとした痺れのような感覚が残っていた。

その沈黙を破る者が現れた。龍斗の左手から砂煙を上げ猪突猛進の勢いで走つてくる。一瞬跳躍して避けようとしたが、構えに気付いて相手と向かい合つた。軽く足を曲げ、胸の前で拳を合わせる。

「忠節尽くし只主ただぬしの勝利が為我が身を盾と為す」

「隴西ろうせい一刀流、霧払い！」

一際大きな金属音が響いた。いつの間にか皆正氣を取り戻して戦いを再開しており、その音に注意を向けるものは誰もいない。音を響かせた本人達を除いては、

「……生身で受け止めた、だと？」

「何人も傷つけること、能わず。『忠勝鎧身』」

下から掬い上げるように放たれた斬撃は龍斗の脇腹をしつかりと捉えていた。しかししかしその刃が血に濡れることは無かつた。相

手の手にあるのは、まるで鋼鉄の鎧を叩いたかのような感触。双方ともに後ろに下がり距離を取つた。改めて互いの姿を確認する。

「お主、何者じや。よもや刀を生身で受けようとは。それにその格好……拙者、隴西一刀流を心得し坂本紀兆さかもとれいじょうと申す者。お主、さては同胞か！！」

坂本と名乗つた男は龍斗と同じ大和の着物を着ていた。頭に笠を被り、右手には、龍斗が背負つているのと同じような刀を持つている。『大和』の礼儀として、龍斗も名乗りを返す。

「これはこれはお侍殿、名乗りを賜つたこと痛み入る。我が名は東龍斗。確かに大和にて生まれ育つた者。して坂本殿、貴方はいつこの大陸に来られたのですか？」

「約2週間前、といったところか。海に出た途端大きな野分に流されてしまつてな。気付けば右も左も分からぬ異国之地よ」

龍斗は頷いた。時期は違えど、龍斗も同じようにしてここに流れ着いた身である。坂本が続けた。

「当てもなくここへ辿り着くと、武闘大会なるものに勝ち残れば、身分は保証され、城に仕えることが出来るという。城を守るが武士の務め、なればと思い参加した次第。ところでお主、得物を抜かんでいいのか」

「侵略すること火の如し、『螢火』」

印を結んだ龍斗の周りに、ぽつぽつと青白い炎が浮かぶ。それは真っ直ぐ坂本の足元へと飛んでいき、着弾と共に小さな爆発と砂煙が上がる。飛んでいった炎10個ほどを跳躍でかわしていく坂本。最後の一個をかわし坂本が体勢を整える頃に龍斗が言つ。

「生憎、我は忍。なおかつ今回は魔法の扱いを主としてある故」

「まさか忍術が本当に効果を持つとは……されど、是非も無し。東殿、お相手願う！！」

奇遇にもランドレイク大陸のエルグレシア王国という異国にて出会つた2つの大和魂。剣劇と歓声が響く中、武士と忍の戦いが始まつた。

第32話・大和の力（後書き）

えー、というわけで（予定にはありませんでしたが）大和人との戦いになりました。……はい。

第33話・龍斗の魔法

坂本は大きく踏み込むと同時に渾身の力で刀を振り下ろした。龍斗が一步動くと、その目と鼻の先を刃が通り過ぎていった。刀は地面に触れる前にピタッと止まり、一度引いて今度は足を払いにかかる。一步後ろに下がることでかろうじて避ける龍斗。

（流石は隴西一刀流、動きに全く無駄が無い）

隴西一刀流は大和の徳間島に伝わる流派の一つ。その神體は一撃必殺の剣。故に1回1回の攻撃が非常に重く、当たれば無事では済まないことは目に見えて明らかである。

しかし無駄が無いという点では龍斗も同じ。洗練された動きで繰り出される太刀筋を、余計な動作無しに全て紙一重でかわしているのだ。一見すると龍斗が不利に見えるが、僅かな移動で済ませることで体力の消耗を減らすことが出来る。また相手の攻撃の隙をつくことも容易となるので避け方としては一番理想的なのだ。時折他の参加者も攻撃を仕掛けてくるが、2人共上手くかわして戦いを続けていく。坂本の刀を龍斗が避ける、その繰り返し。流石にこのままでは決着がつかないので龍斗は思い切り間を開けた。

「そろそろこちらからも行きますよ。『螢火』」

手印を組んだ龍斗は青白い炎を出現させて坂本へと飛ばした。先程の牽制用ではない、攻撃として当てに行くためにさらに多くの螢火が飛んでいく。跳躍だけでは避けきれず、坂本は時々刀で炎を斬り捨てる。炎といえど威力は低く、剣を振る時に起る風でほぼ無力化出来るほどだ。更に炎の数が増える。ついに坂本は回避を諦め、立ち止まって自分に当たりそうな炎を斬つしていく作戦に出た。それを見た龍斗が手印を組み直す。

「動くこと雷霆の如し、『稻妻』」

龍斗の手から青白い光が放たれる。それはあつという間に螢火に混じり坂本へと飛んでいく。自分の身に当たる軌道の炎を刀で斬り

捨てていく坂本。そして他とは違ひ異様な速さで向かってくる青白い光も迷い無しに斬り捨てた。

「ぐつ……かはつ」

呻き声を上げながら大きくのけ反つた。力が抜け、地面に膝をつく坂本。雷撃を受けたことで感電したのだ。刀を支えに肩で息をする様子に構わず龍斗は距離を詰めた。とっさに横薙ぎを放つもあつさり避けられ、龍斗が坂本の懷に入ってきた。

「機会あらば、次は全力、いや剣でお相手願いたいですね」

「……その言葉、忘れんぞ」

口元を歪めた坂本に、軽く衝撃を乗せた『衝拳』の掌底を打ち込んだ。地に伏せる坂本に背を向け、龍斗は呟いた。

「『自ずから約しき盟を破ることなけれ』……大和の教えを破りはしない」

グラウンド内を見渡してみると、残っているのはいつの間にか5人だけだった。龍斗の『霸氣』に屈さなかつた強者、更にその中で争い勝ち残つた真の強者達。その内の3人ほどがこちらを指差しながら何か話をしている。

(1対3か、なら)

3人が頷き、龍斗の方へ走り出したのを見て龍斗は構える。

「忠節尽くし只主の勝利が為我が身を盾と為す。さすれば何人も傷付けること能わず、『忠勝鎧身』」

剣、槍、先端に金属の塊をつけた棒即ちメイス、これら3つによる同時攻撃を龍斗は全て受け止めた。攻撃が一切効いていない様子に坂本と同じ反応をする3人。

先程も使用していた『忠勝鎧身』は防御に徹底した忍術である。

その内容は大陸の魔法で言えば『筋力強化』で筋肉を強化した上に『防御強化』ガード・ポイントで魔力の鎧を纏つておる状態。筋肉を硬直させるために身動きが取れなくなるという欠点はあるものの、防御力は鋼鉄製

の鎧以上に高くなる。

主を逃がすために生きた壁となつて見事守り抜き、幾度となく参加した全ての合戦において無傷で帰還したといつ伝説が残る武将。その人物が編み出した術であるとされている。

「ちい！！」

3人の得物が引いていくのを見逃さず、龍斗が大きく間を開ける。その間にも手印を組み呪文を唱えていく。

「行く川の流れは絶えずしてしかも元の水に非ず、『うちみず擊水』」

龍斗が物を投げるよう手を動かすと、現れた水の球体が男達へと飛んでいく。水を当てられずぶ濡れになつた3人が我に返つた。

「魔法使いか！！」

「詠唱の隙を狙うぞ！！」

「オラ！！」

槍を持つた男を先頭に、再び突進しようとする。だが龍斗は既に呪文の詠唱を済ませていた。

「動くこと雷霆の如し、『稻妻』」

龍斗が放つた青白い光は一瞬で槍の穂先に到達。そこから濡れた棒を伝い持ち主に感電する。煙を上げるのを見てひるんだ2人に龍斗は雷撃を当てていく。3人が完全に気絶したことを確かめた時に、龍斗は足音を聞いて前に転がつた。瞬間、その後ろを何かが高速で走り抜けた。龍斗が姿勢を整えると、相手も急停止してこちらを見た。その手に握っていたのは脇差と同じくらいのダガー。

こちらを見た瞬間に走り出す相手。龍斗も手印を組んで呪文を呴いた。

「動かざること山の如し、『しづね出礫』」

相手の足元に石ころが現れる。何もないことを前提として走つている男はそれに気付かず足を引っ掛けた。たたらを踏んで減速したのを見計らい追撃する。

「其の速きこと風の如し。辻に吹きて斬り裂かん、『鎌鼬』」

体勢を立て直した男に容赦なく襲いかかる真空の刃。見えぬ刃に

なす術もなく服は裂かれそこから赤い血が噴き出していく。しかしこの男、気丈にも踏み止まり、息を荒げながらもなお武器を構えてこちらに歩み寄る。龍斗は少し感心したが、それを表情に出す事は無い。

「速きこと風の如し、『突風』」

龍斗から男に向けて一陣の突風が吹き荒れた。その風は並みの威力にあらず、男は軽く10mほど吹き飛ばされた。大の字に伸びているところに魔法で出てきた足元の石を蹴り飛ばす。それは見事に、男の股間に命中した。その衝撃に四肢が跳ね上がり、脱力して地面に落ちた。

「おーっと倒れた！！ 10、9、8、7……」

進行役の声が魔法具を通して会場に響く。春闘のルールの1つ、10カウント。地面に倒れた後10秒間起き上がりなかつた場合はその人は敗北となる。会場全体がカウントダウンを齊唱する中、龍斗は腕を組み歩き出す。

「6、5、4、3、2、1、0。しゅーりょー！！ 第3ブロック、50人のバトルロワイアルを制したのは！！ 東龍斗だーーーー！」

『ウオオオーーーーー！』

その歓声に何の感慨も抱かぬまま、龍斗は会場を後にした。

額を抑えながら「ロッセオの出口に向かうと、そこには見慣れた2人が既に待機していた。

『お疲れ様です、龍斗様』

「……おう、2人共。小技とはいえ流石に連発するもんじやないな。マジで疲れた」

「それは当然です。魔力は無限にあるものではありませんし、龍斗様の魔法は少し特殊ですし」

「本来必要な魔法陣の展開を、手印を組むことで省略。呪文も普通の方と比べればかなり短いですし」

レイア、ミーアは少し呆れたような口調で言った。

「それもそうか。50人もいて荒れてたのは幸いかな。最後の方で知られたかもしけんが……次からは確実に駄目だな。1対1だし、魔方陣無しで魔法使ってたらまずいわな」

苦い表情で答えながら、龍斗達は宿へと帰つていった。

第33話・龍斗の魔法（後書き）

魔法戦は難しい……

ユニーク6000人越え、お気に入り77件、総合評価217、皆さん有難うござります。

第34話・第2回戦 魔術師アゲート（前書き）

どうでもいいことだとは思いますが対戦相手の名前を知り合いに考
えてもらいました。それに私はミドルを入れたんですが
有難うござります。では、どうぞ

第34話・第2回戦 魔術師アゲート

3日後、第1回戦が全て終わり、第2回戦へと進んだ32人がコロッセオのグラウンドにいた。まだ日が昇つて間もないというのに、会場内は既に熱気に包まれている。今行われているのは第2回戦の抽選。トーナメントの位置決めである。着物姿の龍斗は相変わらず腕を組みながら静かに様子を見守っていた。進行役の声が響いた。

「第2回戦以降のトーナメント表を発表いたします！！ モニター、カモン！！ 参加者の皆さん、カードに表の情報を送りますので、そちらを1確認下さい！！」

龍斗は自身のカードを呼び出した。見てみると春闘参加を証明するマークが青い光を放つて点滅している。試に指で触れてみると、薄い膜のような光がカード上に現れ、黒い線が枝分かれになっている図が浮かび上がった。その末端は上に16、下に16。下段の左から2番目の所に赤い点があるのを見つけ、そこに触れる。途端に図が拡大され、それぞれの線の下に人名があるのが分かつた。赤い光が点滅している下には東龍斗と書かれている。参加者の頭上には膜を形成している光が巨大な球体となつて浮かんでいる。これでコロッセオのどこにいてもトーナメント表が確認できる。

「抽選の結果、トーナメント表はこのようになりました。参加者の皆さん、見てる分には自分の名前の上に赤い点滅があります。これは皆さん、トーナメントをどこまで進んだかを示すマークです。勝ち進む毎にそのマークも動いていきますので、頑張って下さいね。試合の進行は下段の左端から、その次に上段の左端からという順番です。それでは第2回戦第1試合を始めたいと思います！！

第1試合の選手以外はグラウンドから1退場下さい！！ 選手の2人は中央にお願いします！！」

龍斗はもう一度カードを見た。自分の名前があるのは下段の左から2番目。その線は左端にある線と合わせて1本になり先へと続

いている。

(と、いひことは……俺は第1試合か)
カードを仕舞つた龍斗は中央へと歩いていった。

夜を思わせる濃紺のローブを身に着けた男。胸の中央部には透明な石が月のように輝いている。左手に持つ短い棒にも同じような石が嵌めてあつた。棒には華美な装飾が施されているが、それは単なる飾りではない。短棒はワンドと呼ばれる魔法具で、その装飾には魔力增幅の効果がある。石も魔法石と呼ばれるものである。

魔法石は自然の中に存在する魔力が凝縮、結晶化したもので、魔法を使う際の補助として大いに役立つ物である。またほとんどの魔法石には属性がある。属性持ちの石に魔力を通すと、その属性の魔法の威力が格段に上がるのだ。例えば、龍斗と対峙している男のワンドには炎属性を表す赤い魔法石が嵌まっている。これに魔力を通して炎属性の魔法を発動した場合、何も使わない時の5倍は威力が変わるので。またワンドや魔法石を使うことによって本来必要な詠唱を省略する事も出来る。

無論この男は、大陸では一般的な魔法を用いて戦闘をする者、即ち魔術師である。

(さて、本格的な魔術師を相手に、俺の術がどこまで通用するのか
……)

和服姿で腕を組む龍斗は静かに相手を見据えた。因みに今回は太刀『東雲』を背負つていない。使わない武器を持つていても意味がないので、宿屋の部屋に置いてきた。

「それでは第2回戦第1試合を始めます！――

進行役の宣言が響いた後、男はワンドの中央を持った左腕を前に出してきた。そのまま静かに言葉を紡ぐ。

「私の名はアゲート・パウロニア・ジャスパー。見ての通り魔術師だ。して、貴方は」

相手の名乗りに応じるのは大和の礼儀。何の表情も出さずに龍斗が応えた。

「東龍斗。近接格闘もあるが……一応、魔法だな」

「ほう、そうですか。では魔術師同士、正々堂々
ゲオハルトの言葉は途中で止まつた。代わりに目が大きく見開かれる。龍斗が何か動いたわけではない。ただ腕組みをして立つているだけ。だがゲオハルトにはその姿が2倍にも3倍にも大きくなつたかのように感じた。それは龍斗から放たれた威圧感故のものなのだが、それをアゲートが知る由もない。

「……流石にバトルロワイヤルを勝ち残つた人間。そりや霸氣」と
きで倒れるわけないわな」

「な……何をした……！ 炎の精靈サラマンダーよ！！ その偉大なる御力を我に与えたまえ！！ 眷属に与えしその力、その業火を今ここに示せ、『フレイム・バーナー』！！」

「ゆく川の流れは絶えずしてしかも元の水に非ず、其は全てを押し流す怒涛、『鉄砲水』」

アゲートが持つ棒の装飾が光り出し、彼の正面に1つの魔法陣が現れる。更に、赤い魔法石が光を放つと魔方陣が赤く染まり、人を丸ごと飲み込むような大きな炎が龍斗に向かつて真つ直ぐ進んでいく。

対する龍斗は、手印を組んだきり暫くは動かなかつた。相手の詠唱途中から呪文を唱え、相手とほぼ同時に魔方陣を展開させた。アゲートの赤に対し龍斗の青く光る魔方陣からは、言葉通り人どころか家ですら流れていきそうなほどの大量の水が炎に向かつて進んでいく。

「なつ、なんて早さだ……ワンドの魔力増幅、魔法石の力まで使つて……」

水蒸気を上げながらも炎と拮抗、いや、徐々に飲み込みつつある水流を見てアゲートは驚いた。

第34話・第2回戦 魔術師アゲート（後書き）

アゲートは勇気、ジャスパーは生命力とか自然の回帰とかそんな意味だそうで。

大陸の一般常識で魔法とは詠唱系魔法のことと指す。魔法の発動に魔力が必要なのは言つまでもないが、もう一つ重要な要素として詠唱がある。

詠唱とは、魔法を使う代償として魔力と共に神や精霊に捧げられる言葉である。そもそも詠唱系魔法というのは、大陸で広く信仰されている宗教上の神や精霊にその信仰心を示し魔力を与えることで、与えた側が神や精霊の加護を享受しその力の一部を具現化することが出来る、という物である。端的に言えば、

「天の神様精霊様、私は貴方の事をこれだけ深く信じてます敬愛します尊敬してます。その信仰心と魔力をあげるから見返りに貴方たちの力を使わせてね」……という理論なのである。

そして詠唱の要素は3つ。

「対象」どの神や精霊に捧げるのか、冒頭につく「～の神／精霊よ」の部分である。

「心象」心に浮かぶイメージ、つまり神や精霊の力や自分が起こそうとする現象のイメージを固める部分であり、言葉としては神や精霊への祈り、お願いをするような文面になる。

「現象」どのような現象を起こすのか、これは大抵魔法の技名として収まる。

この内「心象」の部分は人によって長さも言葉も大きく変わってくる。それは魔術師の力量に関係する部分で、力量のある者ほど省略することが出来る。同じ神に祈り同じ現象を起こすのにも、「心象」無しで使える魔術師もいれば「心象」に何分もかけてようやく出せるといった者もいるのだ。

最終的に詠唱で不可欠なのは「対象」と「現象」だけ。戦闘において長々と呪文を唱え続けることなど出来ない。その間は大きな隙が出来るからだ。何十人を巻き込む攻撃が出来たところで発動させ

る前に封じられれば意味がない。だから魔術師にとつて早さというのは非常に重要な要素である。如何に呪文を省略し、如何に早く唱え、如何に強力な攻撃が出来るか。そしてどれだけ状況判断が出来るか。それが魔術師に求められる技能なのである。

呆気にとらわれていたアゲートは魔術師に必要な力の事を思い出しに返つた。何とか判断力を取戻し、再びwandに魔力を通す。

「くつ、俺としたことが。水なら雷だ……雷の神トールよ、その鉄槌は敵せん者を全て打ち碎く!! その御力を我に与えたまえ!!」

その力にて我が敵を貫かん、『ミヨルニル・サンダー』!!』

wandの装飾、そして今度は赤い石とは真逆の位置にある黄色い魔法石が光を放つ。赤い魔法陣が消滅すると共に黄色い光の魔法陣が現れ、火炎から雷撃へと変わっていく。その雷は意思を持つよう宙に集まり、やがて巨大なハンマーのような形を作つて龍斗へと落下していく。

しかし龍斗の対応も早かつた。

「『我田引水』、水を以て壁と為す、『水壁』」

炎が消えたと同時に素早く手を動かす。すると一直線に噴出していた水が軌道を変え、魔方陣を中心に巨大な球体となる。両手を広げるよう動かすとそれに合わせて水も形を変え、結果龍斗の眼前には水で出来た巨大な壁が完成した。

水の壁と雷のハンマーが激突した。周囲に轟くは雷鳴と水の蒸発する音。先程よりもさらに多い水蒸気を発しながらも、水は電気を吸収し龍斗に当たるのを防いでいる。アゲートの集中が切れたのか、黄色い光の魔法陣が消滅した。肩で息をしつつ龍斗の方を見る。

「な、なんて奴だ……上級魔法だぞ、それを水で作った壁に吸収するなんて……しかも何なんだ、陣を変えてないのに、水が形を変えた……? 水は専門外だが、そういう事じやない。火だろうが雷だろうが、形変われば陣も変わるはず……」

魔法は対象に祈りを捧げ、攻撃のイメージを心象で固め現象を起こす。それが大陸における「詠唱魔法」の一般常識。だが龍斗の使う魔法は「魔法」ではない。「忍術」であり「妖術」なのである。

そもそも龍斗は「対象」、神や精霊に祈りを捧げていない。「心象」の言葉しかないといえる。その「心象」の言葉の中にも属性を指定する言葉はあれど神に対する言葉は無く、あるのは「現象」に対するイメージのみ。これは龍斗が15年間暮らしてきた島国大和で教わった術の呪文だからである。大陸と大和では根本的に文化が違った宗教観も違う。それが魔法発動の呪文にも影響していると考えられる。

そしてもう一つ、上級魔法と張り合つほどの魔法を使つておきながらその詠唱はかなり短い。これは手印という大陸の魔法には無い物を組んでいるからである。様々な組み方を全て覚えるのも大変だが、それを瞬時に組むのはもつと難しい。しかしこの手印を上手く結べなければあらゆる術を発動させる事は出来ない。龍斗はそう教えられて育つってきた。しかし2年間の修行期間の内に龍斗は気付いた。

結論を言つと、この手印を組むという行為はアゲートのワンドや魔法石と同じ、魔力増幅、属性指定の効果を持つものだったのだ。更には魔方陣と同じ役割も果たしている。余談としてマー・ティス姉妹の見解を挙げると、魔法というものの理論が確立されていない時代、魔力を持たない者が無理に術を発動させようとした名残ではないかとのこと。大陸でも詠唱魔法を戦闘でメインに出来るほど魔力を持つ者は少ない。元々発動させることが出来る人間が少ないがために大して効果の無いものと看做されるようになつたのでは、という話である。

「さて、そろそろ行くか」

龍斗は再び腕を動かす。それと同時に水の壁がさらに形を変え、また巨大な球体となる。だが今回はあちらこちらに電気のスパークが走っている。アゲートも今度は硬直せず、相手が動くと同時に呪文を唱えた。

「炎の神アグニ、雷の神トールよ……汝らの力をここに……『ファイアボルト・ストーム』……」

「『我田引水』、其はあらゆるものを飲み込む大波、『波浪』」手印を組むと水球が弾け、大きく広がりながらアゲートへ向かう。アゲートは赤と黄色2つの魔法陣を展開し、下級魔法の小さな炎と雷撃を連続して何発も撃ち続ける。だがそれらは全て水の中に消えていくだけで、どれ1つとして龍斗に届く事は無かった。

「ぐつ、ぐあつ、あ、あああああ……」

波がアゲートを飲み込んだ。全身が水に濡れていくと同時に自身が放つた雷に身を貫かれ苦痛に顔を歪める。波が通り過ぎた後、アゲートはもはや立っているのがやっとだった。ふらふらと体を搖らし、朦朧とする意識の中、辛うじて顔を上げ龍斗を見るアゲート。いつの間にか自分の隣まで龍斗が歩み寄つてきていたが、もう驚く事も出来やしなかった。ワンドにも光は無い。

「……は、はは……規格外だな、あんた。宫廷魔術師に憧れ12の時から魔法を習い始め、ただひたすら修行を積んで……あれから10年、異名をつけられる程実力はついたはずだったのにな……何が【雷火のアゲート】だ……」

「10年であれだけ出来るのか、それは貴方が真の実力者である証拠でしょう。力の使い方は違いますが私には上級魔法は使えません。来年、同胞として共に働くことを願いますよ」

「そうか……少年、決着をつけてくれ」

「では、いざれまた」

龍斗はアゲートの肩を軽く押した。何の抵抗もなく、アゲートは地面に倒れた。

(また、か。1年……精進あるのみ、か)

観衆の声援、歓声も、カウントダウンも待つことなく出口に向かう少年の背を視界に納めた後、アゲートの意識は深い闇に沈んでいった。

第35話・魔法合戦（後書き）

やたら理屈つぽい話になつてしましましたね。これ何かありましたら感想頂けると嬉しいです。ユニーク6600人越え、お気に入り80件突破、本当にありがとうございます。

第36話・意外な再会

「はあ、今回も結構な魔力使つたなあ」

「お疲れ様です」

場所はコロッセオの入り口にあるホール。試合を終えた龍斗は既に待機していたマーティス姉妹と共にベンチに腰かけていた。観客席から見ていた2人の客観的な意見を聞きたいがために龍斗が提案したことである。

「で? 2人は見ててどうだつた」

「そうですね……手印と魔方陣を出していったので2重に魔方陣を開しているような状態ですよね。その分魔力を無駄に消費しているのでは……」

「でも魔方陣無しで発動する魔法は普通あり得ないわ。龍斗様が何も隠さずに戦うのならともかく、普通の魔法と同じように偽装して発動させる以上は仕方のない消費よ」

ミーアの見解にレイアの反論。龍斗はその言葉に頷いた。

「やっぱそれか、そこは仕方ないよな」

「それともう一つ。我田引水、でしたか。あれもあまり使わない方がいいと思います。そこに無い水を1から生み出すよりも、既にある水を利用する方が効率が良い、また魔力の消費も少ないとメリットは大きいですが……やはり普通の魔法とはかけ離れていますので……」

「む……色々便利なんだがな……まあ、変に目立たたくないからなあ」

背もたれに体重を預け天井を見上げた龍斗に、突然黒い影が落ちた。

「それは無理つてもんですな。若い魔術師つてだけで十分目立つてまさあ」

藍色の田は影の主を捉えた。白銀に輝くフルプレートアーマーを

着用し、片手には槍と斧を合体させたような武器、ハルバードを持つていて。『ロッセオの随所に配置されている王国騎士団の格好である。しかし龍斗には王国騎士団員の知り合いなどいない。あらゆる感情を消し去り、無表情になった。

「それは参りましたね。ところであんたは？」

藍色の目が相手を見据える。

「ん？……クク、ハツハツハ、そうか、すっかり忘れてた。これじゃ顔も分からねえわな」

突然笑い声を上げた相手は開いている手で顔全体を覆う兜を取つた。中から現れた顔を見た途端、3人は一様に同じ反応をした。

『あ、貴方は！！』

「お、思い出してくれましたかい？俺は、いや私あ2年前、あんたに奴隸身分から解放してもらつた内の1人でさあ」

そこにあつたのは茶色の瞳に金髪、無精ひげを生やした壮年の男の顔。初めて見た時は絶望や諦念が色濃く出ていた瞳には活気があり、髪型もしつかり整えられていてまるで別人のよう。しかしそれでもあの時の面影がしつかりと感じられた。

「驚いた。王国騎士団になつていたんですか……ええつと……」

「あ、そういうあの時は名乗つておりませんでしたな。ま、奴隸に名前などいらんつてのが普通だし。俺は、いや私はマルコ。マルコ・ファスバンズだ」

「東龍斗です。……敬語なんていりませんよ。貴方の方が年上ですし、何より主従関係でもない」

龍斗は自分のカードを見せた。大陸の人間は漢字名に馴染みが無いので、そうした方が話が早い。

「いや、でもな……ま、いいか。本人がいいつてんなら。それに俺も堅苦しいのは嫌いだしな」

1つ笑いをはさんだ後、マルコは2人の少女に気付き視線を向けた。2人は一瞬身構えたが、直ぐにそれが杞憂であると理解し警戒を解いた。マルコが向けた視線は下賤なものではない。父親が愛娘

に向けるよつた、優しく温かいものだつた。

「お2人さんも、元氣そうで何よりだ」

「マルコさんもお元氣そうで……あ、申し遅れました。私、ミーア・フォルデント・マーティスと申します」

「その姉、レイア・フォルデント・マーティスにござります。改めて以後宜しくお願ひします」

「へえ、ご立派な名前で……あんた、あの時の約束、ちゃんと守つてくれてるようだな。改めて感謝する」

頭を下げるマルコに苦笑しながら龍斗が言った。

「いや、大したことじゃありませんよ。あれ、貴方ともう1人は先に出ていきましたよね。黒髪の男との約束を何故知ってるんですか？」

「ああ、あの後暫くしたら信じられん速さで追いついてきてな。彼女らの事はあんたに任せたと軽く聞かせてもらつたのさ。しかし、つくづく不思議な男だつた……」

龍斗は頷いた。しかしその話題はそれ以上続くことは無かつた。暫くは誰も喋らなかつたが、やがてレイアが口を開いた。

「1つお聞きしてもよろしいでしようか、マルコさん」

「ん、何だ嬢ちゃん」

「今回の春闘……勝ち残つた他の方は一体どのよつな方々なのでしようか？」

マルコは顎を撫でながら、視線を上にやつて思い出すよつに答える。

「ええつとだな、基本的に有名な実力者ばつかだぞ。さつきあんたが倒した魔術師、あれだつて【雷火のアゲート】つて異名をつかけられてる。実際受けてみて分かつたるうがその2つの属性魔法に関しては相当強い。魔術師に関してはもう1人、【毒呼び】つて異名の奴がいたか。猛毒を持つ魔物を召喚して戦わせる恐ろしい奴だ。勝ち残つて魔術師で言えばそれくらいだな。その2人とあんたの3人だけだぜ、トーナメントに進めた魔術師は」

「なるほどな。戦士の方は？」

「ええと、【重力無視の突撃槍】

アンケラグバイティ・ランス

ネット【コードン・ウォルマン、【一撃必殺】コータ・ホンドー、いや、

確かあんたと同じで漢字名だった。それで言えば本堂浩太。俺の知る限りではそのくらいか……あ、もう一人、いやでもなあ……

「ん、その1人がどうかしたんですか？」

龍斗が突っ込むとマルコは眉を顰め、頭を搔いた。

「いや、有名なのは有名なんだが、力量とかじやなくて悪い意味でな……ヴァンサー・ディ・ガートランド・ベル・オルドラン。オルドラン伯爵家の三男坊だ。普段から素行が荒くてな……ん、どうした？」

3人が視線を交わす様子に疑問を感じたマルコ。頬を搔きながら苦笑する龍斗。

「ああ、いや参加手続きの時にちょっと、ね」

「……おいおい、奴に関わるなと言おうとしたのに……あいつは家の権力振りかざして好き勝手やってるどうしようもない奴だ。酒場で飲み食いしては暴力で踏み倒し、何かといちやもんつけては金を巻き上げ女を連れ去らう。あ、分かった。嬢ちゃん達に目をつけたな。まあ、そんな奴の事だ、どうせ試合も汚い手しか使わねえだろうよ。個人的にはぶちのめしてやりてえが……」

「貴族の子供じゃおいそれと手は出せない、か」

龍斗が続きを引き取った。マルコ含め全員が頷いた。と、その時、誰かがマルコの名を呼んだ。どうやら勤務交代らしい。

「ま、頑張つてくだせえや。ベスト16止まりだった俺が言える義理じやないがな」

「いえ、貴重なお話有難うございました」

「なに、奴隸から解放してもらつたに比べりゃなんてことない。あ、そうだ」

兜を被り立ち去ろうとしたマルコの動きが止まった。何の前触れもなく龍斗は嫌な予感がした。

「……龍斗さんよ、最後に聞かしてくれ……どっちが本命だ？ さぞかし良い夜過ごしてるんだろ？」

『えつ』

姉妹が声を上げるとほぼ同時に、龍斗は移動し鎧の肩に手を置いた。

「2人共俺の義妹だ。身内に手を出すほど甲斐性無じじゃないぞ」龍斗の口は笑っていた。だがその口は表情とは釣り合わないものだった。非情を極めた、暗殺者のような口を向けられた鎧は、顔こそ見えないもののあちこちでカタカタ音を鳴らしていた。

「じゃ、じゃあ元氣でな！…」

軽く裏返った声でそう言つと、不自然な音のする鎧はホールから去つていった。

「……龍斗様？」

「いや、気にするようなことじやない。さて、明日はどうすつかなあ。もつ王國騎士団員になるのは確定したし、相手次第かな。取り敢えず、宿に帰るか」

『はい』

「ロッセオを出ると、空には灰色がかつた雲が広がつていた。来た時に比べると風も強くなつたように感じる。雨が近い、と3人は足早に宿へと戻つた。

第36話・意外な再会（後書き）

ホントは35話の最後にチョロッとつけるオマケくらいの話だったんですが、文字数稼いだんで分けておくことに。

第37話・第3回戦 1・対戦相手

「第3回戦、第4試合、勝つたのは……ゴードン・ウォルマンだーーー！」

『ウオオオオオオー————!!』

控室のような場所で、龍斗は第4試合の終了を告げる声を聞いた。それから約10分後、龍斗は騎士団の1人に呼ばれ、コロッセオの中央へと歩いていった。定位位置についたところで進行役の声が会場に響く。

「では第5試合の選手を紹介しましょうーーー！　まずは、異国大和の服装をした青年、かの有名な【雷火のアゲート】を下した若き天才魔術師、リュウト・アズマだーーー！」

『ウオオオオオー————!!』

流石に3回目ということもあって空氣に慣れた龍斗。眉1つ動かず静かに相手を待つ。その正面の登場口から相手が現れると、進行役が珍しく詰まりながら声を張り上げる。

「対するはー、あー、エルグレシア王国貴族、伯爵位、オルドラン家の三男坊、ヴァンサード・ディ・ガートランド・ベル・オルドランーーー！」

『オオオオオ……』

明らかに歎声の声色が変わっているにも構わず、男は悦に入った様子で、金色の装飾が施された華美な胸当てを見せつけるように闊歩してきた。顔に付けているのは同じような装飾のヘルム。マルコ達騎士団員が付けていた顔全体を覆う兜ではなく、その中から額当てと頬当ての部分だけをつけたような形である。それ故に顔は丸見え。浅黒い肌に金髪、その奥に見える青い目。間違いなく龍斗が大外刈りを掛けた相手であった。左手の盾にはオルドラン家の紋章と思われる模様、翼を広げた双頭の鷲が描かれている。右手には片手剣の一種ブロードソード。鍔の部分は白い鳥の羽を寄せ集めたかの

ような形であつた。その剣と盾を頭上に掲げたヴァンサーは、意氣揚々と声を上げた。

「よく見ておけ平民共！！ これが我が家の紋章、オルドラン家の紋章だ！！ 伯爵家の紋章などそうそう見られるもんじゃねえ。更にこの剣は先祖代々家に伝わる由緒正しき聖剣だ！！ どこの馬の骨か知らんが、平民！！ その魂、この剣に捧げてもうぞ」

切先を龍斗に向け、にやけた顔をするヴァンサー。ヒーロー気取りでかつこよく決まつたと思っているようだが、それを歓迎する声は何処にもない。観客のほとんどは呆れてものも言えず、微かに失笑を漏らす者がいる程度だつた。龍斗も観客席にいたら同じように笑つていたかもしぬれど、表見上はあくまで無表情に務めていた。

（魂を捧げるだと？ 武闘大会では結界のお陰で死ぬことはないんだろうが。そんな初步的なところも忘れてるのか）

が、予想以上に呆れた龍斗は表情を崩し溜め息をついてしまつた。「なつ、貴様、今俺様の事を馬鹿にしたな！！ 俺を誰だか分かつて……ん？ 貴様、何処かで見たことが……」

その様子を見たヴァンサーが怒りを露わにしてきたが、途中から首を傾げて龍斗を注視した。鼻で笑つた龍斗はしつかり覚えてるので、挑発の意味を込めて言つた。

「ほう、私の事をお忘れですか。そりやあそうですよねえ、あの時は義妹に目が眩んで他のことは一切見えてなかつたんでしょうからねえ。おまけにその後は氣付いたら天井を見上げてましたっけ？」

笑顔でそう語りかかると、一瞬呆けた顔をしたヴァンサー。だがその次には湯気が立つほど真つ赤になり、龍斗を睨みつけた。

「貴様……！！ そうか、あの時俺様に無礼を働いたあの！！ 平民の分際で貴族に手を擧げるとは……ん？ そうか……フフフ、貴様には俺から最高の礼をしてやる……全員、さつと出でこい！」

！」

今しがた自分が出てきた登場口を振り返つたヴァンサー。それ

につられて龍斗や観客も視線を向けた。そして全てを知り口元を歪めるヴァンサー^ド以外、全員の顔に驚きが広がった。

「おいおい……」

「正氣か！？」

「普通に無じじゃろ……」

「あり得ん……まさかここまでとは……」

観客達がざわつき始めた。臨機応変な対応を心掛けている龍斗ですら思考が固まって反応できずにいた。龍斗が正氣を取り戻した時には、ヴァンサー^ドの周りを5人の人間が取り囲んでいた。

緑色の髪を持つ筋肉隆々の大男は片手斧を持っていた。しかしその刃がある部分、斧頭はヴァンサー^ドの盾よりも大きい。青い髪の男は穂先が棒の両端についた特殊な槍を持つている。恐らく魔術師であろう赤い髪の少年は、アゲートが着ていたようなロープ姿に身長とほぼ同じくらいの長さの白い杖を持つている。あと2人同じよう口一言姿の者がいた。こちらはフードを被つていて顔を見る事は出来なかつたが、隙間から出した手の得物で、おおよその戦闘手段が分かつた。

（でかい斧、槍、魔法。顔が見えないから男か女か分からんが……片や弓、片やダガー2本。それはいいが、何故ここに？）

その疑問を口に出す事は無かつたが、聞かずともヴァンサー^ドから種明かしをしてくれた。

「クツクク、どうだ、なかなかバランスの良い構成だろう。貴様のために揃えた手駒だからな。貴様の相手をするのはこいつらだ」

「なつ！？」

龍斗が驚きのあまり声を上げた。途端に巻き起こるブーリングがコロツセオに響き渡る。

「卑怯者――――」

「なんて奴だ！――」

「正々堂々やりやがれ――――」

「大体、そんなの反則だろ！――」

その声を聞いた龍斗は頭を振り、ヴァンサーードを睨みつけた。

「1回戦のバトルロワイアルならまだしも、第2回戦以降のトーナメント戦は1対1の真剣勝負。それ以前に、グラウンド内には選手以外の人間は入れないはずだが」

そう言つと相手はいつになく豪快な笑い方で龍斗の言葉を跳ね除けた。

「ハツハツハツハツハ、これだから平民風情は。確かにルールはそうなってる。だが同時にこうも書いてある……選手がグラウンド内に持ち込めるのは戦闘に必要な道具のみ」

「……何が言いたい」

龍斗の視線がより鋭く、声色もより低くなつた。しかしヴァンサーードはそれに全く気付く様子もなく嬉々として言葉を続けた。

「こいつらは『戦奴隸』、主の命令で動く戦うための『道具』なんだよ！――」

「……何か、嫌な予感がする……」

登場口から出てくる相手を見て私は思わずそう呟いた。しかし直ぐに隣から否定する声が現れた。

「大丈夫よ、龍斗様なら。魔法、というか術に絞った状態で1対1の魔法勝負を勝ち抜いたんだもの。心配いらないわよミーア」

他でもない姉さんの声だった。同時に姉さんの手が自分の手に重ねられた。自分で気付かないうちに手に力が入っていたみたい。肩の力を抜くと、姉さんが微笑みかけてきた。私も同じ表情で返し、2人ほぼ同時に姿勢を直してグラウンドを見る。相手の貴族、ヴァンサーードだけ？が剣を高く上げて何か言っているけれど、まるもにそれを聞いている人なんかほとんどいない。私達も多分に漏れずそれを聞き流した。視界の中心に納めるのは勿論、龍斗様ただ1人。長い前座があつたけど、前と同じように戦いが始まるんだ、と思つた。

でも予想外のことが起つた。ヴァンサーードが出てきた登場口から、新たに5人の人が武器を持って出てきた。会場中が騒然とした。私も呆気にとられていたけど、姉さんが漏らした言葉で気を取り直した。

「……まさか、1対6！？ いえ、そんなことすればルール違反なのは分かつてはるはず……」

そうよ。得物は何を使うも自由、けど第2回戦以降は1対1のトーナメント戦。グラウンドに入れるのは選手のみと定められている。数少ない春闘のルールは1つでも破るとその場で参加資格を失う。それほど厳しいものであることはあの貴族の人にも分かつているはず。なのに何で……

そう思つた私はあることに気付いた。以前、参加者登録の際にヴァンサーードと接触したけど、特に力量があるようには感じなかつた。

「忍は気配を消す術を持つてゐるが、そんな術大陸には無いんだつたな。ならあれば素直に実力が無い。実力のある強者ほど強い氣を感じるもんなんだが、あいつからは特に何も感じないし、隠してゐるつてわけでもないからな」

後で聞いてみたら龍斗様もそう言つていた。そんな人が、実力の無い人が、今までどうやってここまで勝ち残つてきたのだろう？……それに私達に向けてきたあの欲にまみれた汚い目を見る限り、到底良い性格をしてゐるとは思えない。ひょつとして、ここまで勝ち残つてこれたのも真つ当な手段じやないのかも。

そこまで考へた時、フツと空氣が変わつたのを感じた。その中心はグラウンド。まさかと思つたけど本当にそのまさかで、龍斗様の気配が変わつていた。そのことは問題じやない、と思う。今まで龍斗様は理不尽な理由でこうなつたことはない。となれば問題なのはそうさせた側だということ。

「……姉さん……嫌な予感がする」

「あら奇遇ね……私もよ」

相手の笑い声の後聞こえてきた言葉に、私も姉さんも背筋が凍つた。

「こいつらは『戦奴隸』、主の命令で動く戦うための『道具』なんだよ！！」

「……何だと」

藍色の目がヴァンサーードを鋭く睨みつける。龍斗の視線が矢であれば、ヴァンサーードの目は節穴であつた。龍斗の様子に全く気付く様子もなく得意げに持論を展開する。

「だつてそうだろう、主人の命令に従つて動くんだからよ。人形と一緒になんだよ奴隸なんてよ。そうなると、差し詰め俺は人形使つてえわけだな！！ 人形が、道具が、幾らあつても人數には入らねえそもそも奴隸は人としての権利が認められてねえ！！ どうだ、

「の中に、それを否定できる奴がいるのか！！ ええ！！」

誰もが口を閉ざした。奴隸になつた者に自由は無い。『拘束の手枷』と呼ばれる魔法具や『束縛の呪い』といった魔法で自由を奪われ、主人に服従しなければならない。まして奴隸は「商品」として売買される。確かにこれではヴァンサーードの言ひよつに人形を扱う感覺と、道具を操る感覺と大差無い。

（……だがな……）

と、その時、何かを思いついた様子のヴァンサーードが進行役に向かつて大声を出した。

「うーん…… そうだ。おいお前！！ この戦いは決闘にするぞ！！

貴様、立会人にしてやるから誓約を！！」

「ハツ！？ え、いや、それはその…… 双方の合意が無ければ……」

と、その時、龍斗は2つの影を感じ取つた。それが着陸すると、龍斗は目を見張つた。目の前に現れたのはレイア・フォルデント・マーティスとミーア・フォルデント・マーティスの姉妹だったからだ。念のためといつも持ち歩いている、組み立て式の槍を構えている。

「お前らつ何で」

「私達も参加させて下さい龍斗様。私達には参加する権利があります」

「相手があの理論で行くのなら、私達2人は身分上龍斗様のどレイアの台詞を強制終了させるため、龍斗は神速の速さで頭を叩いた。無論ミーアも同時に。」

『あたつ』

見事なシンクロで声を漏らした2人に、龍斗は溜息をついた。小さな声で姉妹を諭す。

「いい加減にしろよ。あんたちは俺の奴隸じゃない。身分上がどうとかじやなくて、2人共俺の家族なんだよ。さつきの理論だ？ なら俺からも言わせてもらつぞ。お前らは俺の命令無しでは何も考え

られない動けない服従するだけの人形か？違うだろ。自分で考えて好き勝手行動できる、自由があるだろ。なら人形じゃない。奴隸じゃない。ちゃんとした人間だ。2年あつてそんなことも理解してなかつたか

『うつ……』

「分かつたら戻れ、と言いたいとこだが一つ教えてくれ。決闘つてのは何だ？」

苦い表情になつた2人が問い合わせた。

「……闘技場で行われる試合は観客の間で賭けが行われています。それとは別に、戦う当事者同士の間で何かを賭けた上で戦い。それが決闘です」

「決闘をするにはまず当事者双方の同意、それから立会人の擁立と立会人による誓約作成が必要になります」

「……分かつた」

そう言つと龍斗は2人の耳元から顔を上げた。姉妹を見てにやけているヴァンサーードに声をかけた。

「決闘は何かを賭けて行うもの、ということらしいが」

それを聞いたヴァンサーードは更に口角を上げた。

「そうだな、貴様はその女2人といや貴様自身ももらつとしよう。ここまで勝ち残つてきたんなら相当な実力者。新たな戦力として加えてやつても良いぞ。あ、そうなると王国騎士団入団は無しだな」

龍斗も姉妹もヴァンサーードに甚だしい嫌悪感を抱いた。賭けを持ち出すのもそうだが、賭けをするならするで普通は自分が何を賭けるのかを言うべきである。自分が欲しいものを言つるのは明らかに常軌を逸している。

（あの時もそうだったが、それしかないのか奴には。相手の要求は俺達3人の所有権ということか……なら）

龍斗は静かな声で言った。

「……そちらが俺の賭け分を指定するなら、こちらも俺がお前の賭

け分を決める。それでも良いのなら、その決闘、受けて立とう」
会場全体に動搖が走り、人々に何かを言つていたが龍斗の耳には届かなかつた。不安そうな姉妹の肩を叩き、軽く微笑んで龍斗は言った。

「この試合、負けるわけにはいかなくなつた。お前ら2人を守りながらの戦闘ははつきり言つて俺には不利となる。だからまあ、観客席で大人しくしてろ。大丈夫、結界のお陰で死にはしないんだし」

「しかし」

「……一蓮托生。大丈夫、俺を信じろ」

逡巡を続ける2人だが、レイアがついに折れた。

「……分かりました。ミーア、行くわよ」

「うん……ご武運を」

マーティス姉妹は龍斗の元を離れ元いた観客席に戻つていった。強化系魔法を使用したジャンプで壁を飛び越える姿に皆が驚いた。（大丈夫、信じろ、か……我ながら弱くなつちまつたな。父さんも爺さんも、よく俺らを守りながらやつていけたな。尊敬するぜ）

龍斗は己に向けて苦笑いをした。

「……では誓約の内容を発表いたします。東龍斗、賭^{チップ}け分は自身と従者2人の所有権並びに武闘大会参加資格。ヴァンサード・ディ・ガートランド・ベル・オルドラン、賭^{チップ}け分は自身と自身が所有する全ての奴隸の所有権並びに武闘大会参加資格。誓約は結んでしまうと内容の変更も破棄も出来ません。以上の内容でよろしいですか？」

「ふん、良いだろう」

「了解した」

「ではこのまま……盟約神ミスラよ、契約神ヴァルナよ、汝らの名の下にこの誓約の成立を宣言する。神に誓いしものなれば、必ず履行されしものなり」

進行役が書いた1枚の紙。そこには双方が何を賭けるか、何によ

つて決着をつけるのかなどが書かれている。男が呪文を唱えると、その紙が光を放ち、やがて赤く染まつていった。光が消えたところで男が声を会場に響かせた。

「さあ、今ここに決闘の誓約が立てられました！！ 立会人は私、春闘の進行役を務めさせて頂いております、タイロン・モリア・リジェンゴート！！ そして会場にお集まりの皆さん！！ 貴方たちはこの決闘の証人となります！！ 大変長らくお待たせ致しました。第3回戦第5試合、スタートです！！」

レイアは既にやつたのでニア視点入れてみました。読みにくかっ
たらごめんなさい。んな

お気に入りやコ一ーク数が増えてこつてるのは有難い」とです。本
当に励みになつております。

何か気になる点とかありましたら気兼ねなく仰つて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606y/>

龍の逆鱗

2011年12月26日21時04分発行